

自 敘 傳

夜が明けた、山の中の夜が。あゝ、あの夜があの儘明けなかつたら――

うとく／＼眠つたやうな、眠らないやうな心持がして、薄ら眼を開いたが、相手の女は雪の上に坐つたまゝ待つて居た。私は女と顔を見合せた。月の光で見た女の顔を二たび朝の光で見た。唇も色を失つて、まるで頬の色と變らない。何うやら身體中の血が心臓にあつまつて、そこで凝結して仕舞つたやうにも思はれる。ぐざと短刀で突刺しても、一滴も血は溢れなからう。

私は覺えず眼を反した。よろ／＼と立上つて、二足三足元來た道を取つて回した。裏山の木立は鈍染んだやうな灰色の中に沈んで、明方の空の色は眞珠貝の裏を見るやうな。

山の中は一夜の間に三たび空の氣色が變つた。日の暮れる頃から眞黒な雲が空一杯にひろがつて、どつと風が出た。一本一草を止めぬ雪

の上を山から山へかけて只吹きに吹いた。山は悲鳴を上げた。眞夜半まで暴れつづけて、風はばつたりと止んだ。一時に天地が森とした。

間もなく月が出た。風に吹き拂はれたのか、空には一片の雲の影さへ見えぬ。山々は月の光に照されて、宛ら大波濤が其儘まつたやうにも思はれた。二人は其時まで洞穴の中に隠れて居たが、月明りに透つた雪を踏んで一足づつ路を辿つた。行先は暗闇の外にない――人生の行手が暗闇であるやうに。二人ながら物を言はぬ。何だかそれが夢の様に思はれた。かうして女を伴れて雪の中を辿ると云ふことが、すべて實在性を失つたやうな、同時に何か象徴めいた深い意味があるやうにも思はれた。

あゝ、あの儘暗闇の中へ迷ひ込んだまゝ、永劫歸つて來なかつたら――左様したら、少くとも戯曲的效果の感能を満足させるやうな、藝術的な終局を見ることが出來たらう。併し本當の悲劇といふものは、極めて散文的な非藝術的なもので、そんな詭向のキャタストローフなど

が有る筈のものではない。見よ、大詰の幕が下りた途端に、夜の帷は又きり／＼と捲き上つた。何の猶豫もあらせず第六幕目が始まつた。あわてて逃場を失つた役者の様に、私は雪の中に跟けながら又起き上つた。

岩蔭を廻つた時に、二人の裁附を穿いた獨師體の男に出逢つた。こんなに早く何處から來たものだらうと訝みながら、道を訊かうと思つて近づく、向うから口髭のあるのが走り寄つて、「こゝら何處へ行く」と、聲を掛けた。

私は只黙つて見返した。

「私は此下に在る駐在所の巡查だ――」

二人の外の世界をまるで考へて居なかつただけ、私は見る／＼顔色が變つた。

巡查はそれをじろ／＼眺めながら、「些と訊ねる者が有つて跡を追掛けて來たので、別に怪しい者と思ふ譯ぢやないが、一應身體を調べるから。」

私は唯々として相手の爲すがまゝに任せた。外套の上から衣囊を撫で下して見て、巡查は頭を振つた。「短刀を持つて出たとあるが、何處へ遣つたか。」

「捨てた。」

「捨てた？」

「何處へ。」

「谷底へ」と、私は機械的に云つた。

「ふむ、女は何處へ行つた。伴侶の女が一人ある筈ぢや。」

此時急にわれに返つて、「女も居る、併し失禮な事のない様にして貰ひたい。相應に身分のあるものだから、二人とも。」

巡査は點頭いた。

「それも承知して居るが、全體何處に居るのか。」

私は思はずあの女を坐らせて置いた方を振回つた。

「え、何處に、何方だ。」

黒い樹の蔭に女の袖が見えた。巡査はつかつかと其方へ進む。私は足を釘附けにされたやうに立止まつたまゝ、只その爲さむ様を見守つた。

何んな問答をしたのか、やがて巡査は女を連れて來た。白い雪の上に立つ黒い樹の幹の間を彼方此方に縫うて——丁度捕手の役人に引立てられて花道を出て來る人質の女でも見るやうに。

私は詫びるやうな眼附で女の顔を見守つた。女は一寸見返したまゝ、直ぐに眼を反した。

「それでは兎に角明迄引返して貰ひませうか」と、巡査も安心したのか、言葉が尋常に成つた。

「貴下方と一緒に！」

「え、左様です」と無造作に言つて、最一人の男と共に先に立つて山路を下つた。最早有無を云つた所で仕様がなない。

私はわざと二間後れて、女の側へ寄添ひながら小聲で、「少時怖へて居て下さい、ね。今に此度如何かするから。」

女は其儘返辭をせずに歩行いて居たが、急に想ひ出したやうに點頭いて見せた。何か外の事を考へて居たのであらう。

私も物を言はなく成つた。

平な、風に吹き曝された雪の中に、一筋來る道につけた二人の足跡がつゞく。追手は此足跡を蹤けて來たものらしい。

やがて路傍に白樺の木が一本道に迷つた様に立つて居る下へ來た。巡査は其根のところを杖にした木の枝で搔き廻しながら、「此處で焚火をしたんだな」と呟く。

二人の手紙を焼いたのだ。永久に過去を葬つたのだ——

巡査はずん／＼行く。

道々昨宵からの話を仕始めた。昨夜おそく京都の本署から電話がかゝつて、これ／＼の落人二人を捕へよと云ふ命令を受けた。それから温泉場の宿屋を軒並にしらべて、やつとそれらしい見當が着いたので、たづねたつねて此山の麓の村迄辿り着いた。直ぐに村役場の書記を叩き起して案内を頼んで徹夜拔道を駈け登つた。此人がそれだと云ふこと。

「昨夜からまんじりともせずに睡いなう」と云つて、巡査は口を噤んだ。

一晩中追跡されて居るとも知らずに居たのか。斯う成つたのも自分一人の所爲の様に思はれて間の悪さの持つて行き所がない。それだけに又一時刻も早く此不面目な狀態から女を救ひ出さねば成らぬ。左様思ふ中から、何うやら斯んな事が前にもあつた——女を伴れて逃げて、途中で巡査に捕まつて引かれて行く——こんな事が、これと寸分違はぬ事が、前にも一度有つたやうな氣がして成らぬ。四邊の物の様子から巡査のあの横顔までが、何うも初めて見たやうに思はれぬ。

併しそんな事が有らう筈はない。若しそんな事が有つたとすりや、何方か片方は諺だ。前のが諺だと云ふのなら構はないとしても、後のが

諺だとしたら、今斯うして歩いて居るのが諺だとしたら、氣の迷ひに過ぎないとしたら——下りの山路は思ひの外に抄取つた。

間もなく谷間の炭焼小舎へ着く。炭焼小舎の主婦さんは、不時の客來にきよとくしながら、自在鍵に掛けた眞黒な藥罐から茶を注いで出した。

「味噌漬でも上がるかね、何もお茶うけ無えだ。」

「小さい土焼の井に入れた物を持つて来て、書記と巡査との前に侑めた。」

私は腹痛を慄へながら片隅にしがんで居た。

そこから麓まで、炭焼の藁香がつけた小徑がうね／＼とつづく。谷川に雪融の水がちよるちよると溢れて、木の枝は下の雪に透して黒い網のやうな林の中には餌のないためか鳥も啼かぬ。

谷川が太く成るに伴れて、麓の里へ出た。川添ひの堤の上を後先に成つて歩きながら、「一體、貴下方は来る道ぢや何處でお休みだつた」と、巡査が訊いた。

「何處と云つても」と口籠りながら、二人が草鞋を買つて穿いた茶店の様子を咄した。

「あゝ、彼の家でしたか。いや、あの噂アめ、怪しからんかぢや。彼れ程訊くのに向見掛けませんなどと、圖太くしらを切りやアがつた」と口汚く罵つて、「此後の事も有るから、一番小ツびどく痛しめて遣らなくつちや。」

私は思はず眼を上げた。二人のために隠して——それは二人が店先に捨てて行つた古靴なぞから後難を恐れたためもあらうが——思はぬ奇禍を購つた上さんをあはれに思ひながら、口へ出しては何とも云ふことが出来なかつた。やがてその家の間近に來ると、巡査は一足先に駈出して行つた。

二人は並んで行く。村の書記は少しく離れて前に立つた。私は女の横顔を見／＼何か云はうとして、幾たびか口の端迄出た言葉を嚥み下した。女は充血した眼を据ゑて、堅く唇を結んだまゝ物を言はぬ。何を一人で考へて居るのだらう、今朝からの出来事を何んな心持で受取つたらう。それが知りたい。私は身に降りかゝつた出来事よりも——出来事夫自體よりも、それが女に與へた影響の方が氣にかゝつた。何だか水を一杯入れた玻璃の盃を兩手で拵けて、おつ／＼足を運んで居るやうな心持もした。

間もなく巡査は背後から駈けて来て、「はゝは、噂アめ、弱つて居やアがつた」と笑ひながら村の書記と肩を並べた。

山から一里の餘、名なしの板橋を渡つて、橋の袂の休茶屋に立寄つた。

これも裁附を穿いた六十餘りの婆さんが土間の、竈の前にしがんで居たが、巡査は知合と見えて、

「やア今日は暑い目に逢つたぞ。婆さま、玉子酒を一本つけてお呉れな」と聲を掛けながらどつかりと縁鼻に腰を下した。

「あゝ、それから」と巡査は土間に立つて居る女の方を振回つて、「此方の着物の裾が濡れて居る様だから乾かして上げて貰ひたいが——さ、何卒此處へお掛けなさい。」

裏の方から色口の若い女が出て来て、六つ位の男の兒が頬く乳房に纏るのを羞しく、婆さんと二人して、女の脱いだ上着の袂や裾を引張合ひながら、焚火で乾かして呉れた。

壁際に倒れて、ちく／＼痛む脇腹を抑へながら、私は凝乎とそれを見て居た。あの二人は何と思つて、あゝして他所の女の着物を乾かして居るのだらう、あの二人の眼には、山から連れられて來た見慣れぬ女の濡れしよれた様子

が、何んなに映るだらうなぞと、そんな事を心に思ひ廻らしながら——
「如何なさいまして」と、女は私の側へ寄添ふやうにして訊ねた。

「なに、最う好いんです。」

「雪あたりぢやないか」と、巡査はちびちび紙めて居た盃を下に置いて、「早く宿へ着いて湯へお入んなさるが可い。え、婆さま、町まで遣つて貰ふのだが、馬は明いて居ないかな。」
「左様だねえ、男どもは野良へ出て居ねえけんど。」

「うんにや、お前達が曳いて行くなり。」

二人は駄馬に乗せられて其家を出た。峠に雪はあつても、里には田圃の水がぬるんで、春の日はぼか／＼と馬の背に當つた。長い袂を眼の上に翳した女の後姿が繪のやうな。藁香を穿いた馬は街道の乾いた土の上をかつ／＼と歩む。

やがて古ぼけた温泉場の町へ這入つた。とある宿の軒下へ馬を曳き込むと、番頭があわてて踏臺を持つて来て、女を抱く様にして下した。巡査は宿の主人を喚んで、何かひそ／＼と指圖をして居たが、「それぢやわたし一度駐在所へ寄つて、直に又何ひますから」と、二人に挨拶

をして、門口から引同した。

二人は女中に伴れられて、二階の間へ通つた。女中は何事も知らぬらしい。靜に座蒲團を出して、それから茶と菓子とを侑めて置いて引下つた。

二人は初めて差向ひに坐つた。

何と云つて可いか、何と言出したものであらうか。私は身體中の神経が刻々に弛緩して行くやうな疲労を感じながら、只相手の顔を見守つた。女の下唇はびく／＼と戦へた。

「如何か爲ようか、直に。」

「如何でも爲るわ」と、女は待設けて居たやうに膝に取附いて、「直に、これから直に。」

「あの巡査は今電報を打ちに行つたのでせうね。」

「家の者なぞに遣つて來られちや——私、堪らない。」

「だが、此處でぢたばたして又遺損つちやア」と、私は相手の顔色を見い／＼言葉をついで、「縱令迎への人に貴方を渡して置いても、私だけは二たび東京へ歸らうとは思はない。」

女は私の手を解いて起直つた。

「貴方は——一度家が出来るか。」
「出られます。」

「屹度？」

「え、屹度。」

斯う云ひながら、女は自分で何を云つて居るか知らないやうな風に見えた。互に出来ない事を出来ないといひながら約束して居る様な氣もした。女も白けた容子に氣が附いたのか、急に振同つて、「出られる、屹度出られる」と聲に力を入れたが、又うつとりして黙つて仕舞つた。

大宮に泊つた夜、あの夜から冷たい白い物が二人の間に立つた。何物かそれは知らぬ。只心中する男女と云ふものはこんなものぢや有るまい。だが、そんな事を云つた所で仕方がない。最早今と成つては無理にも行く處まで行く外はない。

折柄がちや／＼と梯子段に鉤尻の觸れる音がして、「や、此室でしたか」と、巡査が障子を明けて這入つて來た。洋服の腰を鉤屈さうに曲げて坐つたまゝ、彼時から腹痛はどうかなどと尋ねて、「いや、山では驚いた。女が崖からでも落ちて、男一人歸るにも歸られず自殺でもしようとして居るのぢやないかと疑つたのですよ。それだから最初に懷中を調べたのでしたと、言譯らしく云つて、「それぢや奥の座敷を掃除さ

せて置くから、其間に湯へ這入つておいでるが
可い。」

二人は手拭を下げて、廊下傳ひに、河原へ突
出した湯殿へ降りた。二つある戸を別れへに
開けて這入る。硝子窓から日光が湯槽の中へ射
し込んで、黒ずんだ板に荒い木目が浮いて見え
た。湯殿を周つて雨の様な河瀬の音がざぶざぶ
と絶間なしに聞える。

不意に入口の戸をこつくと叩くものがある。
私は湯の中に浸つたまゝ振向いた。三寸程
開けた戸の隙間から、女の乳房から上が見えた
が、あわてて引込みさうにしながら、「彼方は湯
がまるで水の様で、それに垢が一杯浮いてるか
ら垢らないの。」

「ぢや、此方の湯へ被入しやいな。」

「可いんですか、行つても。」

私は只點頭いた。

頭がぐらぐらとした様に思つて眼を開いた
が、何時の間にやら女は傍に居なかつた。一人
湯から上つて濡手拭を持つたまゝ、一足づつ裏
梯子を上つて行つた。奥の座敷の前迄来て、何
げなく障子を開けたが、

「や。」

「お。」

神戸が来て座敷に待つて居た。

「大變な事をして呉れたな」と、神戸は私の手
をとつたまゝ坐つた。私は何とも云へなかつ
た。

「併し最う何も云ふまい。貴方も」と、其處に
居た女を見返りながら、「私が来た以上は安
心して居て下さい。二人の意志は何處迄も立て
るから。」

あゝ、二人の意志と云ふやうなものが有らう
か。それが有つたなら――

神戸の云ふ所に據れば、前の晩から宇都宮へ
来て居たのださうな。「お内からは阿母さんが
お出です、阿母さんに來て貰ふことにして置き
ました。」

女は只黙つて居た。

「ぢや、僕は一寸駐在所の巡査に逢つて打合を
して來るから」と、神戸はわざと席を外した。

女は二たび鏡臺に向つて、一度解きかけた髪
を解きにかゝつたが、急に振向いて、

「今の間に――何處へも行かないで、此場で。」

「此場で？」

「最う母なぞに會はない。」

斯う云つて、男の膝に顔を伏せた。死を決し
た女の男にしなだれかゝる有様程、何とも言様

のないものはない。

女の異議を許さぬ顔色を見ると、私は思はず
一握りの髪を掴んで、ぐるぐると女の頸に捲き
つけて見たが、

「髪の毛が短くて足りない。」

「切つても可い、此鎖で切つて繼いでも可い。」
私は其儘黙つて手に力を入れた。女の顔は
見る／＼充血したが、こんな事で人の命が取ら
れようと思へない。

「紐でも可い、何んな紐でも」と、女は仰向け
に成つたまゝ云つた。

此時位私は女の言葉の俗惡なのに打たれた
ことはない。又此時位痛切に自分の遣つて居
ることが一種の遣つて見づくだなど感じたこと
もない――私は冷たい風が通つたやうな心持

がして、思はず手を離した。

「私は駄目だ、自分の力ぢや如何することも」
と云ひかけて、少時黙つて居たが、「あの人の影
が邪魔に成つて、如何することも出来ない。何
處迄もあの人の影が着纏つて離れない。」

女は可憐な顔をして見返した。

「あの女の影」と、二たび力を入れて云つた。

「時子さん？」と、いきなり起直つたが、「あんな
人何でもない、あんな人に意味はない。」

「併し去年の一月にも貴方は自殺しかけたと云ふぢやないか。其時の事はあの人だけが知つて居るのでせう。」

女は點頭した。

「其時のシトケエンスなら——それを二たびするだけなら、私の地位は語らない、餘りに意味がない。」

「違ふく、去年とは違ふ。そんな事は十九日から分つて呉れた筈だ——あの私の手紙を讀んで下さつたら。」

「ぢや、戀のためだと云つて下さい、只一言」「戀以上——戀など云つては足りない、足りない。」

私は二人の間が再び遠ざかつた様に思つた。二人は手を組合せたまゝ、何方からも物を言はなかつたが、やゝ有つて、

「未だそんな事を思つておいででしたか」と、女が想ひ出した様に訊く。

「あゝ。」

「一緒に死んで下さい、屹度一緒に。最う二人でなけりや死ねなかつた。」

「私を愛するために？」

「そ、そんな事を云はれると、不安に成つた、不安に成つた。」

「何故、何故そんな事を云ふのです。」

何時迄も女は答へない。

廊下に神戸らしい足音がして、がらりと障子を開けたが、

「恰度今阿母さんがお着きでした。三階へ通して置いたから、貴方も後から来て下さい」と言ひ掛けて、後へ下つた。

女は黙つて立上つた。二足三足廊下へ出たが、急に又駆け戻つて來た。

二人は立つたまゝ、相抱いた。

「ぢや、最う其日でなけりや會はないから。」

女は堅くうなづく。

あとは一人に成つた。室の中をぐる／＼廻つて居たが、又ぐつたりと真中に坐つた。坐つたかと思ふと、又立上つてぐる／＼と廻つた。

何を考へて居たのか、頭の中は白紙を見るやうで、自分にも分らなかつた。何れだけ其間に時間が経つたか、それさへ夢の中の様に一切分らなかつた。

「たうとう手渡しして來た」と、神戸はさも厭倦な様に云つて還入つて來た。

「左様」と、私は只眼を上げた。

「彼のしつかりした奥さんが、娘の顔を見ると、眼に一粒涙を溜めて居たが——片方は平氣な

ものさ。

私は古い鏡の中を覗いて、思はぬ自分の影を見た様にひやりとした。

神戸はなほも二人が家出した後の内の人達の狼狽やら、友達達の奔走やらの顛末を咄して、あの阿母さんと云ふ人とも、始終一緒に歩いたが、落着いて、分別のある、あんなのが賢婦人と云ふのだらうなと云つた。新聞は一々手を廻して留めて置いたから其方は安心せよとも云つた。

私はそれを聞きながら、それが皆な自分の仕事だとは思はれない位、餘所事の様に聞き做された。併し自分だけは最う別者に成つた、他人は皆な自分を別者にして見て居るのだと云ふ感じは、幾々と胸に迫つた。神戸も最早元の同じ鍵に繋がれた囚人ではない。

其夜、二人が床に就いてから、神戸はあの日或女が自分の家へ訪ねて來る約束があつたのだと言出した。遠方へ嫁に行く前に、最後に一度逢ひに來るのだが、たうとうそれも滅茶々々に成つた。これで最う逢はず仕舞ひに成るのだらう。新緑の木の間に、日傘の華美な紫が白い顔に映つたのを目に見るやうなとしみ／＼云つた。私は只黙つて聞いて居た。

二人の話聲は三時頃迄絶えなかつた。
神戸が寢入つてからも、私は一人天井を眺め

ながら、まじり／＼起きて居た。此上に寢て居る
管の親と子と二人の上も思はれた——夜もす

がら話し明かしたらしい二人の上も。
朝、眼を覺ましてから、神戸を案内して湯殿
へ下りた。一足先きの上つて、俯向き廊ちに段

梯子を上つて来ると、急に其上の空いて居た室
の障子を明けて、

「もし」と呼ぶ者がある。
目を上げると、兩の眼が充血して、思ひ入つ
た様な女の顔が目に附く。二人は直に其室の中

へ這入つて障子を閉て切つた。
「昨夜は何んなだつた。え、如何でした」と、女
の肩に手をかけながら、急き込んで訊いた。

「酷かつた、酷い目に逢つた。徹宵寝かさない
で。」

「阿母さんが？」

「え、そりやア堪らないことを訊くんですの」
と、稍言ひ濃んだが、「身體を汚されたか、汚さ

れないか、それ前聞きがたつて。」
「そ、左様でせうね」と、私は吃つた。少時何
とも云ふことが出来なかつた。併しそれ位の侮

辱を享けるのは當前ぢやないか。
「私が悪いんだ。嘸、私のことを——悪い奴だ
と思つておいでせうね。」

「そんな事はない／＼。憎めば私を憎むので
す、私がいけない女だと云ふことは、好く知
つて居ますから。」

斯んな事を云ふ間に、段々顔色が落着いて来
た。

「母は貴方と一緒に御飯でも喫べて、好くお話
が承はりたいと云つて居ましたが、小娘ら
しく首を傾げて、「私も皆な一緒に御飯が喫べ

たい——只、神戸さんが中間へ這入るが、可厭
だけれど。」

私は女の心持を測りかねた。

「そんな事を云つても——」

「母が左様云つてましたから——可いでせう。」

廊下を人が通る氣合がした。

二人は息を潜めて、足音が遠ざかつて行くの
を待つたが、

「では」と、私は何か心ならぬやうな氣がして
女を促しさうにした。

女は別に氣にも留めぬらしく、「彼れだけは

よく考へて見ると、彼れだけは出来ないか
ら取消します。」

「何を。」

其目が来る迄逢はぬと云ふこと——そんな事
は逆も出来ない。」

私は二たび女の心持を測りかねた。
前と同じ足音が忙しさに戻つて来て、今度
は三階へ梯子段を上つて行つた。

「神戸さんでせう。」

「左様。」
女は疑乎と天井を見詰めて居た。

「ぢや最うこれで——」

私は倒れかゝる様にして、女を抱へた。棺に
納めた死骸を抱く様に——

女が去つてからも、私は少時其室の中に坐
つて居た。山から歸つた後、女の態度が變つ

た。何處か人懐こいやうな素振が見える。それ
が却て無氣味にも思はれるけれど——併し最う

何も考へまい、萬事が去つた、二人の間に萬
事が去つた。

私は裏座敷へ歸つて一人物思ひする女の様に
しよんぼり柱に凭れて居た。

問もなく神戸が三階から降りて来て、一緒に
朝飯の膳に向つた。

「何うも彼と一緒に来た伯父さんとか何とか云
ふのが分らんので、丸で普通の淫奔して逃げた

若い男や女を捕まへて云ふ様なことを言ふん

私も仕方なしに笑つた。

神戶は此後の事を語つた。東京へ歸つてからは事が面倒だから、凡て此處で解決をつけて行く積りだと云ふので、或處へ電報を打つた。其返事を待つて居るのだといふこと。

午後、其返事の都合で急に王子迄引回すことに成つた。私は最う自分の意志で動くことは出来ない。只他人の爲すがまゝに成る外はなかつた。

六人乗りの田舎馬車に乗つて宿を立つた。おぼえのある、同じ道をがた／＼と歸つて行く。あの女、女の母、伯父さんと云ふ老人、神戸と私、それに最一人宇都宮から隨いて来た男、都合六人が乗つて居た。車中では、誰も物を言けぬ。時々老人が大切に一本つつ煙巻草を出しては吸つた。

やうく小さな片田舎の停車場へ着いた時に

は、日影も薄かつた。汽車の時間表を見ると
上り列車はまだ二時間も待たなければ成らぬと
いふので、前の休み茶屋の二階へ上つた。

其間女は人目も憚らず私の側へ来て居た。如何云ふつもりか、此次に逢ふ迄のかたみを異れよと云はれて、考へて見たが何も持つて居らぬ。手垢に擦れた一冊の本をあづけた。

汽車が着く時刻だといふので、吹き曝しのブラットフォームに立つた。日が暮れてから、一しほぼうつと煙立つた野原の上に、雪氣を含んだ綿雲が被さつて、見る日にも薄ら寒い。

やがて汽車が着く、青森發の列車の屋根には
白い雪がうすくと積つて居た。

一行の外には乗る者も降りる者もなかつた。天井から下つた洋燈が一ついかにも氣の滅入りさうな。それ／＼兩側に腰を掛けたが、葬式行列でも見る様に物を言はぬ。時々母親との

いふ人を見かねて、病身らしく大儲さうにしま
がら、何かと言出して、直に言葉尻から煙さ
て仕舞つた。

「何どうも冷ひえて参まりましたねえ。年寄としよりは仕方しかた

「貴方もお載せなさいませんか。」

私に其塵の引入れをせざるや。か言ふは、作田翁も忘れなかつた。

汽車はご一つと音を立てて闇の中を走る。薄暗い洋燈の下には、皆な顔が意味ありげに黒ずんで、物の形も平常よりは大きく見え、物を音も大きく聞いた。何時の間にか汽車が停つたまゝ動かぬ様に思はれた——父急に走り出したやうにも。

私は歸るのだらうか、二たび生きて歸るのだらうか。

つと立上つたまゝ、一人離れて窓際に坐つた。やみ闇を透して、凝手と見詰めて居たが、汽車の動搖に伴れて、硝子窓に頬を押附けながら、ほろ／＼と泣く。

私は泣きたかつたのだ。泣きたくて泣いたのだ——この凡てを背景にして。何と云ふ不都合な涙であらう。

神戸が背後へ来て、肩に手をかけた。
「あの何が行つて遣つて呉れと云ふから来たんだ。え、如何したんだい。」

「何でもないよ、最う好んだ」と、故とらし

笑顔を一つくつて俯向いた。私は女からも憫れられた、憫れられるやうな境遇に立つたのだ——「ねえ、君と、私は少時して顔を上げた。」「僕はあるの母子の人達が彼様して坐つて居る所を見ると、どうも氣の毒で堪らんがね。今夜王子で泊るなどと云つて、何だか理窟に合はぬ様に思ふから、君から左様云つて直に家へ歸る様に上げて呉れたまへ。僕の事なら如何でも可いんだから。」

これが當前に自己犠牲の心から出たものであらうか——私は只極端に憫れな地位に自分を置いて見たかつたのだ。そして自分の影を憫れんで見たかつたのだ。

「だつて、そりやア」と、神戸は聲に力を入れて、「阿母さんが歸りたくないと言ふんだから——子供の意中を十分に糺して、安心の出来るまでは自宅へは歸りたくないと言ふんだ。」私もそれきり黙つて仕舞つた。

王子へ着いたのは、夜の十一時頃でもあらう。どや／＼と乗降の旅客が込み合ふ中に、「最う行きますよ、行きますよ」と、女は私の前に立つて線回した。

「では最う其日逢逢はない」と、私は女の顔を見上げたまへ、「勿論手紙なども遣取りしない

から、其つもりで。」

他の二人は車外へ出て待つて居た。

「早く、早く出て下さい。」

車掌に喚鳴られながら、女はあたふたと降りて行つた。

汽車が出た。間もなく上野へ着く。東京の夜の町は深けて、ばら／＼と雨が降つて來た。

二

其夜一時頃床に入つた。

床に入る前、今夜もどうやら眠られない様な氣がして居たが、枕に就くや否やぐすり寢込んで仕舞つた——そりや、大宮の夜、温泉宿の夜、山の夜、次の温泉宿の夜とつゞけて、殆ど寢なかつた爲もあらうけれど、明くる朝、はつと思つて目が覺めた時には、何とも云はれない可厭な心持がした。如何にも自分と云ふものの

歌に似た側が遺憾なく現はれたやうな氣がして——つまり自分の前に恥ぢた、歌として畫いて居る自分の前に。

私は連も他人には云はれぬやうな、不快な心持を隠して起上つた。そして朝飯の膳に向つた。それが何處だと云ふことは——昨夜何處の家へ落着いたかと云ふことは、凡て略して置く。

朝飯が済んで、皆なの人々が座を立つてからも、少時そこに坐つて居た。

昨日の朝から自分達の事が最う新聞の三面種に成つたとは、昨夜歸つた時に聞いた。今朝はそれが一層甚だしく、何の新聞も一段二段、中には一頁近く其記事で埋めたものもある。

私は同じ事なら新聞など見ないで済まさうかとも思つた。が、又思ひ返して其邊に落ち散つて居る一二葉を取上げた。見るものも——皆間違つて居た。心持に立入つたのは云ふ迄もない、表面の事實が間違ひだらけであつた。私の名も知らぬ父親が生きて居たり、甚だしいのは私と神戸とがさかさまに成つて、神戸が飛んだ迷惑を享けて居るのもあつた。併し何方かと云へば男よりも女を主として書いてあるだけ左様いふ事情は女の方に餘計有つたらう。

私は案外平氣であつた。一々讀んで仕舞つた時は讀まぬ前よりも心持が平靜であつた。

一方には斯んな馬鹿らしい間違ひは永遠するものでないと言ふ自信もあつた。又一方には人間は他から此位の程度にしか理解されるものでない、此位な間違ひは日常事實として通用するものだと言ふやうな葉鉢な考へもあつた。併し實を云へば、私の心の中はそれ所ではない、も

つと忙しい事が外にあつた。別に私の心を占領するものが——私はたい女の事を思ひつゞけて居た。

其朝、白山裏から使の人が来て、神戸へあてた手紙が届いた。披けて見ると、昨夜王子に泊つて、今日神戸と會見する事に成つて居た、彼方の人達は、一晩でもあんな所に留めて置く譯に行かないから、昨夜の間に迎へて置くのを遣つて自宅へ引取つたと云ふ簡単な挨拶であつた。私は初めて現實の腕をちらと見たやうな心持がした。

山の中で巡査に逢つても、私の夢は覺めなかつた。温泉宿でも、汽車の中でもやゝもすれば、却て現實の見るもの聞くものを夢の中へ引入れようとした。それだけに泣いたり笑つたりしても、別段痛くない。感情は動いても、結果の自覺がない。今朝新聞の記事を見て案外平氣なもの、それが爲であらう。此手紙を見て、初めて女の周囲と云ふものが眼に映じた。現實の人間と人間との交渉に氣が附いた。急に自分の手で爲たことの結果を見るやうな氣がした。

私は堪へなかつた。此儘現實の世界に靜手として居るに堪へなかつた。この上は女一人を

頼みとする外はない。女一人を頼みとして、二たび空想の世界に後戻りする外はない。女は如何して居るだらう——何んな夜が明けたらう。

昨夜神戸は一度自宅へ引取つて、午過ぎの頃又遣つて来た。此手紙を読んだ時には自分が此事件について餘計な骨を折らされたと云ふ自覺があるだけ、一々自分の指圖を待たなければ何事も爲ないものと思つて居たので、ひどく出抜かれたやうな心持がしたらしい。併し自分が負けたとは、減多に口へ出さぬ實なので、「ぢや、僕は先方へ一度挨拶に行つて来るから」と出て行つたが、其日は其儘歸らなかつた。

私は永い日を一日片隅に坐つて居た。一週に一度木曜日に其家へ集る友達が目暮前からぞろ／＼遣つて来た。其の間の火鉢を圍んで雑談に耽りながら、殆ど何事も起らなかつた様に私を其仲間へ入れて呉れた。中にはそれが不自然だと思つたのか、

「今度前回は驚かされたぞ。私にや迎へ出来な事を遣つてのけた。一昨日それと聞いてからは一日中興奮して居た。そんなに小さく成つて居るな。頭を上げて歩け。私なら昂然として街の中を闊歩して遣るんだがな」と、一人の

瘠せた男が力味回つて云つた。
「そんな事を言ふな、可憐想にと、小早川と云ふのが留めた。」

「馬鹿云ふな、私や本氣で云つて居るんだぜ。誰だつてあんな女に出逢つたらあんな事を遣つたかも知れない。あの心持が私には解るんだ」と、何か旨い比喩を考へ出さうとする様に、空眼をして居たが、「併し最初から此男は死にやしないと思つた。如何しても死ねる男ぢやない。それだから偉いんだ。あれきり死ぬ様ぢや下らない。」

私は黙つてそれを聞いて居た。自分の遣つて来た事が只遣つて見づくだと云はれたとて、なに辯解の辭があらう。いよく斷末魔に臨んだ其最後の瞬間迄は自分でも分らないのぢやないか。私は矢張ボール紙を貼つて胡粉を塗つた岩に腰掛けて、白紙を刻んだ雪を降らせただけでも間に合つた人間かも知れない——併し他人には云ひたくない、他人の前では白狀したくない。

「新聞なぞ氣にするな、新聞なぞ何と云はれても構はない。書けよ、書けよ、自分で書けよ」と、前の男が云つた。
何を書けと云ふのか。一たび血を以て彩らう

としたものを、二たび文字に書けと云ふのか。
私は自分の疚しい所に指を觸れられたやうな
心持がした。

「此男も世の中から葬られたんだから、小説で
も書く外に生きる道はなからう」と、此家の主人
が云はれた。

誰一人返辭をするものはなかつた。

「木の芽田樂が喰ひたいな」と、少時して前の
男が口を切つた。「菜の花のおひたしで冷酒を
あぶるのよ。私やア疾うから奥さんに約束がし
てあるんだがな。」

「勝手にお遣りなさいよ、私は知らないから。」

「だつて、それぢや仕方がない。ね、庄司さん、
又彼所へでも押掛けて行かうかなう。一遍此處
に居る皆なを引張つて行かうぢやないか。」

「はゝゝゝ、又庄司から一々講釋附きの御馳
走に成つて、君の氣焰を聴かされるんぢや仕様
がない。」

庄司と呼ばれた何處やら殿上人めいた顔を
したのは、只にやゝと笑つて居た。

「そんな事は仕やしませんぜ、えゝ」と一寸庄
司の方を振向いたが、「ありやア如何したのか
な。彼の人からは未だ手紙が来るんか。」

「彼の人からと云つて、それだけぢや解らない

ね。」

「幾人も有るからな。」と側の者が交ぜ返した。

「あの何さ、始終着物を縫つて呉れよつた女
よ。」

「あれか、彼女は最う居ない。去年の暮に田舎
へ嫁に行きましてね。」

「左様か、能く諦めたもんだな」と又遠い所を
見る様な眼附をしたが、「私やア彼の人のこと
を思ふと可憫想で仕様がなないがの。新しい障
子の側で、毎日針仕事をして、針仕事を止めて
は手紙を書き、手紙を書差しては又針仕事をし
て居る女の様な氣がして成らんが——一度も逢

つたことはないけれど。」

「未だ有つたでせう、京都の人とやらが。彼の
女からは来るんでせう。」

「どうも皆なから左様云はれちやア」と、頭を
掻いて居たが、「えゝ來ますとも、毎日の様に來
ますよ。」

「侯爵家の姫君とか云ふぢやありませんか。」

「ところが今年二十七の出戻りだと云ふんだか
ら——」

「だつて、そんな人から附文をされるんだから、
庄司さんも偉いわ。」

「えゝ餘程變ですよ。」

斯んな話は煙草の煙と一所に渦を卷いた。そ
して散賢したのは夜の十二時を過ぐる頃であつ
た。

私は一人暗がりの寢床の上に坐つた。眼を開
いたまゝ暗闇を見詰めて居ると、淋しさが込み
上げて来るやうで堪らない。他人が自分の顔を
見さへすれば「お前は本當に死ぬ氣だつたのか
い」と、うそく笑ひながら云はれるやうな氣が
して成らぬ。そんな事が——心から死ぬ氣であ
つたなぞと云ふことが、死ぬまでは、死骸と成
つて歸らぬ迄は如何して云はれうぞ。

併し何と思ふまい。何も思ふ必要はない——
あの女さへあれば、あの女さへ自分を離れなけ
れば。左様思ふ傍から——

あの女は自殺しやしなからうか。
始終氣に掛けて始終抑へゝして居ることが
不圖心に泛んだ。私の手を離れてからは——如
何するか分らない、何んな事を仕出來すか分ら
ない。

私はそれを目の前に見ながら如何することも
出來ない様な心持がした。
併し一人死ね——あの女にそんな權利はな
い、そんな事をして私を窮地に陥入れる權利
はない。

私は心の中に幾度も叫んだ。

水の底に沈んで、其儘が塞る様に思つたら眼が醒めた。天井の明り窓はうつすら白んで居た。私は寢床の上に起直つた。

女が死んだら——昨夜の間にも死んで仕舞はれたら——私は一人後に取残された自分の死ぬにも死なれず生きるにも生きられぬ不見目な有様を想像して、思はず身震ひした。聲を上げて、女の名を喚びたい様な心持もした。

何時迄左様して居たか知らぬ。やがて湯殿へ下りて合敷をしてから茶の間へ出て来ると、「おい、彼方の女が何か云つてるよ」と、一葉の新聞紙を渡された。

「へえ」と言つて、私はそれを受取つた。『神學令嬢の告白』と云ふ標題が煮入る様に目につく。初め十行程は何が書いてあるか讀みは讀んで頭に残らなかつた。やつと、

氏は「娘が歸つて來ましたから一切の事實を當人から聞いて下さい」と——子を呼ばれしに、徐に襟を明けて現はれし美人こそ」云々。

此邊りから心を落着けて讀み出した。

社員の間に応じて語るやう、「私が家出しましたのは全く自分の精神を貫く爲です。

先方は私を殺しても我意を張らうと迫ります。私は自分の主義を曲げぬ爲に死ぬのは厭ひません。若し先方が私を殺せば刑事上の罪人と成つて所刑されるは當然ですが、私は彼が所刑される位では満足しません。私は命を棄てても構ひませんから、彼の死ぬのを見届けたいと思つて家出したのです。二十一日は終列車で大宮に向ひ、翌二十二日朝晩車で鹽原に向ひ、其夜升田屋に一泊しました。情の爲に逃げたのではありませんから、宿泊中は傍も取らず夜もねむりませんでした。二十三日の朝晩車を雇ひ、一里足らずも行つて、八幡神社の前で降り、尾花峠の山中で死ぬ覺悟で雪を踏んで山深く分入る途中警官に押へられました」と、どうも要領を得ぬことを語

りて立去りたり云々。

次にそれに就て父なる人の意見と云ふものと女が家出する前に、友人木下時子の許へ遺書と一緒に預けて行つたといふ、私へ宛てて書いた手紙で、其儘出さなかつたものらしいのが載せてあつた。

別の新聞を見ると、矢張女の家を訪ねた記事を載せて、それには彼の日女が自宅に残して出

たと云ふ遺書が寫眞版に成つて出た居た。いはく、

我生涯のシステムを貫徹す、我が Cause によつて斃れしなり、他人の犯す所にあらず。

三月二十一日夜

又時子に宛てたものは、
拜啓、我が最後の筆蹟に候。學校に行きませんと申せしは實は死すとの事に候。願はくは君と共にらざるを許せ。君は知り給ふべし、余は決して戀のため人の爲に死するものにあらず。自己を貫かんが爲なり。自己のシステムを全うせんが爲なり。孤獨の旅路なり。天下余を知るものは君一人なり。余が二十年の生涯は勝利なり。君安んぜよ。而して漢事を許せ。さらば。
四十一年三月二十一日

木下時子様

私は何氣ない體に、そつと新聞を下に置いた。ばた／＼と自分の周圍の城郭が壞れて行くやうな、壞れて行く音を聞いて居る様な氣がした。

此遺書——私はこれを否定しようとは思は

ぬ。又否定される譯でもない。勿論あの時、温泉宿の裏二階で、あの女が云つた言葉とは違ふ。あんな人に用はないと云つた、其時子に遺書をして出て行く——それも仕方がない。只あの女が遺書をする、こんな言譯めいた遺書を残して置く——それが解らない。あの女は遺書などする女ぢやない。そんな女ぢやない、少くとも私の眼に映じた女はそんな女ぢやない。黙つて死ぬ女だ。何も言はずに死ぬ女だ。夫程に自我の強い、充實した自我を持つて居る女だ。自分一人の中に生き、自分一人の中に死んで行く女だ。其女がこんな遺書をした——死ぬ前に他人に對してこんな言譯がましいことを——解らない、如何しても解らない。

あの時、時子の影が邪魔に成つて如何することも出来ないといふのは、何も時子其人を指した積りぢやない、時に依て代表された或物——禪學が氣に成つたのぢや。禪學が人を死なせるものか如何かは知らぬ。併しあの女が禪學に依て生き禪學に依て死ぬ女だとは、何うもしたくない。あの女だけに限つたものにしたかつた。どこか神秘的な、救ふべからざる運命の下に生れて、一生其運命と争ひながら、たうとう争ひ勞れて死んで行くものと信じたかつた。

女も折ふしそんな事を口にした。禪學などの爲ぢやないとも云つた。それでも氣に掛るから、彼の期にのぞんで又訊ねた。

「そんな事は十九日の手紙を見たら分つて呉れた筈だ」と云はれたが、此遺書ぢや、左様云つたのも虚言らしい。

女の周囲の人達は、いろ／＼女の修養について物語つて居る。目白僧園の雲照律師、興津の清見寺住職眞淨老師などについて、特別な法號さへ許されたと云ふことである。いつも夜は二時に寢て、朝は五時に起きると云ふことなぞも。又時子は記者に向つて、

要するに今回の事は無二の親友に對する言が若し最も眞なるものとせば決して物質的・眼前的劣情にのみ起因したるにあらず思想の缺陷と云ふ一事が最も好く今回の事相を説明する語と信じます云々。

と述べたといふ。但し思想の缺陷と云ふことは如何いふ意味か能く解らない。

私は女の兩親に對してまづ無法な損害を與へた。それを思へば、縱令彼方の言分に如何かすれば相手の男を傷けても、女を行爲を辯護しようとするやうな形跡が見えたとて、私は甘んじてそれを享ける外はない、不服を云ふ筋はない。

そして女の純潔と云ふこと許り氣にされると云ふのも、親の身として、是位無理からぬことがあらうか。

併しあの女が兩親と同じ様な態度で、宿屋に泊つても、夜も寝ぬの袴も取らぬのと、記者に向つて云つて居るのを見た時は、私は殆ど大空から引摺下されたやうな、意外の感に打たれた。

それ所ぢや無かつたのではないか。

大宮の夜、女はそんな事を考へて居たのか、それで袴を脱がなかつたのか——馬鹿なり。

あの夜、二人の中に白いものが立つた様に思つたのも、そんな心持で對して居られたからであらう。次の日も、其次の日も、何處やら他人に許さぬやうな面持が見えたのも——

私はそんな警戒の念を抱かれながら、女と一緒に歩いて居たのであらうか。

それで一所に死ぬ？

二人が山の中で明かした一夜も、其實そんな滑稽なものであつたのか——あの思ひ上つた夜も。

私は生れて初めて其戲曲的效果を味ふ暇のない感情と云ふものを體驗した。私は餘りに

人生を蔑にした。此人を只詩として見て居た、劇として味つて居た。何んな場合にもしみじみと感情を身に占めることが出来ないで、只其感情が齎す戯曲的效果を味つて居た。而して終に人生から呪はれた、手痛い復讐を受けた。

成程 私は今度の事でも只詩を作つて居たのかも知れぬ、空想を描いて居たのかも知れぬ。併し其詩の中へ、空想の中へ身自ら没入し去らうとしたことだけは——他人の前とは云はぬ——自分自身の前でも云ふことを憚らない。女を犠牲にする前に、自分を犠牲にしようとした、只それだけは——併しそんな辯解が他人の前で云へようか、世間で通用しようか。私は口を噤む外はない。

世間の前に——新聞記者の前に、立派に言ひ開きの出来る様な口實を持つて居る女は幸ひであらう。

併しあの女が健在だと云ふことは此記事で分つた。毎朝新聞を見るたびに、若しやあの女が死んだと云ふ雑報でも出て居はせぬかと、思はず手が戦へたものだが、最うそんな心配はいらぬらしい。

間もなく取次の女中が来て、一葉の名刺を差し出した。

「此人が私に？」

女中は點頭いた。

名刺の表は今朝女の談話を載せた同じ新聞の記者で何某とあつた。

「ふむ」と、主人の人もそれを見て居たが、「先方は先方で自分の方の立場を衛る様な態度に成つたのだから、君も何か云ふことがあるなら會ふのも可い。又辯解をしない氣なら會はんでも可い。併し會ふにしても、元來君の方から先方の家へ對して——女に對してぢやないよ——不名誉と損害を與へて居るのだから、無法な事を云つちやア成らん。」

「いえ、辯解なぞしません。」

「ふむ。」

「併し一遍會つて見ようかと——」

「會ふなら會つても可い。」

女中に待たせて置いた記者を別室に招じた。

縮緬の兵児帯に銀時計の金鎖を絡ませたのが目に着く。何か言出される迄私は胸の中がざわついた。

記者は型の如く今度の様な事を仕出来した動機を語れと云つた。

「それは申しかねます」と云つたが、「總て世間の評と云ふものは本人の意見を參考にしない、又それが當然でせう。既に世間から葬られた私が今更自分を辯護する必要もないが、安りに私の心事に迄立入つて解釋をせられるのは迷惑でないこともありません。今朝貴方の社の新聞に出た記事も見ましたが、實際あれ位の事は云ひかねない婦人です。恐らくあれ以上の事も申しませう。併し自分の爲た事について世間へ辯解の必要があるやうな、そんな下らぬ女でない」と云ふことは前途信じて居ります」と述べた。

此語は次の日の新聞に出た。

私は何故新聞記者などに會つて、こんな話をしたのか。只記者を通じてあの女に物が言ひたかつた、其外に物を言ふ道がなかつた。

併し新聞の記事と云ふものが何れだけ眞實を傳へて居るものだらう。かうして他人の手に距てられて、互にじり／＼と遠ざかつて行くかと思へば思ふだけでも堪らない。

其夜神戸が遠つて来た。用向は、此頃中神戸がいろ／＼奔走した爲に、却て思ひも寄らぬ誤解を受けて迷惑をするから、一應此方からも實情を新聞社に咄して載せさせようと云ふので、

「君は僕に向つてさへ何も云はないから、實情

と云つても分らんが、兎に角僕の見た所だけを咄して置かうよ。」

「目下の様ぢや、僕からは如何することも出来ない。何分好い様に計つて呉れたまへ。」

昨日神戸が先方の家へ行つた結果に就ては、別に何とも云はなかつた。彼時から和強樂堂へ廻つて演説をしたのださうな。豫て講演の約束があつたのだが、急に演題を「男女二人の爲に辯ず」と取代へたと云ふこと。

神戸は私を誘ひ出して、月夜の江戸川端を歩きながら、「君を保護する事は君自身よりも僕の方が好く知つて居る。昨日は二三の先輩や友人も来て居たが、あの人は少しも君の價値を認めて居るのではない。こんな事をするのも、單に僕が君に對する友情だと思つて居るらしい。それで演説が済むと、或人はこんな際に能くも彼の二人の爲に辯ずる勇氣が有つたもんだと云つて倒れて居たよ。何も君方の爲ではない。聴衆が笑つた時には——僕が此演説を掲げて壇上に立つと、聴衆はくすくす笑つたよ——其時は他人の事ぢやない、僕の利害だと考へ出した。」

少時黙つて歩を移したが、「何故笑ふか、君等も近代人の片破れぢやないか。此問題は敢てあ

の二人の問題ではない、君等自身の問題だぞと呷鳴つて遣つた。聴衆も、終に襟を正して聴いたよ。」

私は只黙々として隨いて行つた。何とか云はなけりや濟まぬと思ひながら、何とも云ふことが出来なかつた。それを焦躁しと思つたのか、神戸は又、「勿論君は君で信ずる所があらう。又自分さへ信じて居ればそれで可いのかも知らんが、世間の人と云ふものはそんなものぢやない。」

「僕だつて何も——と口を挟んだ。
「いや左様だよ、確かに左様だ。君に比べると、未だ女の方が餘程世間的だ。現に世間的にも自ら衛る手段を取つて居るぢやないか。」

あゝ女が、あの女が——あの女さへ自分を信じて居て呉れたら——私はそつと側を向いた。

「昨日は狭山にも逢つたが、小島君も結婚する氣なら、外に仕様もあつたらうに、愚な事をしたものですなと云つて居たよ。左様ぢやならうと云つて辯解はして置いたが、世間の人は皆左様思つてゐるんだよ。」

「併し——と云ひかけて、私は言葉途切らししたが、併し人間が途方もない馬鹿げた事をした

時には、其動機は大抵疚しくないものだと云ふこと位、彼の入なら解つて呉れさうな——」

「左様さ。尙且小説家として見て居るのぢやない、世間の人として見て居るのだからな。まあ、そんな事は可いさ。他人の問題ぢやない、君の問題だ。君自身の心掛について云つて居るのだ。」

二人は少時無言の儘歩いて居たが、「昨日君はあの女に會つたのか」と、私は思ひ切つて訊ねた。

「うむ」と云つて、少時經つてから、「随分自尊心の強い女だね。何時逢つても鼻ツ張が強いばかりで、弱味を見せたことがない。あゝいふ女としても、僕はどうもそれを好まんがね。」

私は黙つて考へに沈んだ。

「どうも始終一貫して鼻先が荒い」と神戸は重ねて云つた。「或時はケプリシアスに泣いて喚いて、平凡な女に成つて呉れなくつちや、僕達には此と困るね。」

あの女が泣く——あの頭の頂い女が、あの傲慢な、人を近寄らせない女が。山から歸つた後、あの女は何んなに成つて居ることだらう。私はあの女の緊張した、齒を咬ひしばつた顔を見るやうな氣がした。

併し私はあの女の泣くのを見にのた、あの女の眼に涙を見たことがある。

何で泣いたのか。何が私の前であの涙を釣出したのか——戀ぢやない、勿論戀だとは思はぬ。併し両親も知らぬ、友達も知らぬ、誰も知らぬあの女の秘密に自分一人が觸れたと思はなければ、如何して今度の様な事が出来ようぞ。

又自分一人が觸れたと思つたら、貴方はそれぢや一人で寂しい道を行きなさい、私は私で此方の道を行くと、情なく袂が分たれようぞ。

それが諛なのか。左様思つたのが、私一人勝手に畫いた夢なのか、幻影に過ぎなかつたのか。幻影でも可い。あの儘幻影の中に消えて仕舞ふことが出来たら、二たび戻つて来なかつたら——

女は何を云ふぞ。

「全く自分の精神を貫く爲です。先方は私を殺しても我意を張らうと迫ります。

私は自分の精神を枉げぬ爲に死ぬ——」

諛だ。あの女の云ふことは諛だ。あの自尊心の強い女が諛を云ふ——そんな事が考へられようか。

成程、あんな風でおめ／＼と生きて戻つたら、あの女の自尊心は傷けられたかも知れぬ。併し

し其創傷は、新聞記者の前へ出て、あの周囲の人達か、

「男に迫られて止むを得ず家出をした」と云ふやうな卑近な言葉に裏書をして、それで慰められる様なものであらうか。

偽善者——あの女の云ふことは宛然偽善者の言葉だ。何んな平俗な解釋でも下せる言葉だ。

あの女を偽善者にする位なら、寧ろ病人にせよ、氣狂にせよ。斷じて偽善者ぢやない。

あの遺書が眞實に弱者の強がりなら、弱者が齒を咬ひしばつて勝利を叫んで居るものな

ら——

あゝ幻影は破られた、無残にも破られた。

併し幻影でも可い。私に取つては動かし難い事實だ、一生を賭した事實だ。今は只あの幻影に肉を與へよう、血を與へよう。そして客觀的にも動かし難い事實としよう。それ迄は私は死ぬにも死なれない。

こんな時、人間は藝術の力に依頼する外はない。藝術に依て幻影に客觀性を與へる——此

外に道はない。私は不圖「忠臣蔵」の大星由良之助が大石内藏助よりもより多く實在性を持った

人間の様に思つた。永遠に生命のある人間の様に思つた。愚癡に成つては、こんな事迄本當に

考へた。

藝術の力。自分の腕の力。私は腕が委えるやうな心持がした。

併しこれを書くこととは、即て二人の關係に終局を置くこと云ふことではないか。それを覺悟しなければ、何も出来ない。一字も下すことは出来ない。

私は牛込見附の橋の欄干に突伏したまゝ、何時迄も兩手で顔を抑へて居た。

「君は國許へ何と云つて遣つたのか」と、神戸が不意に訊れた。

私は思はず顔を上げた。

「いや、未だ別に。」

「先方からも未だ何とも云つて寄越さんのだね。」

「さ。——僕の先行が分らんのかも知れんが。」

「左様か」と云つたまゝ、神戸は腕と漆端を周る電車の灯を見詰めて居た。漆の中の水は只平に動いた。

「併し先方の人ぢや、最う何とも云つて寄越さぬ積りかも知れんよ。」

私は黙つて下を俯向いた。

「隅江さんは最う君に對するコンスタンシイを失つたかも知れない。僕は左様思ふ。併し男の

仕向様一つで、コンスタンシーを失はぬ女が何處にあらう。良人の方で残酷な手段を取つて、段々妻のコンスタンシーを失はせるのは、斯んな場合に妻を自殺せしめるよりも卑劣だよ。自分の非を遂ぐる爲に——」

私は何時の間にか神月の腕を握つて居た。神戸も涙を流して泣いた。

「僕の許だつて、明日からでも妻の貞操を失はせる位譯は無い。僅に僕の仕向様一つで持つて居るんだ。それ程に女と云ふものは弱いものだ。僕だつて、何もそれに依つて得る所はない。只弱者を勞つて遣つたと云ふ愉快さ、それだけで満足して居るんだよ。」

二人は涙を頬にたれたまゝ、當度もなく暗がりを見詰めて居た。何時迄も、時も所も忘れたやうに——

蒼空には三つ星も傾いた。

「最う歸らうか。」

斯う云つて、私は襟を掻き合せた。涙も風に乾いて居た。

「あゝ、歸らうね。」

神戸も立上つた。

やがて私は江戸川端を一人とぼくと戻つて行つた。一時に感情が激した後とて、頭の中

は大雨で洗ひ流した様に澄んで、目の前にありありと自分の姿を見るやうな——死んでから自分の一生を振り返つて見る様にも思はれた。雨上りの霧は水の面を包んで、前後に人の影も見えぬ。

私は許し難い人間だ。

世にも不人情な、冷酷な、而も自分では知らずに——

私は妻を捨てた。一思ひに捨てる事が出来ないで、先方から愛想を盡かすやうにも仕向けた。併し其様にすればする程、私は一しほ妻を愛した、一日も忘れる隙はなかつた。此心持が解つて呉れたら——私は妻を捨てた、けれども妻が私を捨てようとは思はない。

こんな主我的な考へがあらうか、又こんな心持に同情して呉れる女があらうか。

併し今夜は餘りに良心を弄んだ。今の様な境遇にある私の心を傷けて血を流させる位容易いことはあるまい。何を云うても返らぬ今と成つては行き掛けた道を行く外はない。私は行く處迄行く。

只世間的に——私は世間的に何れだけ他人に負うて居ることであらう。

不圖今自分の歸つて行く家と思つた。山から

歸つて後、あの家に落着いて居られるため、何も言はずに落着いて居ることを許されたため、私はまだ幾分か自分の體面を保ち得たのではない。ただそれだけ彼の家の體面を傷けて居るのではない。

主人はまだ書齋に起きて居られた。私は一體したまゝ、暫く其背後に坐つて居た。

「如何した、何處へ行つて来た？」

「江戸川迄行つて来ました、少時口を噤んだが、私はインヒューマンな男でせうね。」

「左様さな。君等の遣つて来たことは全くインテレクトチュアル、ファイトだ。第一あの遺書を

見ても少しもパソナルな所がない。」

「併し」と、やがて又言葉をついで、「僕は君等の遣つた様なことは遣らんが、あれをアンドスタンドすることは出来る人間だよ。」

火鉢の灰は白く成つて居た。

三

四月に入つて、大雪が降つた。電話線がずたずたに切れて、一時に市内の交通が止まつた。工夫が厭したり、立場が凍えて死んだのもある。

只春の雪は解けるにも早かつた。雪が解けた

後には、櫻の花が若醒めて花の幽霊の様に見えた。八重などは殊に汚かつた。三春の行樂が始まらうとして居た時だけ、都は全體に喪装したやうにも思はれた。

二週間後、私は築土の寺へ引移つた。本堂の裏手にあたる隅の六疊で、窓を明けると直に墓場が見えた。墓場の向うは崖に成つて、谷を越えて、一帯に小日向臺が見渡された。

朝は早く窓の障子に日が當つたが、申刻下りには部屋の中が薄暗く成つた。窓の闕に肘をついて、夕日の射す向ひ側の高臺を眺めて居ると、大日坂をのぼり下りする黒い人影が、他界の消息でも見て居るやうに眼に映つた。

私は本當に最う他界の人ぢやないのか——此世界と没交渉な。

こんな時縋るものがあれば縋つて見たい。神佛に縋れない身なら切めて人間にでも——あゝ、此情緒の定住が欲しい。

本堂で八釜しく鉦が鳴出した。人の神経を苛立たせるやうな、病人なら直に氣狂にでも成りさうな鉦の音がつづく。其後で長たらしい睡むさうな讀經が始まつた。私はその呻くやうな、泣くやうな讀經の聲を聞き、疊の上に倒れたまゝ、寢入つて仕舞ふこともあつた。

其鉦の音を聞くのが可厭さに、夕暮から好く戸外へ出た。街を歩くと、そんな筈はないと思ひながら、人から顔を見られる様な氣がした。買物をするにも、停車場の改札口で驛夫に電車の切符を渡すにも、何となく顔が背向けられた。

或時神戸に連れられて、初めて人の家を訪ねた。其處に居合せた知人は皆心置なく待遇つて呉れた。併し心置なく待遇ふ中にも、つとめて左様して呉れるやうな、年下の者まで、社會上、處世上の知慮の優つて居るものが劣つて居るものを容れて呉れるやうな風に見えた。私は出獄人が初めて世の中へ出た時の様な思ひをした。それからと云ふもの、私は人の家を訪ねることが億劫に成つた。

神戸に對してさへ、私は此心持が失せなかつた。私は最う——それが當前の事でもあらうが——自分と同じ位置に立つて話をする者が一人もない。今度の様な事が有つたら、神戸とは愈近づいてくくして却て遠ざかつた。神戸はそれを怪しからぬ様に思つたであらう。私は如何することも出来なかつた。神戸は併し根氣よく私を容れて呉れようとした。或時などはこんな事迄云つた。

「僕は、君から見たら、或は僕が君の爲に盡したことを大きく云ひ、君から受けた損害を誇大して云ふやうに思はれるかも知れんが、これは、先方に自分が感じて居ると同様にイムプレッションを與へたいと思ふからで、左様しなければ、何うも徹底した様に思はれんのだ。僕の性分だから仕方がない。」

私は神戸として道理な言分だと思つて聞いた。併し心持はそぐはなかつた。

其頃、新聞に『天神藝者殺し未遂』と云ふ標題で、三日計りつゞいて出た。何でも相手の男と云ふのは萬木義手義足製作所の職人で、戦争後好い工手間の取れる所から、つい茶屋酒の味を覚えて、近所のつまらぬ藝者に引かゝつた。たうとう金子に詰つて、不義理な借財も嵩む。お定まりの心中といふ段取に成つて、馴染の待合の二階にしつぽりと訣れの盃を酌んだが、いよいよ其場に臨んで、急に女の方で變心した。何とか言ひ詰めて階下へ下りようとするのを、それと悟つた男はさきさきと梯子段の上から斬りつけた。手許が狂つて僅に女の小髻を擦つただけ、あれツと云ふので、一時に家中の騒動と成つた。男は警察へ突出され、検事局へ廻されて裁判に成つた。諺人として喚出された女

は負傷も癒つたと見え、酒蛙々々として、一々男の口述を否認した。元よりそんな深い馴染でもなければ、夫婦約束などは勿論ない、心中しようなぞと云ふ意志は毛頭ないと云ふので、これを聞いた男は棲木につかまつたまま、口惜し泣きに泣いたが、其儘看守に引かれて行つた。女の云ふことが本當か、それとも主婦にでも入智慧されたか、其處は能く解らないがと書添へてあつた。

これを讀んだ時位、私は不快な心持のしたことはなかつた。此記事を讀んで自分の身に思ひ當るやうなものは、私の外には無かつたかも知れない。併し私自身が此男のストーリービッドな地位に同情したと云ふだけでも堪へられぬではないか。

あゝ、何んな人間にもそれ／＼悲劇はある、悲劇はある。其悲劇は當人の思つて居る程眞面目なものではないかも知れぬが、又側から見る程滑稽なものもあるまい。當人の心持に成つて人情を取扱ふものは藝術の外にない。傍觀者が嘲笑したり、若しくは冷眼に見過す間に、ひとり藝術のみは當事者と共に泣いたり笑つたりして呉れるものである。

私は書く、何處迄も書くのだ。

かう思ふ傍から、私は腕が萎える様に思つた。そして、二日経つても三日経つても、乃至一週間経つても何も書かなかつた、又書かうともしなかつた。

あの女の情報については、殆ど聞くことが出来なかつた。只一度或家であの女と一緒に金葉會などへも来て居た女に逢つた。其女が歸つて行つた後で、

「今のが君、例の人に逢つて來たさうだよ」と、主人が云つた。

「へえ」と、私は只左様言つたが、故とらしく見えるが可厭さに、「如何して居るのでせうね」と附加へた。

「左様さ」と、にや／＼笑つて居たが「何うも君にはアンフェオブルな報告だね。あんな煩纏い人はないとか、嫉妬心が強いとか云つてるさうだよ。」

私は返辭の仕様もなかつた。

「誰にでも會ふ様子だね。些ともしよげた所がないつて、驚いて居たよ。」

「左様でせう。」

私は其處を辭して歸る途すがら、矢張あの女のことを考へて居た。あの女が振勢を張つて、他人に應じた所を見せない、其心持は分つて

居る。併し何の爲に今何自分を追究するのだらう。私は何日ぞやあの女に向つて、何うも私はジェラスだ、貴方に對して最う嫉妬の念を持つ様に成つた、これは戀でせうね、戀でなけりや斯んな心持に成る筈はない、かう云つたのを其儘繰回して居る。此外あの遺書の文句を見て、友達に預けたと云ふ手紙を見ても、あの女の云ふことは皆私の云つたことだ。私の云つた言葉を其儘使つて、私の論理で私を攻撃して居る。そこが女らしくもある。

併しあの女は何處迄も一人であつたことにして置きた。あの女以外の他の要因から影響を蒙つたといふことは——例へば禪學のやうな——逆も堪へられない。いや、私自身の影響を受けたと云ふことも、餘り有難くはない。

あの女は飽迄一人であつたのだ。一人であの女の頭の中に暴れ狂ふ或物と闘つて居るのだ。他人はそれを見て居ながら如何して遣ることも貰ふことも出来ない。あの女に取つては、自分の物狂ほしい情熱を征服すること、夫自體が勝利だと考へる外はない。他人から見ても、それが無意義であつても、ナツシングでも、それに意味があると考へる外に生きる道は

ない。

成程これを禁慾主義だと云へば、世の中に禁慾主義位俗悪な精神は無からう。彼等は何物をも意欲せずに居ることが出来ないから、切め

てはナッシングを意欲しようとして居るのだ。

彼等は他人に對して暴虐を振ふ譯に行かないから、切めては自己に對して暴虐を振はうとするのだ。何でこんなものが彼の女の本性ぢやらう。そんなものに捕はれて居る女ぢやない。

併し——若し生れながら其外に生きる道のない女なら、それを手頼の外に生きて居られないやうな身であつたら——勿論外來の勢力なぞ

あの人に對して何の力もない、併し自分で自分が當に成らぬやうな身體であつたら——そして今日迄にかく一切の誘惑に打克ち、一切の欲望を征服することによつて、辛うじて危い生涯をついて來たものだとしたら——何と云ふ凄じい、壯烈な一生であらうぞ。

左様云ふ思ひ詰めた女が、僅に空想を生命として幻影に左右せられて居るやうな男の胸甲斐ない有様を見たら、如何して其無氣力を輕蔑せずに居られようか。

卑怯者！

汝われを殺し得ずとすれば——われ汝を殺

さむ。

あゝ、あの女には一切が許される。歸京後、あの女が昇奮して、いよく爲我的に、復讐的に成つたのも無理はない。あの惡魔のやうな冷やかな微笑も——

それにしても、爲善者か、男蕩しきか、抑又物狂ほしい情熱に悩まされながら生きて居る女なのか。恐らくはその皆なであらう。

私はあの女の上に戯曲を書いた。

凡て男の戀は皆女の上に戯曲を書くものだ。私も其例に洩れなかつた。紙の上に書くべきものを生きた人間の上に書いた。あの女は私の豫期した通りに物を言ひ、豫期した通りに泣いたり笑つたりして呉れた。私の豫期しない様なことは一つも言はなかつた、又言ふことが出来なかつた。あの女は私の影に過ぎない。私は自分の影を抱いて、山迄死に行つた。

併しあの女に云はせたら——

あの女のために、あの女の考へて居る通りな、あの女の本當の役を書いて呉れたものは、未だ一人も無いであらう。私はあの女の爲にあの女の役を書いた。それが本來あの女のものでは無かつたのか。

どうも左様は思はれぬ——左様は思ひたくな

い。只目の前の此事實を如何したら可からう。

併し——あの女にいさゝかなりとも私に對する愛情と云ふやうなものが残つて居ようとは思はぬ、そんなものが有らうとは思はれぬ。併し未だ一幕あるべき女だ。これ限りに成る女ぢやない。

私はこんな事迄考へた。

それも、何時迄かの儘あゝして居たら、如何變つて行くことであらう。一度、只一度で可いから逢ひたい、逢つてあの女の本性が糾した

私は昔の浮世草子に見るやうな、生若い男と女とが仲を壊かれて慕ひ焦れるやうな遺瀧のな思ひをした。幾たびとなく縁側を寄々して往反りしながら、又ちつと柱に凭れて建てつゞく町の屋根を眺めた。瓦屋根の黝黒いのが私の心を苛立たせるために、故とある不慣れな色をして居る様にも思はれた。一生此色を忘れま

いと思つた。

こんな風にして日は暮れた。夜は又夜の明け

るまで——

五月の初旬、此寺へ引移つてから初めて神戸

が訪ねて來た。座に着くと、

「こんな物が僕の許へ來たよ」と、開封した手紙

を私の手に渡した。

私は直に其筆蹟に眼を留めた。

「中を見ても可いかい。」

「あゝ」

私は手紙をひろげた。

先生は私の友達に成つて造ると仰有つて下さつたから、それにお縋り申してこんな事を申しますが、これは私が今後家出の際の口實なども有之候まゝ、此事は決して母の耳には御入れ下されまじく候。

あらゆる策を講じて平氣を装ひ、冷酷な眞似をなし、冷酷でも行かなければ輕薄をさへ以てして、いろ／＼に自分を欺かうといはしまして、山よりの歸宅後は、それにのみ勤めて今日迄參りました。かうでもして心にもない事を周囲の人々に言ひ散らした上は、自分一人で最後を決行し得ることと思つたからでした。そして小島様に私が單に彼の方を離棄したものだと思はせて仕舞つたならば、餘程自分が心安く成れることであらうと思つた。それで先日先生のお宅へ妙な手紙を

私は故意に差上げました。あれは小島様に私を心から輕薄な者と思はせて、存分に冷笑して頂きたかつたからの所業でした。

ところが駄目でした。いかに其邊中大謠言を言つて見ても、自分を欺くことは全然失敗にをはりました。最う今は策が盡きて居ます。小島様に對して何の興味を持つて居ませんでし頃、私が唯一の興味は自分の死、死の瞬間の思ひでした。そして必ず一人て死を決行し得るものと信じて居ました。所が、今日の境遇に置かれ、今日の心状態と成りては、今は如何しても獨りで處決することが出来なく成りました。幾度か企てても見たけれども以前の様なクリアーな頭で、靜かに死を待つて死ぬことは出来さうもない。死ぬにしても實にこれでは遺憾で成らぬ。

女子大學とは、先日櫻盟會に退會狀を出して、無關係のものとなつて仕舞ひました。又一昨日は木下姉と非常に冷酷な事を言ひ合つて、今後互に相離れることにして貰ひました。私を生かさうと思ふ

のならば、今迄の友誼的關係を全然忘れて、私を捨てて呉れと頼みました。承知して呉れました。

これだけの境遇にまで進めて見ましたが、未だ不可ません。殆ど堪へ難い不安に生きて居る。此上は最う如何とも致方ありません。小島様の御口から思ひ切つた冷笑、罵倒、其外何でも、どんな事でも宜しう御座いますから發表して頂きたい——私は小島様以外のお方から何と云はれても、てんで痛痒を感じられないものですから。私は小島様に愛を捧げることも、如何することも出来ない身で、又候こんな事をお願いするのは、誠に申しにくいことでも有り、又申された筈のものでないとは能く承知いたして居りますが、最うこれが最後の一策だと思ひますから、何とか先生より御取計ひに預かりたく、偏にお願ひいたします。かうでもして頂けば、屹度一月當時の我に歸ることが出来よう。其上はいづれ両親の安心いたすやうな方法によつて、家を出て自由の身と成ります。そして國を去らうと思ふ。最う境遇からとんと

ん自分でつくつて行く外はない。萬事を捨てて眞の孤獨となれば、自分の生命を深くしみ／＼と感ぜられよう。さすれば死が唯一の興味である。かうなれば、以前の我にかへつて、三年以來のわが夢を實現し、氷獄に端坐して凍死することも出来るかと思はれます。今の儘にては生きること死ぬことも出来ません。殆ど堪へられないと云ふより外に言葉がない。

親戚知己其外世を偽ることに於て成功したと信するだけ、自分を欺き得ないことが痛切に感じられて堪へられせん。今迄先生をも偽つて居りましたことは、幾重にも私の心狀を御推し下されて、お許して頂きたい。誠に何とも申しかねましたが、これが最後の御依頼だらうと思ひますから、何とも小鳥様まで御傳へ下さいまし。小鳥様御自身の御筆蹟にて、何とか一言最後の鐵彈を下して頂きますか、それとも御口づから承はられませうか。それも出来ずば、雜誌新聞などを通じてでも宜しう御座います。何とか宜しき様に、先生にお願いいたします。それ

にて私は萬事を決しますから、何卒々々最後の御手数と思召して御取計ひ下されます様くれ／＼もお願ひ申上候。

四月三十日

神戶先生 御許に

あの女の名

神戶は私が一通り讀みをはるのを待つて居たが、「何の事だか、僕には解らないね」と、投出す様に云つた。

「左様」と云つたまゝ、私は手紙を巻回した。

「第一何だ、今迄は他人を欺いて居たが、これから宜しく頼むと云ふやうな無法な言分はない。そりや君達の間ぢや欺くとも如何ともするが可い。併し中間に立つた者を只欺いたと云ふんぢや、全然法が着かぬではないか。」

私は思はず神戶の顔を見上げた。

成程、これが本當たら、あの女の非世間的なことは私にも譲らない。世間の人はそれ／＼忙しい。みんな自分々々の興味に忙殺されて居る。あの女の云ふことなどを、正面から引受けて眞面目に聽いて遣るものが、私の外にあらうか。

「うむ、未だ有つた。これも見るなら見たまへ」と云つて、神戶は衣囊の裏を搔搜したが、「い

や、無い。確に持つて出た筈だが——」

「何だ。」

「なに、此後に最う一本來たのだよ。僕は何と云つて遣つたのか、記憶えても居ないが、素晴らしく怒られて仕舞つた」と、神戶は急に砕けたやうな言振をした。

「仕様が無いねえ。」

「どうせ繋がる惡縁だと覺悟はして居るもの、随分有難い役廻りだぜ。」

神戶は苦笑して云つた。

二時間許りして、神戶は歸らうとした。二人は逢ひさへすれば夜が夜迄談しつづけたものだが、此頃はつとめて話題さへ搜す様に成つた。「ぢや、此手紙は最少し借りて置いて可いかい。」

「あゝ、可いよ。何なら君の許に置いて呉れたまへ。」

「左様か。ぢや、借りて置くよ。」

私は神戶を送つて神樂坂を下りた。午後の日影は冬支度の私の背にはぢか／＼と暑かつた。新に道善請をした後の小石が下駄の裏にごろろして歩きにくい。

「些と大久保へも遣つて來たまへ」と、神戶は坂の上に立つて云つた。

「あゝ、有難う。」

「あの寺も住心地はいいのか。」

「矢張寂しいね。何處に居つても同じことではあらうが。」

「左様きなこと、二足三足駄つて歩いて居たが、何と思つたか、「お互に熱のない癖に熱のあるやうなことを言合つて来た後は、寂しいものだよ。」

私は牛込停車場の入口に着くまで、別に口を利かなかつた。

二人は其處で別れた。

寺へ歸ると、直に最一度前の手紙を出して讀んだ。これが本當なら——本當でも本當でなくとも、私はこれを本當だと信ずる外に救はれる道はない。私は自分自身よりもあの女を信じて居る。寧ろ自分を信ずることが出来ないから、あの女を信じて居る。山で別れる時にも、「私は貴方を信ずるが故に、自分自身を信ずることが出来る」と云つた。あの女もあの約束を忘れたしなからう。

それにしても此手紙の中に、何處か稚氣の失せないやうな所が見えるのは何の爲だらう。あの女に取つて、女子大學が何であらう、木下が何であらう、一大事を決行する上に、そんな物

が何の煩ひに成るのであらう。

併しそれは直に思ひ返した。夜の白々と明ける頃まで、巻紙を幾尋となく書いては破り書いては破りした。夜が明けても、未だ何も書いて居なかつた。

窓の障子が薄白く成るに伴れて、洋燈の灯がだん／＼赤く成つた。終ひには笠も火屋も朝の光にはつきりと見えて、其灯だけ小さくとぼれた。何處からともなく、雨氣を含んだ朝風がすうと肌へ沁みわたる。私は手を延ばして窓を明けた。空には牡蠣の様な色をした雲が低く垂れて居た。

私は最一度あの女の手紙を讀んだ。彼時以來初めてあの女の書いた文字を見て、あの女の言葉を書くのだ。その一字々々に眼がとまつて一字々々に離れ難い様な心持がした。さりながら此手紙程、心を落着けて考へて見れば見る程冷淡なものはない。殆ど考へ様もない位に自己本位である。自分の目的を果すためには、他人は如何成つても關はぬ。總令其目的は死ぬと云ふことであつても、あの女が死んだ後、一人取残されたものは如何成ることと思つて居るのであらう。あの女は、自分のためなら、私と云ふものを幾許犠牲に供しても關はぬと思つて

居るのであらうか。恰も左様云ふ權利をアツシユームして居るやうではないか。

併し、あゝ併したんな事が私の口から云へた義理であらうか。自分のためには有らゆるものを犠牲にしても顧みなかつた私の口から——まゝよ、同類は同類に行く。私は矢張あの女に行く所へ行く外はない。

私は疊の上へ仰向けに倒れた。倒れたまゝ、眼をぎろ／＼と開いて居た。雨戸を練りに来た小僧が「お早う」と聲を掛けて、洋燈を吹消して行つた時にも、私は振向いても見なかつた。

午近く、やつと起上つた。そして日記帳を出して、其書き終ひの所へ丹念に前の手紙を寫し取つた。尤も日記と云つても日附が有る譯ではない。此頃の寂しさを紛らすために、その日の心の心持を一人で問ひ一人で答へる様に、基盤紙の中に小さく書いて來たのであるが、其手紙を打割めにして、此日からふつり日記をつけなくなつた。

四

午後中、私は只空の雲を眺めながら坐つて居た。朝曇りの空は、其儘降りもせず、だん／＼雲の底が光つて來た。

あの女の手紙は見た。併し私からとは何とも云つて遣り様がない、最早あの女に此思ひを通ずる機会があらうとも思へぬ。それは可い。それよりも私は此事について此上人の手を煩はすのが堪へられない様に思つた。他人を通じて物を言ふ——自分の生命と恃む、最奥のインテレストを他人の掌中に委ねて置く、そんな事が堪へられようか。

日暮前私は思ひ切つて寺を出た。そして、何日か或女と行合せてあの女の名を聞いた先輩の家を訪ねた。

主人は北窓笑して迎へながら、「如何だ、例の女から妙な手紙が來たと云ふぢやないか。」

「え、如何云ふ積りが解りませんが」と、言葉濁した。

「ふむ、神戸君も此間來ていろ」と相談して居たが、何うも當人が未だそんな事を云つて居る様ぢや、二應兩親へ其旨を通じて置かなけりや成るまい。勿論あゝ云ふ女のことだから本心は解らぬけれど。」

「さ、左様ですな。」

「で、僕から云つて遣ることに成つて居るんだが、何か君にも註文はないのか。」

「いえ、別に」と云ひかけて、「それに就て、若

し出来るなら一寸あの女に傳言がして頂きたいのですが。」

「ふむ。」

「私の方では、今度の事は既に終局を告げたものとして、何とも思つて居ないし、又此後とも何の意思もないのだから、二たび神戸君の手を煩はしていろんな事を云つて貰はんやうに。」

「そりや何うだ、此處に書きちゃア」と、主人は一通の封書を見せて、「これは先方の兩親へ宛てて遣るのだから、君が左様云ふ意志なら其様に書添へて遣つたら可からう。」

私は云はれる儘に、其餘口へ二三行書足した。それを持つて出て、歸途に暗がりの郵便函へ投込んだ。

あゝ終局——これで終局を告げたのか、私の口からはそれより外に云へなかつた。私には別に終局がある、其終局を待つて生きて居る。私はそれを、掌に爪の立つ程堅く握つて、僅に怪へて居る。

二三日は何事もなく済んだ。

或夕江戸川端へ來て、櫂の若菜の下に蹲りながら、近所の子供が啜々わめいて、猪牙船を操るのを見て居たが、それにも飽きて歸つて

來ると、其留守に神戸が來たと云ふので、机の上に置手紙がしてあつた。開けて見ると、中からあの女の手紙が出た。私は父かと思つた。手紙はわざと落着き拂つたやうな文で始まつた。

其後は御無沙汰に打過ぎ申候へ共、御變りもなく入らせられ候御事と存じ上候。

御からだに御障りもおはさずやと一方ならす心にかゝり申候、最早御神經も鎮まり遊ばされ候や、そののみ祈り居り候。

私も時のたつに従ひ却て疲勞をおぼえ候も、今は大方回復いたし候。先日は例の發作にて、連も堪へ難き急性に成

り、神戸先生を煩はして飛んだ御迷惑を相かけ、今更後悔いたし候。擬御書面に依り何等の意志なしとの御事だけ承知いたし大きに心安まりはいし候へども、

御筆蹟の亂れたるを拜見しては胸裂かるるまで心苦し有候。何卒一日も早く平かなる御心にかへせたまへ、心より祈上候。

などと。

それから一轉して、私如き打撞て置きては何一つ出来ぬ様

に成り居りしものを、いろ／＼御手に掛けられ、お蔭様にて新しき思ひを味ひ、生活の内容を少からず増し候こと、厚く御禮申上候。

など、茶かした様な事が書いてあるかと思へ

ば、

お手紙に依れば、何の意志もおはしまさぬ由、さらば今度のことはこれにて全く終局を結びたるものと認め、安堵いたし候。就ては私の態度は一變、勿論貴方も一變せられしものと見做し候まゝ、と書きかけて、急に又、

私はお互の態度を明かにして、後始末をちゃんと着けなければ斷じて承知しない

など、思ひ入つた様な言葉を挟んで、

私の案出せる善後策を御参考までに申上候。何卒御賛否の程御一報相煩はしたく候

とある。何事かと思へば、

私は貴方にどうしても創作を遊ばす方に成つていただきたい、其努力に依て何日迄も生きて頂きたき希望止みがたく候まゝ、第一着として今回の事を材料と

していただきたい候

と云ふので、それなら自分が小説のプロットを立てる相談相手に成つて遣らうの、女の言葉なら自分の方が少しは旨からうのと、いろ／＼並べた末に、それも強ひてとは云はぬ、若し不承知とならば、自分は日下海外に出て、自由の死所を選ばず計畫を立てて居るから構はないと書添へてあつた。

私は一わたり目を通したまゝ、手紙を其處へ抛出して、ぐつたりと机に凭れた。如何でも可い。最う如何成つても聞はぬ。只此儘暫く静手として動かさずに置いて貰ひたい。恰度長途の行軍に勞れた兵卒が、路傍の熱砂の上に倒れたら、其儘日射病に罹つて死ぬと知りつゝ容易に起上らないのと同じやうな心持がした。

やがて又手紙を取上げて二三行讀んだ。これで相手を難弄した氣なのかと馬鹿々々しくもある。それでも私の身には徹へた。あの女が海外へ出て果てると云ふのも、私には眞面目に思はれた。

其夜一時頃まで机に向つて居た。やつと二時半ばかりの手紙を書いたが、夜が明けて見ると出す氣には成れなかつた。二たび十行餘りのものを認めた。御申出の儀は此場合出来ること

でもなからう、縱令私は今度の事を書くとしても、この上貴家に迷惑は掛けたくない、貴方や御兩親のオノ／＼に係る様なことは斷じて書かぬ、何れ出来上つた上は一度お目に掛けるからと、極めて餘處々しい挨拶をした。

此返辭は幾日経つても來なかつた。

私は二たび書くこと云ふことに無理にも心を向けようとした。此儘では、世間の物笑ひはともあれ、自分自身の眼にも滑稽に見える、自分の眼に滑稽に映る位切ないことがあらうか。此状態から免れない間は、私は何をすることも出来ない、何をしても意味がない。

それでも何一つ書かなかつた。只それを書いて出版して遣らうと云ふ書肆があつて、豫告の必要上「煤煙」といふ題だけつけた。

或日、私は神戸から借りて置いた手紙を持つて、大久保の家を訪ねた。

此前の手紙の末に、「何日ぞやは、前後の考へもなく神戸先生の手を煩はして、何と思はれたのか、諺の眞實のと云はれ、腹立紛れについて飛んだことを云つて仕舞つた」とあつたのを想出して、

「此手紙の後に來たと云ふのは、何んな手紙だ」と訊いて見た。

「あゝ左様だ」と、神戶は四角な封筒に入れた紙を私の手に渡した。

私はそれを膝に載せたまま黙讀した。

拜啓、眞劍の態度でさへ申せば、少くも其瞬間に於ては凡のものの眞なるべしとは、予一人の認許せし所なりしと、今時分氣附いても早や遅時。かう成つては止むを得ぬ。人事關係の總ては絶え候。情的關係などとは以ての外、理解關係も無之候。いづれ所謂うそならぬことは御互様に火葬場を通過してより、ゆる／＼委細聞え上ぐべき機會も有之べく、わざと申殘し候。予も君を崇拜するものには無之候へども、小島さんや私などは餘程子供ならぬ、大きなお方とは疾くより敬服いたし居候。さればこそ三枚子嬢、我が救主、マドンナ、アーメンにて誠に平穩無事の次第なるべく候。計らずも我が汚れたる屑に御名を唱ふるの餘儀なかりし罪を許したまへ。予が見たる人生は齒きしりをしての綱渡りなり。笑ふだけの餘給もなきを惻れみ給へ。いづれ其内眞逆様。あまりに見え

透きては骨の碎くる音までも聞ゆるを。畜生に成るか、聖者に成るか。とかく中庸にてぼかす藝術を心得、ラブ邊りにてお茶を濁し野落、情死と胡魔化すが、賢しら人の避難所とは存じ及びながら、何と云つても脳細胞のワイブレションが背に感じないとならば、さりとて、致方もなく、又結論は例に依てナツシング、ナツシング、他人の云ふナツシングは知らぬこと、予に有りては何うとも始末の着かぬ時の迷言業。せめては一炷の香の煙の末に思ひを乗せて、家出の計畫、死場の選定、最早二度とは親兄弟、友人のある里にてはいたさぬこと。警官の御厄介にうそにも頭を下げる憂き目を味ひ候こと、心魂に徹して懲り／＼いたし候。こゝろ邊りが子供らしき處かとほゝゑまれ申候。御親切なるお言葉にて、私如きものまでも將來藝術界の人となれとの仰せ、誠に有難くは候へども、將來の幸福とか希望とか仇なることはとんと當に致したることもこれなく、現在に生きるだけが、やつと／＼の大事業に候。何を致しても屹度途中にて失望するが是迄の習

ひ、努力せぬさきから失望して置く方、くたびれ儲けの辛さなく、且は考へて見れば藝術とか云ふものも早晚自滅の運命を免るまじく、それも心細く候。何も致さぬこと、いたさぬこと。何うせ思想の不健全は前々四方八方より頂戴する御言葉、思想とは性格の一部分に過ぎざるべく、何様性格が病的に出来上つたからには、今更救済の見込みも立たず、何の道社會には生存在さぬが自他の幸福と覺悟は二三年前に定めながらも、ついで今日に迄及び候段誠に御恥かし候。計らずもこんな事を饒舌り立て候も、これは我が爲の煙出し。尤もあらゆる人事關係を放棄せる上にて申上げたことなれば、何の他愛もなき寢言同様、又諷を云つたなど御思ひ遊ばすだけにても今度御損に候。矢張君も死に依らざれば解決の着かぬお方、或は御同行の止むなきに立到りはせぬかと心配に候。以下は母の申せし處、眞偽の程は私一向存じ寄らず候へども、耳目に觸れ候まを御傳言申上候。毎もながら御親切よと繰り返し候。先日一寸御宅迄参上い

たせし處、あやにく皆様御不在にてばんやり歸宅いたしたる様にて候ひき。其後は又病院通ひに候、かしこ。

五月五日

神戶先生 御許に

あの女の名

ずつと目を通したが、只刺戟の多い文字がぐんぐん頭に響いて、ぐら／＼とする許り、何の事とも解らなかつた。私は手紙の紙を見詰めたまゝ、少時俯向いて居た。神戶も私と一緒に手紙の文字を辿つて居たが、

「御同行は驚くね」と呟いた。

又言葉をついで、「それから先達て彼家の姉さんと云ふ人が来たよ。其語ちや何でも阿母さんが病氣で、それに餘り家に許り置いても爲に好くならうと云ふので、一緒に旅行に出たのださうな。」

「あゝ左様か。」

それなら私の手紙も其留守へ着いたのであらう。何れ家の人の手を経るものとは思ひながら、何時迄も本人の手へ渡らず、自分の書いた物が宙宇に迷ふかと思へば心苦しかった。

私は大久保を出て、初夏の日光を浴びながら、

一人田圃の中の道を辿つた。額に汗が滲んで、歩くのも息苦しい。一足毎にそこへのめりきうにも思はれた。

あの女の手紙——あの女は矢張あの女だ、私の思ふ通りの女であつた。それにしても——

神と人間との間には未だ融通がある、何となれば神は人間の造つたものだから。けれど人間と人間とは終に近づくべき道がない。毎日顔と顔と合せ眼と眼と見合せながら、別々の世界に生きて、別々の世界に死んで行く。こんな不可思議なことがあらうか。

何處へも行く所がない。私は最う何處へも行く所がない。

私は前後を見廻して、懷から一挺の拳銃を取出した。引金に指を掛けたまゝ、銃口を額に當てがつたが、又そつと懷に納つた。そして足早に歩き出した。

不圖、氣が附くと、私は四辻に立つて居た。

何だか見覚えのある道だと思つたら、落合から新井の薬師へつゞく街道であつた——あの女と初めて會つたあの薬師へ——私は急に後戻りをした。雑司ヶ谷からぐるりと廻道をして、下宿の寺へ歸つた。

其月の末、私はあの女の家から一個の小包を

受取つた。開けて見ると、別れる時あの女に預けた書物であつた。私はそれを目に見えぬ押入の隅に隠した。

一週間程経て、私は又あの女から一通の手紙を受取つた。

拜啓、前月中旬より旅に明け暮れて御無音に打過ぎ申候。御著作中を御妨げいたすことは餘りに心なく、何より不本意に候へども、一言用事のみ申述べ候。授私こと總て計畫通りに参り準備も大方調ひ候へば、此夏だけは母の病氣もあることなれば湖南にて少しづつ母の心を慰め候後、遅くも秋までには漫遊の途に着くことに確定いたし候。勿論周囲の事情をも考へ、兩親の許可を得て、實際的に事を運ばせ候ものなれば、其邊は他事ながら御安心いたさき度候。就ては出發前に、今回の事につきましては師友父は世間より色々の質問をも受け居ること成れば、極簡単に私の態度を明かにし一應答へ置きたき希望に候。今日迄世に發言いたさず参り候は、一は新聞雜誌記者の質問に答ふことの餘りに馬鹿々々し

く、且は單に外觀的事實だけ語りたりとて、多くの誤解を生むとも事實の真相など解つたものにあらざるべく、

私は此處迄讀んで思はず眼を上げた。あの女は恰度其通りの事を敢てしたのぢやないか。如何して斯うぬけくとしたことが云へるのだらう。私は又思ひ返して讀みつづけた。

又私の小さき頭腦よりして貴方の總てを解し得ざるは云ふ迄もなく、又貴方も私の總ての方面を御承知なきは勿論のこととなるべく、且貴方は元々御創作を遊ばすことが最初よりの御考へなるべければ、それが公に成るに先立ちて、私が事件其ものに對して兎や角と言を挿むは御迷惑なるべしと、今迄差控へ居りし次第に候。

私は最早讀むに堪へなかつた。つまり其後は、昨日一寸歸京して見たが、近刊の豫告も出たさうだから、いづれ出版にも間がなからう。それを待つて師友や、眞面目な質問をして呉れた未見の知己にも答へたいから、出版の時日を知らせて貰ひたいと云ふのであつた。

私は直に筆を執つた。思ふさま書いて書いて書きちぎつて遣らうと思つた。

『櫻煙』は必ず書く。併し何時出来るか分らぬ。或は一生出来ないかも知分らぬ、若し貴方に云ひたいことが有るなら、そんな事には顧着しないでしつゝ發表して貰ひたい。併し貴方は是迄も随分世間へ對していろんな事を云つて居たぢやないか。勿論あんな風で山から歸つたら、

貴方の自尊心は傷けられたらう。それにしても餘りな、私でさへ見かねる迄反撥的なパツションに驅られておいでの様だ。成程漫遊も好いでせう。併し家族と云ふものは——私の口から云へたことでは無いかも知れぬが——決してむらな出来心の恩恵の下に置かるべきものではない。現在貴方のために病氣に迄成つた親を捨てて行く。少しは貴方のモラル、センスにも、訴へて見たら可からう。

斯んなこと迄書いた。あの女の非常識的な言動に報いるには、自分が常識的に成る外はなかつた。

兩三日経て、私は二十枚餘りの洋紙に鉛筆で走筆した、長い返事を受取つた。私は好く文字の速度が思想に及ばぬ時、鉛筆で手紙を書いた。それに倣つたものであらう。

その長い手紙は次の如く走つた。

御手紙は昨夜母の手を経て拜見いたしました。其時の氣持は速も云へません。昨夜來靜生をついでやつと氣が落着きましたから此手紙を書くことにしました。少し長く云はせて下さい。私は自分の苦しまぎれに誠にいろ／＼馬鹿げた眞似を致しまして、貴方には何とも申譯が御座いません。素知らぬ顔で心にもないことをどん／＼いたして居りました。故意に貴方を傷けるやうな事を致して見ました。けれどけれどあゝでもしなないで、私は如何して居られますか。未だそんな事を云ふか憫れ果てた女だと仰有るかも知れませんが、私はあんな事をして居ても、貴方だけに解されて居たと思つて居ました。私は大騒ぎで馬鹿げた眞似を頻に遣り出した。それでも貴方だけは私があゝでもせねば居られないと云ふことを知つて頂きたかつた。世間を相手にあゝ遣つて居るとは餘りと云へば、餘りに見てとつて下さつた。世間を考へるだけの餘裕があれば、あんなとぼけた眞似

は迎も出来ない。この前旅行先で拜領した御手紙はあんまりです。「貴家の名譽と貴嬢の名譽とは傷けないやうにする積りである云々。」あれは迎も堪へられなかつた。彼處迄より私は讀むに堪へなかつたから、其儘母に返しました。あゝ私ばたうと貴方にまでそんな事を云はれる様に成つたかと思ふと、もう泣くどころでもおこるどころでもない。只自身で血だらけに成つても未だ死に切れずに狂つて居る女の姿を瞻みて居た。オノア、オノアとは私の家の方で散々に責められた言葉です。私は父母の身として道理だと、誠に濟まなくも氣の毒にも思つて堪らない心持で居るのです。けれど親からでさへ此言葉を聞く毎に又不愉快でたまらない。唯一人云はないで居て下さる筈の貴方からまで、それを聞かされた——私は親に對してはモラル、センスどころではない、原始的の愛情がある、犬や猫に見るやうな野生のまゝの愛情がある。それでも私は如何しても今度家を出て見ようと思ふ。名譽々々と云はれるのが辛いことも一つは其原因です。今後の私の

生涯は名譽回復のために存在を許されるやうな取扱ひは迎も堪へない。私は冷酷ぢやない。只冷酷を装はねば居ても立つても居られたものでは有りません。如何に何でも世間の人と同様に貴方の御口から「お前の名譽は保護して遣るとか、病氣の母親まで捨てて去るとは何と云ふ事だ」とか仰有るのは令して頂きたい。いかに決心は定めて居ても私も石ではない、又心が動き出して仕方がありません。さうかと云つて此儘兩親の傍に居ては迷惑を掛けるまでも満足を與へられよう見込はない。私は思慮の結果道理に従つたのです。あの汽車で御別れした以來の私のやうに、或パツションに支配されてわざとらしくな事を遣つていらつしやるのなら知りませんが、それではなく眞實に貴方まで此前の御手紙や又は今度の御手紙のやうに私をお考へに成つていらつしやるのかと思ふと迎もたまりません。もう今日は何も彼も云はせて下さい、云ひたいことが誰にも云はれないので、私は一人で狂ふのです。少し前のことですが、それから云はせて

下さい。御別れ後、私は何故こんなに成つたかと云ふことから云はせて下さい。それは汽車の中で承はつた最後の御言葉——あれが元です、あれが私の總ての努力を踏みつけた。「無論手紙などは遣り取りしないこと。」これが私の心にどんな印象を深く残したか知れない。御想像に任せませう。王子の一夜、私は只其御言葉ばかり繰回して居た。そして生涯の好き敵一人得たと思つた。あの情熱の燃え立つた瞬間に生滅する方面の私は、其夜僅の間にどれだけの恐ろしい事を考へて見たか知れません。とても恐ろしい空想をゑがいて居た。けれど其反抗心のために自分自身の苦痛を忘れて居ただけは寧ろ幸ひであつた。そのために歸宅後も兩親に對するモラル、センスなど二三日は動かなかつた。只祖母に會つた時如何にも嬉しさうな顔附で「何でも生きてさへ歸れば結構さ、どうでもお前の好きなやうにして上げるのだから死ぬことがあるものかね」と云はれた時には、初めて聲を出して泣くことが出来た。其他の人達には何の感情も動かな

い。只貴方に對する敵愾心に心の大部分が占められて居た。其當時私が世間に向つて饒舌つたことは——無論強ひられて口を開くのですが——世間を相手取つてなど云ふ思慮もなければ、てんで其方には頭を向ける氣にも成らない。口を開けば、只貴方を相手取つて、あの時のあの「無論書信などはしないこと」と云ふ聲を耳にしなが饒舌つて居た。其當座私は只貴方に對する怨恨のみに充ちて居た。貴方は私が又今度の事の爲に自尊心を傷けられて、それで恨んで居るものと思つて頂いたかも知れない。それは自尊心と云ふやうなものも無いとは云はないけれど、そんな事よりも更に「私を動かしたものは別にある、口惜しくて残念でたまらなかつたことは別にある。向後自分一人で死を決行し得るか何うかと考へた時、私は逆も只ちつとしては居られなく成つた。あまりの遺憾、あまりの意氣地なさ。勿論貴方を恨むといふ理由はない。只自分の意力の足らぬこと、自分が信じて居ただけ鍛鍊が出来て居なかつたことを感じた時の苦しさである。苦し

さの持つて行きどころがないから、夢中で神戸先生にも當つて行つた。木下にも當つて行つた。寧ろ激發を強ひて招いても狂ひ廻つて居るのが最も容易であつたからでして。悪いと知りつゝ狂はして置いた。時には冷笑的な氣持にも成つた。何んな事を云つても平氣であつた。何がなしに只可笑しく、笑つて／＼留度なく笑ひたいやうな氣持が一日中つゞいたこともあつた。けれども家の者が少し心配し始めたやうに見えたので、例の避難所へ逃げ込んで、朝夕座禪ばかりして居ました。それから旅へ出ました。其處へ先日の御手紙が遅れて私の手に落ちた。あれに對する私の激昂の結果は誠に考へれば子供らしいまで馬鹿らしい行爲をさせたのです。御本をお返ししたすやうに姉の許へ依頼して、殊にもう私の名を書く必要はないことに成つたとまで註文して遣つたのでした。

それから歸京して見ましたら、時子から手紙が来て居て、『煤煙』とか云ふ小説が出るさうだ、近刊豫告を見るがいゝと、これだけの事でした。此手紙で私は又腹が立つた。重んゝの事で堪へられない。そこで仕方がないから、あの手紙を作ることにしたのでした。誠に何とも申しやうのない書き振りにには相違御座いません。けれど私は眞面目でした。震へながらも彼の條に書いたのです。あゝでもするより貴方に接近する道はなかつた。それより外に、私は貴方に對して報いる方法を知らなかつた。あんなしらばつくれた顔をしてあゝせねばならない私の心の中は誰も察しては下さるまい。私は漫遊などいふ文字を特筆大書する必要があつた。血まみれに成つた女が、さりとして死にも得せず、自分の血と肉とのつゞく限りわねとわが血に癒えつゝ最後まで戦はねばならぬと、取返しのつかぬ創傷を負ひながらよるめき去る姿を隠さむが爲であつた。私は只貴方にのみ解かれたりと信じて居たのに、かうまで成つた以上は、いつそ自分の血と肉とを以てした行爲の總てを滑稽化して、貴方に報いるのが唯一の方法であると考えた。それで私は『煤煙』の出版を待つて、私の態度を師友に向つて明かに答へるとしらはつくれたので

す。私に今日師友と云ふものが何處にありましか、それだけでも祭して頂きたい。もと／＼眞の師友といふものはなかつたには相違ないのですけれど、師友に答へるとは即て貴方に答へると云ふことに成る。而も思ひ切つて馬鹿なことを云つて御答へするつもりであつた。私は何をやるのも皆貴方を相手にして居るのである。貴方の前に發表した自己以外に、何で他人に發表し得るいつはらぬ自己が残つて居よう。

私は自分で出来るだけの處まで貴方には接近した。あれまでも他人に接近したことが是迄あつたでせうか。他人の前にあれまでも自己を表はしたことがあつたでせうか。あれ以上の發表は私の口からは逆も出来なかつた。只藝術家たる——私は左様信じて居た——貴方の洞察力に訴へようと思つた。私は自分を見ることは何處迄も酷である。其日々々のことには諷もあり、方便もあり、遊戯もあつたには相違ない。けれども始終一貫して偽らぬ我だけは何處迄も見えて欲しい。私は最う仕方がない。今日は總て云はせていた

だきます。

私は口では逆も云へぬことである。いづぞや貴方は私をスフィックスの様な女だと仰つた。私はスフィックスの態度を装つてならば、何時でも貴方と搦手する資格がある。けれども今これを書く間は貴方と眼と眼を見合はせることはとても出来ない。貴方は御自分を敗北者だと仰有る。私も敗北者です。けれど私の苦痛は貴方の苦痛とは全然別のものです。私は何故スフィックスのやうな女に成らなければならぬか。敗北したことを切り感じたからです。肉體的に征服されなかつたから勝利を得たなどと、そんな大まかなお目出たい考へでは私の性質として瞬間も居られない。私は何よりも自分の心の経験を重んずる。肉體的に何うした斯うしたは第二の問題です。敢て問ふにも及ぶまい。私は自分の心を暖味に取扱つて置くことだけは何うしても許さないのです。私は深い／＼創傷を受けて仕舞つた。これは貴方だけは解つて下さるでせう。

貴方にも解して頂くことが出来ないです

れば、私は今度胸に受けた創傷に堪へない。思ひ切つた馬鹿なことをして自他を欺くより外に今後の道はない。私だつて涙はある、涙はある。私の苦痛は私の口から誰に向つても云へない。無論云つた所で同情同感などして呉れる人はある筈がない。只信賴して居た貴方までが餘りな事を仰有るやうに成つた。「私が見かねるまでに反動的な情熱に驅られて居る」と仰有るが、何故私があんな事をして居るかは祭していたゞきたい。自分でも見かねて居るのです。けれど私は貴方にこの見かねたさまを見ていたゞけば可い。私は悪いには相違ない。貴方を傷けるやうな事を敢てして居たのです。實に悪いけれども、切めて何故あんな態度を執るに至つたかといふ、それだけでも時には祭していたゞきたい。私もこんなに精神生活の動搖をうけたことは有りません。若し私に自分を非我の位置において觀察する習慣がなかつたら、とうに狂したか、また無分別な死を遂行することが出来たかも知れない。或はその方が幸福であつたでせう。けれども私は情

熱に驅られて動いて居ると同時に、一方では餘裕のある我が見て居た。儼り恐ろしいまでに激發しさうに成ると知つた時は、多くは意力でもつて制御してしまふ。私は自分を制御する上に始終座禪の力を藉りて居る。私は禪の思想を口にする資格はない。只自分を制御する方便に使つて居る。いつぞや御同行した日暮里の兩忘庵は、私がたゞ物好きから彼處へお連れ申したとでも思つていらしたかも知れませんが、あれは私が三年前十日間夢中になつて坐つて見性したところなのです。それで貴方と圖ふ時あの家を一度見て置きたく成つたのです。貴方もお聞き及びでせう、釋宗活と云ふ坊さんを。それから貴方が私の心を解剖して下さい、あれにお答へいたします。私も先達で以來いゝ反省ばかりして居ます。が——こんなことをして居るのが今は一番心易い——私にとつて自殺は自我の完成である。自己意志の發現である。までは思ひません。私にとつて自殺はいよいよ情熱のために破船せねば成らぬと、切迫つまつた瞬間に辛うじてとる消

極的の勝利なのです。今度自分が死を決するに至つた心狀をいゝ／＼振返つて見ましたが、私は貴方とお話をして居る時、又は手をとつて歩いて居る時などは、とても死ぬ氣に成れない。死を決行する勇氣はない、又涙などは何うしても出ない。けれども抱擁された瞬間涙は直に出る。同時に死の決心は成る、又實行も出来る。あの瞬間に殺されるのなら私は平然として一番容易な死に方をする。自己意志の發現だとは信じられない。更により強き我がわれの上にあると思ふ。今度私があれで死を決したのは、あの當時はどこまでも最後まで戦つたと思つたけれど、死を決するに至つた動機を更に考へれば、或意味に於て敗北であることは明かである。それは恐怖と不安と苦痛とに連も堪へ切れなく成つたからです。決して強いものではない。最後に貴方のお手に避難所を求めた譯に成る。つまり奮闘の中途に於て恐怖と不安とがあまりに切實に迫つて來たので、實は逆も堪へられないから死ぬ氣に成る。ですから抱擁されて居る時——最

も不安な時で、そして最も情熱の熾烈な時に死にたい。尤も是は私の思想の結果ではない。私の頭は寧ろこんな死に方では承知せぬ筈である。だから私は家出前切に正視したのです。若し貴方と相對坐して居る時に施口を向けられたら、私は吃度自己防禦の態度をとらずには居られまいとも想像して見た。戦へるまで腕力であたらうかとも考へた、又意力をもつて平然として殺されて仕舞はうかとも考へた。自殺するよりも其方が容易には相違ない。けれども甚く敗けたやうな氣がして來たのでした。それで口惜しきまでに、御覽でしたか、あの遺書をした。あれは自分で自分を偽つて見たのである。同時に貴方へ當てつけたのです。時に手紙を遣る氣に成つたのも同様の氣持からです。それと最一つあの遺書をして置けば、もし或事情に迫つたら自殺をする勇氣も出ると思へたのでした。貴方は私がまさか世間を相手にあんな遺書をしたものとは思つて下さるまいとは思ふが、私は誓つて云ふ、あれは貴方へ當てつけたのである。あれを受取るべき人は

貴方より外に世には一人もない。改めてあの遺書を貴方に差上げる。

こゝに私の目頭から考へて居る思想上の問題を少し語らせていたゞく。私は哲學や宗教に關する讀書をしたことは殆ど數へる程しか有りません。只自分の心的經驗の過程を考へて、個人の思想發展に四つの階段を設けて見る。

一、肉の時代。

二、肉と靈と對立の時代。

三、靈の時代。

四、靈肉合致の時代。

此四つは發展の階段ではあるが、又同時にこれだけ存するものと思ふ。そして意志の力による精神鍛鍊に依つて最後の境地まで到達することが出来るのです。若し修養と云ふことが少しもなかつたら、何時迄経つても肉の時代にとどまるものだと思ふ。それからこれは私が確信して居る所ですから特に申しますが、この靈肉合致の境地は一度肉を征服して靈化し去つた境地を経た人でなければ達し得られるものではない。メレヂュコフスキイの象徵主義とはどんなものです

か、是非讀んで見たく成りました。私は知らないから何とも云ふことは出来ませんが、只肉は靈の象徵で此象徵を通じてにあらざれば靈を窺ふことが出来なると云ふ言葉は大變面白く感じました。但し靈の象徵であるといふその肉は靈肉一致の境地に達した、即ち訓練を経た肉であると思ふ。二元論の見解にあるところの肉とは區別して論ずる必要があるでせう。私はなにもシステムイックな學說を人の前で云つて見る考へもないし、又其力もない。時には何とか系統を與へて自分の頭を明瞭にして見たいと云ふ要求も起らないではないが、私はたゞ自身の血と肉とを以て戰つて居るまでである。血と肉とをもつて、靈肉一なる境地に泳ぎ着かむとする努力である。今でも此境地に達したと信ずる瞬間はある。けれども多くの瞬間は第二第三の間に彷徨する苦悶である。悶の苦しさに堪へない時、死を考へる。けれども死は最後の勝利だと思へない。この上は最後まで生命の續く間は戦ひます。死ねば戰場で死にます——私も今度といふ今度

はしみ、自分の弱さを感じました。今度私が死を決したことは貴方をしほに自分を欺いて避難所を求めたものである。しかも終に避難所へ埋没し去るわけにも行かず、新に手傷を負うて血まみれに成つて出て來た。何だか又頭が亂れて來たから止めませう。

思附き次第順序なく書いて見ますが、貴方に私を接近せしめたものは情熱であつたには相違ない。それは確です——けれど一方には私に友達がないことです。私が本當に自分で考へ自分で感じて居ることを其儘に發表したことは殆どなかつた、なかつたのではない、出来ないやうにせしめられて居た。私は喧嘩ばかりして來たといふ。けれども自分が本當に考へることを發表して人と思ひ上の争ひをしたと云ふのではない。そんな事はしたくも今迄出来なかつた。私が何と云つたところでどうせ駄目だと云ふ絶望的な腹立ちまぎれに、他人を相手取つて争つて見るので、私の思想其者とは關係がない。勿論目的もない。只絶望的な恨みから無鐵砲な喧嘩をするだけのことです。

この時の私は全く態度が違ふ。貴方の前にもこれでもつて現れたことが近頃は澤山ある。勿論無道徳になつて仕舞ふ。只知的に意地悪くさへ出れば可い。故意に馬鹿な顔をして見る。裏のあること許り云ふ。貴方は私が他に何か目的があつてやると思つて下さつたかも知れないが、そんな餘裕は私にはない。ふざけて遣るのでも、じやうだんに爲るのでもない。齒を喰ひしばつて居るもののあることだけは見て頂きたい。私自身も決してこんな事をするのが善いこととは思つて居ません。けれど辯解がましいけれど、境遇上から成らざるを得なかつたと、自分では思つて居ます。これは私が後天的に受けた一面である。

それと似た様なことで、好んで他人を齷弄したり、軽く竹箆返しをする癖は、貴方からも一二度氣を附けられた。自分にとつて別に意味はない。わざわざ骨を折つて遣つて居るのでも何でもないので。一寸眼前の知的好奇心から出るので、お友達などと云ふものに對する時の私はこの私である。第一にあの加藤さんを齷弄

してしまつた。今迄接した人とは少し違つて居たから好奇心に驅られてしたので。貴方の前にも折々こんな態度が出たやうでした。迅速に竹箆返しをするのも氣が附いては居ますが、考へて遣るのではない、反射的に出るのです。

こんな事を書いて居る間に、私は何とも知れない、近頃にはない穩かな氣持になつて來ました。故意とらしい態度で此間中貴方に對したことは許して下さい。只私は不眞面目にあんな眞似をして見たのではない。それだけは認めて下さるでせう。私は貴方にお別れした以後も解されて居たところは解されたものと思つて居た。それだけは何日迄も變らないと信じて居た。未だ手頼つて居た。それ以外私は何を誰に手頼つて居るのがあるらう。私の總ての中で自分以外のものに手頼つて居るところと云へば、只私が貴方の前であんな事を遣つても、貴方には解されて居ると信頼しただけです。ところが何日の間にやら世間の人から聞くやうなことを貴方から承はる身と成つた。私の態度が一變したのは無理もないと思つて

下さい。あゝ又得手勝手なことはかり云つて仕舞ひましたけれど。私は私である。世間とは獨立して居るつもりです。私が今度やつて來たことは、私にとつては曾てない大事業である。この経験は生涯の所有である。何んな事があつても抹殺するわけには行きません。これだけの努力は非常な價値を産んで居る。私の一生はそれだけ値打を優したのである。事實は事實ではありませんか。世間が何と云つたとて、二人して遣つて來たことは有の儘の事實である。誰が何と云つたとて、二人の間の事實を揉み消す力がある筈はない。私は堅く左様信じて居た。この事實は二人が所有すべき特權がある。私は一分一厘でも抹殺されるのは遺憾で成らない。私は創造生涯の所有として居るつもりである。私の胸には深酷な悲痛をとて／＼云はれない位感じて居る。こんな悲劇を書いたものは未だ世間には有るまい。私は貴方に向つておこる權利はないけれども、貴方を藝術家として深く信じて居ただけ、私は此前の御手紙と今度の御手紙とに對していよ

いよ失望せずには居られない。勿論勞れていらつしやる貴方の御手を勞して自分のことを小説にしてくれなどと厚顔しいことは云はないまでも、この悲壯な生きの小説をせめては二人の所有として生涯持つて居たいと思ふ。これだけの希望を繋いで居たものである。それなのに近頃貴方の御心に持つていらつしやる悲劇と私の持つて居る悲劇とが別々のものに成つて來た。私はそれが残念でくつとでもたまらない。

それは私の両親を御心配下さつたのは有がたい。名譽を重んじるなどと仰つたのも御本意ではありますまい。けれども私と相談して、いやらな事を書かうなどとはあまりに二人を侮辱し切つた話である。物質的に二人を破壊しなくとも、あのお言葉だけで十分に踏み潰されたものではありませんか。自分のしたことは終生責任を負ふかはりに、他人から抹殺されようとする時どこまでも所有を主張する權利がある。藝術とは何んなものか知りませんが、少くともそれ自身に於て獨立したものでせう。社會の前に頭

を下げて、初めて存在を許されるやうな藝術なら餘りに憐れむべきものである。私は貴方の前にしたことは社會は眼中になかつた。どうぞせめて御筆を御執りに成る間だけでも、二人の舞臺にしていた

だきたい。母を御心配下さるのは誠に有りがたく御禮致しまするけれども、決して貴方が御想像下さるやうに、私の家の者は貴方を恨んでは居りません。私の方が恨めば母よりもつと恨んで居る筈である。母の病氣は久しい前からの持病でそんなに甚いのも御座いせんから、何卒御安心なすつて下さい。私の母のことは私が心配いたします。貴方はどこまでも藝術家としての威嚴を保つていただきたい。藝術上の問題にまで周囲の事情を顧慮せねば成らぬと思ふと私は残念です。私が若し藝術家であつたら貴方の様な雅量はとてもない。私はどこまでも區別する。周囲の事情を顧慮して常識的に動く時の私と、自己を主張する時の私とを混同することを憎む。私の家のために頭を下げて下さつた御心の程は誠に有りがたいので、私にも

分つて居ますが、藝術家としての主張を貫く上には決して御遠慮には及ばまいと存じます。それでなければ貴方はあまり御苦しくいらつしやりはしないかと思つて、何だか申譯もないやうに成つて來ます。私は貴方の様な氣持では居られない。

大變長々と書きました。私は今迄誰にも云ひ得なかつたことを何も彼も書きました。お目に掛つてはともく云へない、決して云へないことも申しました。今日は貴方に最も接近した。かの山上の一夜よりも接近して居ます。けれどもこの様なことまで僞るところなく自分の姿をあらはした時、私は今は御目にかかる資格を失つた。スライクスの様に振舞つてこそ御目にかゝる資格もある。が、只満足します。自分以外の人にこれ丈の事を語り得ようとは曾て思ひ設けなかつた、云つて見ようなどと云ふ氣にも成らなかつた。不思議で成りません。私はたうと總てを告白するやうに成つた。私自身の口からは永久他人に語るわけには行きません。今日、明治四十一年六月

十日、貴方に發表いたしました。私自身は私を發表する資格はない。とても申せません。金輪際云ふ譯には行かない。只貴方に願つて置きます。私に關する一切の發表の自由を御任せいたします。重ねて申しますが、今回私のいたしましたことは何處迄も私の所有である。他人の所有を許さない。——子のしたことである。いかに不名譽な形容詞を世間から浴せられたからとて、——子の名まで抹殺することは許さない。私が悪いことをしたならしたので、私が責任を持ちます。其御心配はして下さいますな。

改めて私に關する發表の權利を貴方一人の御手に總て譲ります。私は生涯眞の自己を自ら他人に語ることは有るまい。一切貴方に御願ひいたします。母のことは御安心下さい。又私も今迄云ひ得なかつたことを云ふことが出来たから、今後は決して見苦しい狂ひやうはしませんから、これも御安心下さい。

あの女の名

小島様

御許に

最う少し書かせて下さいませ。先日私から差上げた手紙に煙を御恵與下されたく云々と書きました。あの御恵與といふ文字は餘程考へたのです。私は腹が立つて堪らなかつたからあゝ書いた。それを貴方はまるで違つた意味に御取り下さつた。私はあの旅行先で拜領した御手紙のやうな、あんな御心持でお書きに成つたものなら、一切拜見が出来ないといふ意味だつたのです。あれでは藝術家らしい態度もなければ、同時に私をも少しも解して被坐しやらない。私だけを侮辱なさるのなら未だしも来へる。貴方御自身まで侮辱して被坐しやるから、私はあんまり腑甲斐なく思つた。あれでは二人とも渾身茶々にされて仕舞つたぢやありませんか。今度の御手紙の「出版前には御前に一度見せるつもりで居る」といふのも、同様の意味に於て、又二人を侮辱して居ると感じました。そんな態度で御筆が御とりに成れるものか、又私がそれを喜んで拜見いたしますと云へるものか、御考へ下さいませ。藝術家たる態度を失つておしまひになつた貴方なら、

最う貴方でもなく成つて仕舞ふ。貴方を藝術家と信ずればこそ、あれまで接近しました。藝術家でもない人に、何であれ迄讒弄されて見るのですか。最初から斷然お斷りした筈です。

社會上の位置を失つたから藝術家にでも成れと、私が云つたと仰有る。私はもと／＼社會上の位置など御かまひに成る方ではないと貴方を思つて居た。社會と個人との關係なんて、私にはとても認められない。私の世界が社會とどこに相應するところが有るか。貴方と私との關係は私にとつて最初で而も唯一の社會的關係です。この外私には何處に理解ある關係がありますか。貴方に理解されよう、知られようと思つたのは、成程私の弱身ではある。私は何うせ誰一人にも知られることなく、獨りで戰つて獨りで死んで行く身だと、覺悟は疾うにして居た。ひとりでもいゝ、何うでもいい、どうせ駄目だとは、私の心と對する絶望の聲である。けれど今度貴方の洞察力に信頼して自分を知られて見ようと云ふ氣に成つた。そんな希望

を起して見たのは、私が悪いには相違ない、私が弱いからには相違ない。併し一旦知られて見ようとあれまでも努力もし、又知られたとも信じた後に於て、ちつとも知られて居なかつたといふことに成つては、逆も堪へられない、孤獨でたまつたものぢやない。先頃中の様などぼけた顔でもして居るより外に、私には仕方がなかつた、あゝでもしないでは如何して居られよう。只貴方に知られて居ると思へば、私は何處へでも行つて、ひとりで自分の世界の隅を最後までつづける力も出ると思ふ。何うせ解して貰ふ見込のない社會に、しかも邪魔ばかりされて居るよりも、せめては邪魔だけでも餘りされない所へ去つて、社會とは只自分の肉を支へるだけの資料を得るために無意味な關係だけしようと考へて居るのです。唯一人と思つた貴方にも解されずに生涯ををはるとすれば、あまりに孤獨の感に堪へなく成つた。でも未だ解されて居ると信じて居る。だから又こんな長たらしい事も書いて見る氣に成つたのです。未だ申上げたいことはいろいろ

有りますが、あんまりだからこれで止めませう。

私に關する一切のことは貴方の御所有だと思ひますから、何でも御發表下さいませ。其代りには他人を相手に御書きに成るものなら私は承知しない。『煤煙』は貴方と私と唯二人の所有物だと信じて居ます。外の人に何で解るものですか。此手紙は何でも手から手へ直接に御渡しすべきものです。仕方がない。仕方がない。

私は始終わく／＼としながら、幾度も途中で行止つて又後戻りをするなど、長い間かゝつてやつと讀み終つた。讀んで仕舞つた時は割合に平靜であつた。左様あるべきものが左様であつたと云ふ迄で、別段心は動かされなかつた。今更『煤煙』は二人の所有物だと云はれても、此生きた小説を切めては二人の所有として生涯持つて居たいと云はれても、如何いふものか餘り身に沁みなかつた。二人の中の事實は何人といへども採み消すことを許さぬと云ふ。併しそれを採み消さうとしたものは、あの女自身ではなかつたのか。あの女自身が事實を抹殺し去らうとしたら、私は如何することも出来ない、幾

許焦燥つても深掘りしても如何することも出来ない。如何することもあの女の自由である。現にあの女は自分が血と肉とを以てした行為の總てを消穢化して私に報いる外はないと云つたぢやないか——何だかそれが私の言葉について描へた言譚の様に思はれるけれど。

山から歸つた當座、あの女があゝでもして居なけりや居られなかつたと云ふのは解つてゐる、其心持は解つて居る。併し最後に汽車の中で云つた私の言葉がそれ程あの女の機嫌を損じて居ようとは知らなかつた。勿論手紙など遣り取れないと云つたのも、あの女を信ずればこそ云つたのではない。あの女を信ずる言葉があゝの女の意力の足らぬこと、鍛錬の出来て居ないことを諷示したと云ふのなら——何だか解つた様でもある。只それだけに一層詰らない。

併し私の前に發表した自己以外に、何でも他人の前に發表し得るいつはらぬ自己が残つて居ようかと云ひ、出来るだけ、私には接近した、あれまでも他人に接近したことが是迄にあらうか、あれ以上自分の口からは逆も云へない、此處を見よ、此苦しきを見て呉れぬかと云はれては、私は矢張あの女を豫々信じて居た通り

の女だと思ふ外はない。スフィックスの態度を装はなければ私と握手するに堪へないと云ふ、其女面獅身の像と齊しく、あの女の頭の背後に暴れ狂ふものは矢張獸の本性ではなからうか。それなればこそ、あの女は自分にも涙があると云ひ、自分の苦痛は自分の口から誰に向つても訴へることが出来ない、縱令訴へた所で同情同感などして呉れる人はないと云ふのだ。それでなければ意味がない。あの女が自分でわざと女ぢやないと云つて見たり、氷につくか火につくか、兎に角中途半端では堪へられないなぞと云ふのも矢張それで説明されよう。二六時中氷の様な意志の力で抑へては居るものの、一寸でも隙間が有つたら忽ち異常な情慾が勢を得て、燃え上る火焰の中に身體ごとじたくと熔け去る外はない。抱擁された瞬間、涙が直に出て、同時に死の覺悟は成ると云ふのも是が爲ではないか、左様思へば、三年前日暮里の兩忘庵で夢中で見性したと云ふのも頷かれる。あの女は自分を制御する方便として座禪の力を藉りて居ると云ふ。只それ方便である、目的ぢやない。徹頭徹尾あの女が禪學に依つて説明されると云ふのぢやない。しかも其制御の力がだん／＼弱く成つて自分が自分に負けて狂つて

行く。未來の定められた運命を明かに見ながら苦悶を續けて居るものとしたら——實際生きて居るだけが大事業であらう。何んな事を云はうが、何んな事を仕ようがあの女には許される。あの女の性格が冷酷を通り過ぎて、時に殘忍なと迄見えるのも無理はない。其殘忍な發作からあの遺書をしたのだとしたら、あの私だけに見せる積りであつたと云ふ遺書も、若しあの女が死んだ後に、私一人生き残つて、警吏にでも捕はれ、裁判官の前に曳出されて——私は何時ぞや新聞で讀んだ湯島の女殺しを想出した——あの遺書を證據物件として讀上げられたら、私は如何成つたことであらう。いかに私でも狂ひ死の外はない。あの女は、自分の死後、牢獄の中迄跟いて來ても、私の魂を粉碎しなければ止まぬと云ふのか。成程あの女の仕さうなことだ。それにしても何と云ふ恐ろしい復讐であらう。

尤も、こんな事を考へるのは、矢張空想に驅られて居るのかも知れぬ、自分一人の想像で拵へて居るだけかも知れぬ。あの女の云ふことだつて、只私の前の言譯に、後から捏つて云ふのだと疑はれぬこともない。併しあの女の何れだかが、私が夢に見て居るので、何れだけが實際なのか。今更あの女の實際は知りたくない、知りたくない。物足らぬことを云へば、其外にも數々ある。それが眼に附くやうに成つた。あの女が、内に充實して生きて居る女だけに、外へ對しては何處か幼稚な、世間見ずとも云ふ様な所があるのは可い。それなら何故自分一人の中に止まらないで、時々自分以外の物について口を挿むのだらう。自分の悲痛を切實に感ずるのは可いが、こんな悲劇を書いたものは未だ世間になからうなぞと云はれるのは可厭だつた。藝術家々々と矢鱈に藝術家呼はりてされるのも、何だか故意とらしい。それに又藝術の尊嚴と云ひ、獨立と云ひ、そんな事ならあの女の説法を承はる迄もない、私の方が好く知つて居る。兎に角あの女には自分の周圍が見えぬ、周圍と自分との釣合が解つて居らぬ。それだから世の中へ對してシニカルな態度を執るのだ、他人を譏弄するのだと云つても、それが一人で左様極めて居るやうで、側から見ると滑稽に成らざるを得ぬ。全體自分以外のものが丸で見えないのに、自分と云ふものが見えるだらうか。自分を知るのは自分の周圍を知つてからのことである。あの

女が自分を非我の地位に置いて觀察する習慣を持つて居なかつたら疾うに狂したらうの、自分を暖味に取扱つて置くことだけは斷じて許さぬのと、自分と云ふものを知り切つた様に云ふのも、餘程限定された意味に於て聞かなければ成らぬ。あの女は又、自分は禪の思想なぞ口にする資格はないと云ふ傍から、頻に靈だとか肉だとか人生觀めいたものを並べる。個人の思想發展の段階が果して四つの時代に分けられるものやら、それが又意思の力による精神鍛鍊に依つて到達せられるものやら、そんな事は私には解らぬ。メレヂュコフスキイの象徵主義と云ふのも、只靈の救済を盾に肉を虐げる希伯來の思想に對して、美と快樂とを卑しめ希臘の思想を調和しようとしたまでで、あの女の云ふ様なつもりぢやなからう。何れにもせよ、私はあの女から主義だとか思想だとか、安價な講義めいたものを聞くことを好まぬ。あの女を動かしたのは、そんな薄ッぺらなものぢやない。

成程、私は何日かの手紙にあの女の心持を解剖して、「貴方に取つては、通例なら自己否定の極限と見做される自殺も、事實上自己肯定の最高潮に達したものである。自我意志の極限である。貴方は生れながら自我意志を顯

示すべく運命の手に縛られて居るのだと、こんな事を云つて遣つた。自殺を自我意志の發現だとするかしなないかは考へ様だから何方でも可い。只あの女が自殺を唯一の目的だと云ふ時、あの女を縛つて斷崖の上へ連れて行く者は、あの女の持つて生れた黒い運命の手でなければ成らぬ。

見よ、此手紙の中にも一道の殺氣が漲つて居る。動かし難い決心がある。私を傷ける様なことも敢てしたと云ふ。悪いと知りながらどんどんして居たと云ふ。何んな事をしても平氣だと云ふ。見かねた様を見て貰へば可いと云ふ。こんな事は死を決した者でなければ出来ぬ。自分が死ぬ覺悟をしたばかりでなく、相手も殺す氣でなければ——こんな事は出来ない。

「われを理解せよ」とは一緒に死ねと云ふことぢやないか——最後に、

「それでも未だ解されて居ると信じて居る」と云ふのも。私はあの女の堅い意志に引摺られて、あの女を掴んだ同じ運命の手に捲込まれて行く。其外に道がない。

併し私からはそんな手紙を送る譯には行かぬ。私の意志はあの女に通ずる由もない。その夜、私は洋燈の赤い灯の下に、眼が痛ん

で薄い鉛筆の文字が見えなく成るまで、繰返し繰返し同じ手紙を讀んで居た。

五

次の朝、蒲団の上で目が覺めると、私は直に又あの女から來た手紙を思つた。七十日餘りの不快な日と夜とを飛越して、此朝が直に山の朝につづく様にも思つた。私は二たびあの女の傍へ戻つた。

併しそれ許し思ひ續けては足らなさも加はつた。あの女は私の前に打明けた、私一人の前に總てを發表したと云ひながら、其實何も云つてやしないではないか。此長い手紙も、畢竟議論が勝つて、具體的には何一つ打明けては居ないぢやないか。斯う自分と自分に云つて見たが、自分ながら返す辭がなかつた。

私は此手紙に對して返事を出したか出さぬか、能く記憶えて居らぬ。兎に角、中二日置いた六月十三日の日附で、又次の様な手紙を受取つた。

拜啓、私は到底みづから己を語り得るものではない。只黙して戰へばよいのだと、好く／＼解りました。貴方の洞察力

に信頼する。どうか解してだけは居て下さい。私は何も云ひ得ない。理解ある、赤千の様な、無邪氣な交はりがしたい。何處か一點相觸れた世界を持つて生きて見たい。

併し今日の様に接近することを得ずして、此土地に居ることは逆も堪へない。過敏な神経は益々激する外ない。益々嫌ひに成る。無邪氣に成ることが出来な

い。外國へ行くくと申しますのも、何

も外ではない。境遇を變へたつて自分

は自分である。只海上生活をして、そ

れからメヂテエション、チャーチに寄宿

して、靜に思索の生活をする。傍罪の

ない勞働をして、亂れた頭の整理をしよ

うと、其手紙だけしたのです。

で、少し御目にかゝつて御話いたしたい

事があるのですが——こんな事を私から

申出とれた譯ではないかも知れませんが、

若し貴方さへ御許し下さるなら、御

目にかゝりたい。無論私は母の許可を得

る様にいたします。否やの御返事だけで

も宜しいから頂きたい。私の母は貴方

が御想像の様に決して思つちや居ませ

ん。病氣も持病の胃癰癰で先頃少し悪

かつたのですが、最うよいのです。私

ら何つても可いのですが、貴方が出て

下されば何々うれしい。こんな事云

つて、貴方はお腹立に成るかも知れませ

んが、母は屹度許すと思ひます。未だ訊

ねては見まされけれど、貴方さへ御許し

下されば、私は何うでも出来る。

十三日

小島様 御許に

あの女の名

總て打明けたと云ふかと思へば、二度自ら語

ることは出来ないと思ふ。それが私の言葉につ

いて、如何にでも云つて居る様にも見える。併

しあの女の祕密が私の考へて居る様なもので有

つたら、幾度云はうとしても云ひ得ないのが當

然であらう。海上生活だとか、メヂテエショ

ン、チャーチだとか、そんなものが何處にある

やら、私は知らぬ。只、そんな架空に近いこと

でも、あの女には事柄らしい。あの女なら遣

りかねない様にも思はれる。そんなにして、あ

の女は一人何處へ行くのか、私はあの女と逢

はなければ成らぬ。

私は承諾の旨を書いて送つた。

その日、折返して返事が来た。

拜誦御手紙唯今拜見、勝手がましき御願

ひ御きゝ入れ下され、誠にありがたく候。

私は何日にても、在宅、貴方の御都合お

ろしき日に御出頂きたく、母も其様に申

し候。何も其折に申し残し候、かしこ。

私は二たび明後日の朝たづねるからと知ら

せて遣つた。

其前の日の夕ぐれ、私は何物かが待たれる様

な氣がして、部屋にも居たたまらず、寺の門前

を迂路々々した。赤く塗つた門の柱に凭れなが

ら、向側の鍛冶屋から火花が街の上へ飛んで來

るのを何時迄も眺めて居た。

いよいよ其日の朝と成つた。

私は胸車を備つて寺の門を出た。空は晴れや

かに霞んで、街の大通りには人出が多かつた。

ばつとした色の蝙蝠傘や、薄い一重に着替へた

女がぞろぞろとつゞいた。壁の厚いじめ／＼し

た部屋の中から出て來たので、私は儼に夏が來

たやうに思つた。

白山の裏手から生垣について曲ると、新緑の

匂ひが身の周りに迫つた。何日かの夜あの女に

ついて此邊迄来たこともあるので、辻の捨石、垣根の木の葉にも、去年の衣を取出して忘れ香を嗅ぐやうな思ひ出があつた。

最う直きだと思ふと、われながら動悸が高まつた。

あの女の苗字を標札に出した衡門の前で腕車を降りた時には、四邊に見て居る人でもある様に、私は遽て潜門を開けた。それと同時に奥の方で呼鈴が鳴つた。

「あゝ、何日かあの女から聞いた通りだ」と思ひながら、玄關に懸つた。

少時、玄關の前に立つて居ると、十五六の少女が出て来て疊に手をつかへた。それに名刺を渡すと、黙つて叩頭をして引込んだ。入れ代つて、恰度次の間に待つても居た様に、あの女が出て来た。あの汽車で別れた女が――

私は眼ばたきもせず、女の顔を見詰めた。女の私の顔を見守つた。

やがて其處へ手を突いて、

「何卒」と云つた。

此時、私は女が自分の内に居ながら、尙且袴を穿いて居るのに氣が附いた。何日も穿いて居るのか、それとも今日だけなのか。何だかそんな事にも意味を附けて、故と遣つて居られる

様な氣がして不快だつた。

女は私の帽子を受取つて帽子掛にかけた。それから又、「此方へ」と云つて、初めていつと笑つたが、「私の居間にして置きました。四圍の室には誰も居ませんけれども。」

「えゝ、何方でも。」

私は唯それだけ云つた。

女は口に當てた袂を離して、前に立つて廊下を案内した。二つ許り部屋の前を通り抜けて、一番奥の六疊二間があの女の居間であつた。

前の少女が座蒲團を直して、おづ／＼茶を侑めて置いて退いた。

あとは二人に成つた。二人に成つても、最初儀式張つた冷たい挨拶をしたのが邪魔に成つてどうも打解けられぬ様に思はれた。私は只女の顔を見詰めた。油氣のない髪の毛の短く切れたのも、連夜眠らぬやうな眼の色も、邪慳らしい唇も、それから頸筋に近い顎の黒子も――矢張あの長い手紙の主に違ひない。

何か云ひたいと思つても、會つたら斯う云はう彼様云はうと考へて居た事は、總て意味がな

い様に思はれた。私はだん／＼俯向いて仕舞つた。

「誰も居ませんから、何卒御遠慮なく仰有つて

下さい。」

女は立上つて私の側へ来た。

私は思はず其手を執つた。そして戀人が戀人を抱く様に、女の始終熱のあるやうな――

「貴方は思つた程瘠せて居ない。」

「貴方も。」

少時言葉はなかつた。

やがて二人の肩の離れた時、女は相手の顔を見上げるやうにして、「あとで内の母に會つて造つて下さいませんか。」

「えゝ、何時でもお目にかゝりませう」と、私は居坐ひを直さうとした。

「後で可い、可い。後に此處へ参りますから。」

私は初めて四邊の静かなのに氣が附いた。それと共に、此静かな家の何處かで娘のことを案

じながら、今日の成行を待つて居る人のあることを思はずには居られなかつた。父親にも内密で、世間の手前も憚りながら、かうして二人を逢はせて置く。それには我子を信用して居ると云ふこともあらう。が、左様迄せずには居られ

ない程、母親は娘を持餘したのだ。それ程迄に女は狂つたのだ。

「ねゝと、私は女の肩に手を掛けて起直らせ

た。「私は貴方が何んな人だと云ふことは、貴

方から云はれる迄もない、知つて居たつもりだ。またそれでなけりや、いかに私でもあんな事には成らぬ。今でも知つて居る積りです。併し貴方の口からとは何一つ聞いたことはない、何一つ打明けて貰つたこともない。今度の長い手紙だつて左様だ。あの長い文句の中に、私の聞きたいと思ふことは——肝心の事は何も書いてないぢやないか。」

私は斯う云つて相手の返辭を待つた。女には私の云ふ意味が解つたのか解らないのか、只黙つて見返した。

「ね、此上哲學を講ずることだけは、お互に止めましょう」と、眞正面に相手の顔を見ながら、「私は敢う哲學ぢや生きること死ぬことも出来ない。」

女は頻に點頭いた。

「ぢや、云つて下さい。貴方は如何云ふわけで家に居られないのか、家出をしなけりや成らぬのか、それが聞きたい。あの手紙にあるだけの事ぢや——あれ位の事なら、何も家出をするには及ばない、そんな事をして、両親に心配を掛ける必要はない。」

女は私を見る眼を反らせた。それが恰度、此男は尙且自分を解して呉れない、駄目だ——と

云ふ様にも取れる。又そんな事が——長い間、苦しい思ひをして隠して来た胸の奥の秘密が、云へと云はれたとて、自分の口から云へるものかと云ふ様にも取れる。私はもどかしく成つた、われを忘れて急ぎ込んで来た。

「如何しても家出をしなけりや成らぬと云ふ譯があるのか、如何しても生きては居られぬと云ふ——譯がある？」

「私だつて」と、女は顔を背向けるやうにして、相手の膝に凭れながら、「私だつて、生きられるものなら、如何してでも生きて居たい。」

「それなら何故——如何して」と、私は女の顔を覗き込むやうにした。女の顔は破るゝ許りに充血して、兩眼には一杯涙が溜つて居た。

「それが——それが如何しても云はれない？え、云へない？」

女は俯向いたまゝ點頭いた。私は惘然として腕を組んだ。

「ぢや訊かない。強ひて聞かうとはしません」と、良有つて云つた。「では、私が思つて居る通りに思つても可いんですね、私が信じて居る通りに信じて——」

女は二たび點頭いた。それで可い、私は貴方の行く所へ行く。」

斯う云ひながら、私は如何にも自分が憫れに見えた。こんなに進まなければ、此女に近づくことが出来ぬかと思ふと堪らない。「何も聞かずに、此儘随いて行く。左様するより外に、私の落着く所はない。」

女は私の肘に取鍵つた。

「来て下さい。私の行く所へ、屹度、屹度。」

私はそつと女の手を執つて懷中の拳銃を握らせた。女は堅くそれを握つたまゝ、疊の上に顔を伏せて居た。

やゝ有つて、「併し、私にとつては死ぬ資格は生ける資格と同じだ。死ぬ必要がなく成つてからでなきや、何うも死にともない。それには書きかけた『報復』だけは書いて置きたい。其間待つて呉れるでせうね。」

女は不意に顔を上げた。

「私の方でも、いよく家を出る迄には、矢張り準備も入りますから——」

二人は當もなく顔を見合せて坐つた。

部屋障子はわざと開放してあつた。斜に内庭を越して、應接間らしい洋館の窓が見渡された。此時、潤い芭蕉の葉の蔭に成つた窓の中に、ちと女の影が見えた。何でも抱かれた孩兒の足と、抱いた人の紅い腰帶の邊りらしい。

「あれは？」

「姉ですよ」と女は打棄る様に云つた。「あゝ子供なんぞ可厭だ、子供を生むなぞと云ふことは考へて見るだけでも堪らない。」

又机の前に坐つて、「夜晩く、此處に斯うして坐つて居ると、瓦斯の燃える音が大風の様にすよ。」

私は机の眞前に突出した桃色の瓦斯の花笠に氣が附いた。それから段々本立に眼を移して、其中にニイツエの『ツアラトストラ』の英譯があるのを見附けて、「あんなのを讀むのか」と訊いて見た。

「えゝ、他人から讀んで見よと勧められたので、一寸。」

「で、解つたのか。」

「矢張解らない所が多い。解つても碧嚴なぞ讀んで居る方が何の位面白いと知れない。」

「左様」と、私は黙つて仕舞つた。

少時左様して居たが、

「では、最う阿母様にお目にかゝりたいから——と云つた。

「えゝ」と、女は立上つた。

やがて母親といふ人に逢つた。時儀の挨拶をしてからも、此場のことに就ては何一つ言出ら

れない。只差觸りのないやうな事をぼつり／＼話して行く。いよ／＼其方へ話の糸口が向いても、「私どもには一向解りませんので」と、話を避けた。

それぢや、私にはそれよりも好く解つて居るのだらうか。自分ながら覺えない。

母親の去つた後で、「あゝして始終側に隨いて居られるのですから、それだけでも私には堪へられない」と、女が云つた。

午後三時近く、私は其家を辭した。門を出ると共に、急に物足らぬやうな、取返し附かぬやうな心持がした。折角あの女に逢つて、あれ

だけ話もして居ながら、何れだけ打解けたと云ふでもない。互に心はちぐはぐの儘思ひ／＼の

ことを言合つて別れたやうでもある。あの女もあんな話をすると、わざ／＼私を喚んだ譯で

もなからう。私は——私は只下手な役者のやうな身振をして居た。そして、あんな約束だけして仕舞つた。未だしもあの約束があるから、あの女と自分とを繋いで居るとは思ふ。左様は思ふものの、あんな約束が何の役に立たう。

私は易々と一大事の約束をした——如何にも安々と、私は一日中身振をして居たと云はれる、身振をして他人の魂を玩具にしたとも云

はれる。それで居ながら、あんな一日延ばしのことを云つた。死に行く者に、何處に書きかけたものを書上げて行く必要があらう。あゝ、私程當に成らぬ卑しい人間はない。

私は寺へ歸るや否や自分の部屋へ斯込んで、其儘壁の上に倒れた。倒れたまゝ、暫く起上らなかつた。

併し、私は私としても、あの女は何の爲にあんな約束をしたのだらう。一旦違つて見て失敗

つた、其同じ相手を相手として、何の爲にあの女が輕々しくあんな約束をしたものであらう。それも二人の心持がしつくり合つたと云ふの

なら可い、それなら聞えた話だが——いや、あの女は只道具として私を使ふのだらう。あの女はあの女一人の道を行く。其逆伴侶として、

私を連れて行く氣だらう。

あの女は心の中で何んな事を思つて居たか知らぬ。只、あの女の思ひ入つた顔色を見ると、私は萬事を抛つ、萬事を抛つてあの女に隨いて行く。私は自分で自分を當にすることが出来ぬ。只、あの女を信するが故に、自分自身をも

信することが出来る。

此言葉を想出した時、私は急に救はれたやうに思つた。縱令途中で私が崩折れたとて、あ

の女は行く所迄私を連れて行かすには止むまい。

私は直に筆を執つて長い手紙を書いた。今日あの女に對して居た時の不真面目な態度も、自分で責めて自分で白状した。其最後へ持つて行つて、

「私は惡魔かも知れぬ、併し惡魔はそれが繪に畫かれた程黒いものではない」と、沙翁の先驅者マアロウの一句を附加へた。

其手紙を入りに外へ出ようとしたが、何時の間にやら夜も更けたと見えて、庫裡は寢籠まつて居た。玄關脇の杉戸をがたびしさせながら、やつと庭へ降りた。小走りに街の角迄行つて、郵便函へ抛り込んだが、急に又それを取返したい様な心持をした。

私は人通りの絶えた坂道を一人とぼ／＼と戻つて來た。

こんな手紙を遣つたとて、如何成るものかと云ふ氣が頗に仕出した。こんな手紙を遣つて、今更糊塗しようとしても——私は女の前に自分を糊塗しようとして居る。幾許自分を責めて、寸毫も假借しないやうな風を裝つて見ても、矢張女の顔を糊塗しようとする下心がある。そんな事をした所で何に成らう。あの女に今日

の私の態度が解らぬ筈はない。私の心の中は見透されて居たに違ひない。

併し——と、又考へ直しても見た。それ程迄にして、私があの女に隨いて行く、あの女に離れまいとすると、私の特は、あの女も察して呉れなからうか。成程、私は第三者かも知れぬ。あの女はあの女自身のために死ぬので、私の爲に死んで呉れるのではない。それを知りながら、私は尙且あの女から離れられぬ、あの女を思ひ切ることが出来ぬ——私は是迄他人が自分の爲に死ぬものだと思つて居た。自分が他人の爲に死なうとは思ひも寄らなかつた。何んなローマンスに於ても自分が主人公に成れると思つた。

主人公として生れて來たと思つた。併し今度は如何考へて見ても自分が主人公ぢやない、シテぢやない、ワキだ、ツレに過ぎない。そして、これが二つない自分の一生のをはりなのか、かうして終る宿命であつたのか。

門のくゞりを押して這入ると、石燈が一條ほの白くつゞいて、正面には本堂の大黒根が眞黒に輝いて見えた。私は何ものにか脅かされた様にぞつとした。

こそ／＼と杉戸を閉めて、庫裡から本堂を脱けようとした。須彌壇の前には、宵の勤行に上

げた御燈明が一つ消え残つて、四邊に微かな光を投げた。しつとりと輦轎が垂れて、金色の蓮華の塵埃に埋れて黒ずんだのが目に附く。

第三者だと云つた、その同じ人が私のことを牡丹燈籠の中の男の様だとも云つたさうな。

「牡丹燈籠」は讀んだことがないから何んな男か知らぬ。只女に取殺されると云ふ意味かも知れない。あの女に取殺されると云ふのなら——私はそれだけで満足する、満足しなければ成らぬ。

やがて私は毎夜の様に一人で蒲團を敷いた。油煙に火屋の煙つた洋燈を吹消して、ごろりと其上に横に成つた。そしてまじ／＼としながらい長い一夜を明かした。

明くる日からは、只前に出した手紙の返事のみ待たれた。それが二日経つても三日経つても來ない。私は日に／＼不安な心持に襲はれて來た。終ひには、彼の一日で萬事が去つた様にも思つた。

やつと九日目に一封の手紙を受取つた。其消印が相州チケ崎とある。私は胸を蕩かせながら封を切つた。

拜啓、過日は抑して御出で下され、誠に

誠に有難く、御面會後は混沌の中に住んで、私より手紙を差上げる處ではなかつた。御許し下さいませ。翌日の御手紙は拜見しました。最う恐ろしくて仕方がなかつた。容易に誓つて下さる程、容易に私に従つて下さる程怖ろしくて成らない。讀み了つた後は恐怖心より外になり。それに續いて取留めもない猜疑心にも苦しんだ。それで今迄筆を執ることは止めて居たのです。

かうして居ると、暗い方へくと段々入つて行くやうだ。手を執つて居る人を見ると黒い。翻つて自分を見れば、なに自分が黒いのだ。悪魔は繪に畫かれた程黒くはないとも思へない。もつと黒いやうだ。飽迄も黒いが可い。世に處女程の悪魔がどこにあるか。それだから處女の符りを重んずるのです。聖なるもの程或意味に於て最も恐るべく惡なるものはないぢや有りませんか。恐れ、極度に恐れはない。平氣なものである。大膽なものである。沈着なものである。只懸命に眞面目に成つて仕舞つた。最う信じる、最う信じる、貴方を信じる。自分を

重んずる。貴方を重んずる。自分を犯さざる如く貴方をも犯さない。自分を可愛がるだけ貴方を可愛がる。自分を憎むだけ貴方を憎む。優待もする、虐待もする。何年逢はないでも、消息が絶えても、自分を信じる方のある間は同様に貴方を信じて居る。誓つた事は忘れない。あの誓ひのある間は、終りの日の希望を持つて、今日の日に生きて居る。私は貴方の前に私の内に隠れて居るものの總てを出す。狂せずしては居まい。私の此力でもつて貴方をも狂はせて仕舞ふ。貴方は氣違ひに成らなければ眞面目な人間には成れない、私と同じものには成れつこない。そして二人一緒に狂死をしようといふのです。情死ぢやない。狂死だ。狂死です。二人の男と女とが或ものの爲にだまされて居るやうな情死など、いやだ。知らずにだまされて居るのならそれで可いけれど、知つてだまされて居る譯には行かない。そんな難かしいことは出来ない。私は狂死でいふ。長く生きられようとは思はないけれど、生きられる迄生きて見る。狂死が免れぬ

必然の運命なら最う恐れはない。今迄これをして居たから、火を棄てて水につくと云つた。最う恐れはない。火につく、火の中へ行く。私がなにも貴方を道具にしようなぞと、そんな問題ではない、そんなお安いことではない。道具に使ふのならば、何も貴方を俟たずとも外に作らうと思へば人のないこともない。あれまで自分を打明けたい人、自分を解して下さつたと思ふ人、其人を自分以外の路傍の人とは如何しても思へない。離れることは逆も出来なく成つた。生きるにも死ぬるにも關係なしには逆も出来なく成つた。けれども如何したつて同じものには成れないぢやないの、如何したつて成れないぢやないの。私は貴方と同じものには如何したつて成れない。だから貴方は私と一緒に死ぬか、私だけでも殺して下さらねば成らぬ。私を殺して下さることが出来ないなら、最う仕方がない、貴方が私と同じ様なものに成つて下さる外はない。それには狂して下さいと願ふのです。貴方の意志を殺さなければ駄目だ。だから私の行く

所へ来て、私と一緒狂死して下さいと願つたのです。それより外私には道がない。御承知下さつたのですね、確です、信じて可いのですね。若しそんな事は出来ない、お前と同じ様なものなぞに成れるものかと仰有るなら、今の間に斷つていただきます。さすれば私にも他に考へがある。

それでは父の許しを得て、いよいよ出發の日が定まる迄は御無沙汰いたします。今度家を出るについては全然両親が安心する様にしたいと思ひますから、貴方からの御手紙もしばらく止めて頂きたい。併し此手紙が御手に落ちたか何うか氣に成りますから、此返事だけは、女子大學内水野前子の名にして、只安否を問ねる様なものを下さい。此手紙も家の中で書く自由がないので濱へ出て書いたのですから御察し下さいませ。一昨日から書きたいと思つて居たのですが、雨が降つて外へ出ることが出来なかつたため後れたのです。出發間際には最一度お目にかかりたい、逢つて下さいますか。今度は少し遠大な考へで計畫を立てたの

ですから、貴方も其氣に成つて下さい。私は非常に性急で、時々立つても坐つても居られない様に成るけれども、又それだけ一方では人一倍辛抱強い所もある。これは一方に、他人よりも弱味が有るから自然かう成つたものらしい。いづれ委しいことは御目にかゝつた上——其日迄貴方は私のことを忘れて居て下さい、そして御心の總てを御作の方へ使つて下さい。では暫く御無沙汰いたします。此地には七月下旬迄滞在。一度米國へ行くより外に仕方がない、それでなければ両親の心が安んじない。御機嫌よう。

六月二十四日

あの女の名拜

小島様 御許に
追伸、郵便局に親戚のものが居ますから表には法名を用ひました。

上書に惠黨とあつた、あれが老師から許されたと云ふ法號なのか。私は一寸不快に思つた。

尤も、此手紙の初めに、やれ處女が悪魔だとか、聖なるもの即て惡なるものだとか、恐れのか、聖に恐れはないとか、すべて反對と反對と、極度に恐れはないとか、すべて反對と反對と、

極端と極端とを結び合せたやうな、パラドックスめいた文句が数珠繋ぎに並べてあつたのを見て、あゝ云ふのが禪家の慣用手段だとは固より知る筈がない。只、私に最うあゝいふパラドックスを聞くのが煩く成つた。自分でもパラドックスに疲れた。此期に及んで理窟は云ひたくない。死ぬにしても理窟で死にたくない。少し許りの慰問さへしなかつたなら死ぬにも及ばぬやうな死方はしたくない。

あの女は何故いつまでも理窟を云つて居るのだらう。あの女を動かすものは理窟ぢやない、暗い事實である、怖ろしい運命である——それとも私の想像して居ることは單に私の想像に止まるのではないか、私は只自分の感情を誇大して居るに過ぎぬのではないか。若し左様だとしたら——そんな事は云ふにも忍びない。

私は、水に溺れて、助けを呼ばうにも聲が出ないやうな心持がした、手應へない水を引掻きながら泛み上らうと焦心つて居る様な心持がした。

併しあの女が私の前に内に隠れて居るものの總てを出さうと云ふのは、矢張り暗い事實を指したものでないか——他人より弱味を持つて居ると云ふのも、氣違ひに成らなければ自分と

同じものには成れないと云ふのも。それなればこそ狂ひ死にに死ぬのだ、私も共に狂はせずには置かぬと云ふのだ。私は赤道直下に近い加州の勞働者の中に交りながら、二人の男女が裸體の儘狂ひ廻るさまを想像して見た、狂ひに狂つた舉句一人つづけて行くさまを——

あの子の名 拜

何れにもせよ、あの女はあの女の云ふ通り長う生きられる身ぢやない。それにしても、私にだけは何故有る儘に打明けて呉れぬのだらう。私は最うあの女の眞實を知らなければ、如何することも出来ない。あの日、あの儘別れたのが、今に成つては残念で成らぬ。兎に角最一度逢ひたい。逢つて自分の思ふ通りを明らさまに云つて見たい、そしてあの女の頷く所が見たい。

左様した上で、若し私の思つた通りなら、最早兩親の前にも強ひて隠して居るにも及ぶまい。兩親といへども、それを聞いたなら、手を束ねて、あの女の自滅を傍觀する外はなからう。あの女の超人間とも云ふべき努力に免じて、切めてはあの女の心の儘に最期所を選ばしむる外はなからう。

あの女にしても、兩親の納得の上で、人目にかゝらぬ他所の國へ死に行く様に成れば、

心を置くこともあるまい。私も許されて其最期を見届けに行く。二人はかくして日本といふ國から消えるのだ。

私はこんな事迄想ひ遣つた。

直に筆を執つて返事を認めた。最初は極簡單に済ます積りであつたが、段々長く成つた。で、又それを破つて、今度はペン尖で蚊の様な小文字を綴つた。

折返して其返事が來た。

拜啓、御手紙は只今落手、直に拜見しました。私は迷もかうしては居られぬ所を、昨日今日と何うにか胡魔化して、かうして居るのでは有りませんか。何卒來て下さい。すつかり御話して御相談がしたい。私は手紙では如何しても書けぬ、書く時は何とか苦しまぎれの逃言葉に成つて仕舞ふ。來て下さい。此手紙は明日おそく御手許へ參ることです。それから、明後日の朝八時三十分名古屋行の列車で御出下されば、十時半には此處へ着、咄天ならば散歩にかこつて、私停車場迄お迎へに參り居り候。雨天ならば散歩にも一人行くことを許されませんか何

卒孝ヶ崎館——この貸別荘から三町餘のところ——へ御投宿下されたく、私は十一時頃其方へ參り居り候。何も其折にと申残し候。

二、七日十一時半

小島様 御許に

私は一議もなく明二十九日の朝、指定の汽車で立つことに極めた。それには旅費にも差向へたので、いろ／＼思案の末、古い洋服を一二着抱へて街へ出た。

やがて若干の金子を袂に入れて、夕飯時に寺へ戻つた。見ると、机の上は前と同じ型の封筒に入れて、同じ手で書いた手紙が載せてあつた。私は封を切る間も手が震へた。

先日來母は非常に心配して、少しも眼を離さず、私は考へることすら自由を得ず候。過日の御手紙と同時に水野よりも手紙參りしたため、母の疑ひを引き、同じ所より二通の手紙來るいはれなし、是非に見せよとのことに、止むなく見せ申候。最早母の前に公然と出來るだけのことを致すより外なく、兎も角も御出していた

き御話いたすこと、今の所許されさうにもなく、又言出された譯にもあらず、ほとほと困り果て候。あの御手紙に對して申上げたきことも、又承はりたきことも數々有之候へども、今は考へることも書くことも思ふに任せず候まゝしばらく御待ち頂きたく候。今と成りては、私も好い考へは出でず、兎に角貴方に御任せいたし置き候。尙少しく静思を得ば、私より何とか聞え上げべく候。勿々二十八日早朝

小島様 御許に

あの女の名

疊の上に手紙を擡げたまゝ、私は少時動かなくつた。明くる日は朝から雨滴の音がした。窓の障子越しに、古い墓場にそゞろ雨の音を聞いて居ると、小僧が持つて來た朝飯の膳にも箸をつける氣がなかつた。矢張行つた方が可い、行つて彼方の母親にも逢つた上、何も彼も打明けた方が可い——昨夜から度々心に泛んだことが又繰回された。いづれにしても、此儘にして捨て置かれるものではない。殊に私から遣つた手紙が原に成つたとすれ

ば、尙更自分で將を明けなければ成らぬ。

どうせ兩親の前に打明けるものだと思へば、却てそれが好都合だとも思はれた。

私は急に身支度をして立上つた。白洋袴の裾を裏返して、横繁吹雪のする雨の中に蝙蝠傘の柄をかたげながら、電車の停留場まで急いだ。

新橋へ着いた時は、九時に近く、八時三十分發といふのは間に合はなかつた。止むを得ず待合所の片隅に腰を下して見たが、心が苛々して靜手と坐つて居られさうにもなかつた。火を焚かぬ暖爐は殊更ひつそりとして、其上の棚に掛けた鉦の中に、時々浴衣を着て雨傘を持つた男の姿が映るのも一しほろそ寒い。

やつと汽車が出た。芝浦邊りからおひく雨も晴れて、品川を出外れると、兩側の水を含んだ草や木が目に立つた。あの日以来、汽車に乗つて市外へ出るのは今日が初めてだと思はれた。此儘この汽車に乗つてさへ居れば、自分の生れた國へ行くのだとも思はれた。久しく忘れて居た自分の故里へ——茅ヶ崎の停車場で汽車を降りた時には、何といふわけもなく心が咎められる様に思つた。

停車場を出て、前に建ち並んだ低い町家を見ると、われにもなく、初めての土地へ來たなと

いふやうな、一種の不安が湧く。十町餘り腕車に揺られて、丘と畑と松林の中を行くと、やがて海岸に近い平家建の旅館の門へ着いた。泊客の少い頃と見えて、私は直に海を見晴した奥の間へ案内された。座に着くと、茶を啜る間もなく、女中に吩咐けて硯箱を持つて來させた。

「此近所に木村別荘と云ふのがあるのかい」と訊いて見た。

「へえ、御座います。家から料理を入れて居るのやでしてな、何でもお歳を召したお方と若い娘はんとお女中二人切りで泊つておいでやさうな。」

「ふむ、其處へ手紙を持つて行つて貰ひたいのだが。」

「えゝ、謬有りみせん、風呂番の平どんを遣りますでな。一寸呼んで來まほうか。」

「あゝ、左様して貰ひたいね。」

私は其後で彼方の母親へ宛てて手紙を書かうとした。汽車の中でも又言を考へて來たが、差當つては只胸が躍つて、字體も文章も成さなかつた。

やつと書き終つて、それを平どんと云ふ爺に持たせて遣つたが、其結果が案じられて、使が

歸つて来る迄は立つても坐つても居られないやうな氣がした。母親が其手紙を受取つた時の驚きも、それから娘を喚びつけて組問するさまも、まさしく眼に見えた。

間もなく風呂番の爺が戻つて来て、「お手紙は確に受取りました。後から直に其方へ参りますからと、斯う云ふ御返事で御座いました」と傳へた。

「で、何かい、何んな人が挨拶に出て來たのか。」

「えゝと、何でも五十恰好の品の好え奥様でしたよ。」

「あゝ左様か、何うも御苦勞さま」と、其儘爺を歸らせた。

いよゝ此處へ母親に來て貰ふとして、倍何と言出したものであらう。私は只わくゝとした。何だか目も眩くやうな大事件に成りさうな氣もして、どうも自分の手には負へさうもない。

不圖、隣室に二三人の泊客があるやうな氣合がしたので、急に宿の女中を喚んだ。

「一寸内談があるのだからね、私の許へ御客があつたら、何處か隣の明いてる室へ通して貰ひたい。」

斯う云ひながら、私は何となく氣が差した。女中は興まつて退いた。

其後は只何としまして心を静めようと努めた。やがて又其女中が來て、「お出に成りました」と告げた。

私は直に別室に行つて面會した。母親と云ふ人は、毎例の通子容子のしとやかな、穩かな物の言振ではあるが、何處か他人に許さぬと云ふ風が見えた。そこへ氣が附くと、私は俄にしどろもどろに成つた。

「兎に角あの方が彼様迄して、親を捨てても亞米利加なぞへ行かうとなさるについては、矢張御両親にも云はれぬやうな譯があるかと思はれます。私は其譯を——」

私は其譯を知つて居ると云ひたかつた。併し私は本當に其譯を知つて居ようか。母親よりもあの女に接近して、あの女の眞實を知つて居ようか。いよゝ何を云つて居るのやら自分でも分らなく成つた。

「で、如何しても亞米利加三果進行かねば成らぬものなら、あの方も最う其譯を隠して被坐しやる場合ではない。私が聞いて居ることは私の口から申しても可いが、其前に最一度あの方に逢つて確と心持を問ねて見たい」と、そ

れでも言葉は前後しながら、一口につづけて云つた。

私の言葉が相手の人には如何取られたか、それは分らぬ。兎に角、思案の末、最一度二人を逢はせると云ふことだけ許された。私は明日の朝彼方の別荘へ訪ねて行く約束をして、玄關迄送つて出た。

一たび室へ引回しては見たが、直ぐ其足で上草履の儘裏門を抜けて、海苔の乾場の狭間から渚へ出た。渚には砂山がつどいた。私は雨に濡れた砂山の上に立つた儘、水と雲との境を眺めた。渚には白帆一つ見えぬ。私は破船をして大浪に此處へ打上げられたやうな、手頼ない心持がした。何を思つても居ない、何を考へても居ない、只一つ、今日分はあの女に接近して居る、あの女の身邊に近く來て居ると云ふ意識が、五月雨の空に光る一つ星の様に凝乎と私を見詰めて居るやうな氣がした。

宿へ戻ると、直に夕飯の膳を運んで來た。それと共にぱたぱたと雨戸を繰り始めた。室の中が急に蒸氣く成つた。

私は寝苦しい一夜を明かした。

明方近くうとうととしたやうな心持がして、急に眼を覺ました。頸筋から胸腹へかけてねち

やねちやと悪汗を掻いて、枕元の蚊帳がしつとりと垂れたのも、何となく忌々しい。私は思はず蒲團の上に起直つた。

不意に障子を開けて、女中が有明を下げて行かうとした。

「おい」と呼び留めて、「雨戸を開けて呉れないか。」

「へえ只今」と云つたまゝ、女中は縁側を駈けて行つた。

やがて彼方の端から雨戸を繰る音が聞えた。さつと一枚此室の前の戸を引いた時、日は案外高かつた。

あゝ、茅ヶ崎の夜が明けた。あの女に近く寝て居たのだ。

私は直に立上つて合敷をしに降りた。それから九時迄時計の針の進むのがもどかしかつた。強ち九時に行くとも約束はしなかつたが、餘り早くから出掛けるのも氣が置かれた。

やがて風呂番の爺を案内に伴れて宿を出た。門を出てから一町餘り、田圃道の三又に分れる所迄来ると、「此道左へ取ると直でがすよ」と、前に立つた爺が云つた。「あれ、彼處へ来るのが其お嬢さんでねえか。あの別荘に泊つて居るお嬢さんでがすよ。」

私ははつと思つて前方を見た。片方が松林の丘で、片方はちよろゝと蘆の生えた浅い沼に成つてゐる小徑を、俯向き勝ちに此方へ遣つて来るのは確かに其人らしい。何時になく袴を着けて居らぬので、最初は自分の眼を疑つたが、向うでも此方の二人が眼についたと見えて、急に佇立つた。

「餘りいらつしやらないから、私とお迎ひに上らうと思つたんです」と、女はちらと齒を出して笑つた。そして母親の顔を見遣つた。「えゝ」と云つたまゝ、私は手持無沙汰に控へた。

「あゝ左様だ。ぢや、最う可いから歸つてお呉れ。」

母親の顔色はどうも勝れなかつた。それでも努めて四方山の話をせられた。茅ヶ崎と云ふ所は松原と砂山ばかりで、これと云ふ取柄もな

斯う云つて、私は爺を歸らせた。それを見ると、女はくるりと向直つて引回した。私も其跡に跟着いて足早に駆け出したが、女は林の中途から枝折戸を開けて、「一寸振返つて見たまゝ、ずん／＼丘の上へ上つて行つた。

只海岸の空氣が好いとかで、大抵は病人の來る所だと云ふやうな話も出た。「で、其後御持病の方は」と、私は間の悪いたづね方をした。

そして私の眼にはきちんとお太鼓に結んだ絹の帯の空色だけが眸に彫りつけられた様に残つた。

「有難う御座います、比方へ参りましてからは、毎日鬱陶しいお天氣が続きました矢張り」と、如何にも大儀さうに見えた。

私はしみ／＼氣の毒に成つた。

「何分不自由な土地で御座いますして、それに連れて参つた女中も、先達て宅の都合で歸しましたから、尙更行届かぬ勝ちで」と云ひながら、茶盆を持つて次の間へ立たれた。

私は少時枝折戸の前に立つて居たが、誰も出て来る様子がなないので、思切つて其中へ這入つた。そして壊れ掛けた坂道をだん／＼上つて行つた。それを登り詰めると、一面に砂利を敷いた庭に成つて、貸別荘の縁側が一目に見えた。

そして、其儘少時出て來られなかつた。何と言出し様もないので、私はたゞ座敷の中を見廻した。夏場三四ヶ月の間、家族同伴の避暑の客を當てに建てた安普請のこととて、奥行もな

時儀の挨拶が済むと、

客を當てに建てた安普請のこととて、奥行もな

ければ、何一つ裝飾らしいものもない。只壁の柱に女持の銀時計を鎖のまゝ釣して、其下に四五冊の書物の散らばつたのが目につく。

私は二たび正面に女の顔を見た。女の顔は、今笑つた人とは思はれぬ程底暗く、しかも傲慢に見えた。其眼の色が人を脅かすやうな。

「大變顔色が悪い」と、良あつて私が云つた。

「左様」と、兩手で頬を抑へるやうにしたが、「昨夜些とも眠らなかつたものだから。」

私は只女の顔を見詰めた。

「一晩中同じ様な事ばかり云つて居るのですもの。そりや最う堪らない。」

私は思はず次の間を見遣つた。明け放した襖の間から、長火鉢の前で何か捜し物でもして居るらしい母親の姿がちらと見えた。

「だつて、阿母様の身に成つたら——」

「ですから、此處へ来て靜手と母の介抱をして居るんです」と、女は聲を小さくして押被せる様に云つた。「併しそれも僞善です。私は最う僞善でなしに母の介抱さへ出来なくなつた。側で私の爲に氣を揉んで呉れる人の苦痛を此上長びかすのは堪へられない。貴方も左様思つて下さいませうでせう。」

「そんな事を、貴方は」と云つたが、私は次ぐ

べき言葉もなかつた。

やゝ有つて又言葉を續いだ。

「では、貴方は如何しても亞米利加へ行く人なんでしょうね——今度の様な事がなくとも。」

「私は最う堪へられない。斯うして靜手と話をして居るのも辛い。」

斯う云ふ女の聲は暖れて居た。

「私は最う聲も出なく成つた——此處へ来てからは、夜も殆ど眠つたことがない。如何しても眠れなく成つた。物を喰べることも厭に成つた。膳に向つて食物を見るのも堪へられない。」

「貴方は、そ、それで如何する積りだ。」

「如何も成らぬ。如何かして下さい。」

女の手は鐵の熊手の様に硬と洋袴の膝を掴んだ。

次の間の母親は外へも出たのが、其邊に見えなかつた。

私は靜に其手を執つて側へ除けた。

「今度來たのは」と言出したが、其聲は自分ながら變つて居た。「今度此處へ來たのは、先達で逢つた時に言殘したことを言ひに來たのです。」

女はすつくと顔を上げた。濡みを持つた其眼

は底光りがして、髪の毛の根元まで充血した顔の色が、恰度燭臺の上に燃える蠟燭の火の様に

思はれた——今にも燃え盡きて仕舞ひさうな。私は思はず眼を反した。

「あの時は、如何しても口へ出なかつたが、今日は思切つて云つて見る。それを訊かずに、何うも辛抱が出来さうにもない。」

「何卒仰有つて下さい、何でも構ひませんから——私も一思ひに云つて下さつた方が可い。」

「何んな事でも。」

私はそれ限り黙つて仕舞つた。

女も凝手と見返して居たが、其儘身體をずらして、相手の兩腕の間に顔を埋めた。それが如何にも狂人の殘酷な心から、男を誘惑して同じ道に引込まねば置かぬ、一緒に狂ひ死にさせねば置かぬと云ふ様に見えた。

私は上からそれを見下したまゝ、「只一つこれが聞きたい、これを聞かぬ間は——」と云ひかけて、又口を噤んだ。

女は目の當り落ちて來る打撃を待つやうに、靜手として動かなくなつた。

「貴方の口からこれを聞きたいと思つたのは、何も昨日今日のこちやない。貴方と云ふ人を知つた初めから——貴方は最初から自分ではアノーマルな女だとは云つて居た、女ぢやないと云つた。併し其精神生活の異常といふのは

両親にも友達にも云へぬやうな性質のものか。
如何しても家族とも朋友とも離れて行かねば成らぬやうな——」

女は聲と私の腕を掴んだ。

「そして私一人にそれを明かして呉れたのか
いや、最少し判然云つて下さい。貴方

は自分でマニヤックだと云ふのか、あのエロト
マニヤックだと——ね色情狂だと云ふのか。」

何とも名狀の出来ぬ、抑殺したやうな聲が聞
えた。それと共に、夏の薄い洋袴を通して、ぼた
ぼたと煮えるやうな涙の膝に滲むを覺えた。

私は斧を振上げて人殺しをした様な心持が
した。これから如何成るかと云ふ考へもない。

只癡癡の様に波打つ女の胴體を眺めて居た。

「私はこれが云ひたかつたのだ」と、良少時し
て口を開いた。「それぢや、貴方はそんな事を何

時から知つた。何時から自分でそんな徴候が
分つたのです。」

「小さい時から、未だほんの子供の時分から
其時分から進つて居た。」

「そんな時分から今日迄——誰にも云はずに隠
し通して來たのですね。」

女は黙つて點頭いた。

私は目の當り受苦しつゝある魂の崇嚴を見

るやうに思つた。あゝ女は勞れたのだ、自己の
マニヤと闘ふのに勞れたのだ。

不圖、茶の間の方で人の氣合がした。二人は
つと離れた。

「母が歸つたのです」と、女は涙に膨れた顔に
寂しい笑ひを泛べて云つた。

そして、急に立上つて、私の側へ來た。其處な
ら、次の間からは合の襖に隠れて見えな

私は頬に鬢の毛の觸れるのを覺えた。
五月雨の空は底照りがして、空氣は息の塞る

程蒸暑い。
折柄、宿の若者らしい半纏を着た男が、黒塗

の箱を下げて坂を登つて來た。それが勝手口の
方へ廻ると、間もなく、母親は自分で膝を座敷

へ運ばれた。女も立つてそれを各自の前に直し
た。

「何も御座いませませんが、私共も一緒に御招待
いたしますから。」

斯う言つて、母親は座に着いたが、「何うも此
處はひどい所で御座いまして、海邊と申しまし

ても、お肴が不自由で」と寂しい笑ひ方をした。
「大分鯉が好く漁れる様で御座いますね」と、

私も箸を執りながら云つた。
「はあ、最う毎日々々鯉ばかりで。」

「道理で、昨宵も鯉を食べさせられましたが。」
「左様でせう。」

三人は顔を見合せて笑つた。
併し其笑ひは直に後から消えた。大風の吹い

た跡の様に、如何しても座が白けて見えた。
食事が済んだ後も、言葉の纏積がなさに、斯

んなことを云つた。
「何時か彼の宿には、國木田獨歩が死んだ後で、

大勢自然派の文士が集つたと云ふぢや有りませ
んか。」

「如何ですか」と云つたが、女は何か想ひ出し
た様に、「貴方伊野さんと云ふ方御存じぢやな

い？」
「伊野とは？」

「あの、半圓主義とやらの」と云つて、母親の方
を振回つた。

「いえ、知りません。貴方こそ能く御存じです
ね。」

「えゝ、あの人が此家へ來ましたから」と、少時
黙つて居たが、「好く一人で何でも仰有る方ね。

大變酔つていらして、此縁側へ脚掛けたまゝ長
い間しやべつてお歸りなさいましたよ。」

私は此女から斯んな話を聞くのが不快だつ
た。

「で、向うぢや貴女方だと云ふことを知つて居たのですか。」

「いえ、そんな事は有りませんまい。」

母親も側で聞いて居たが、此時そつと座を立たれた。

私は急に直つた。

「ね、私は今二人の間でした話を阿母様に云ふかも知れないから、貴方も左様思つて居て下さい。」

女の顔の筋は見る／＼堅く成つた。

「兎に角、最一度宿で阿母様にお目に掛つた上、私は直に東京へ歸らうと思ひますから。」

女は俯向いたまゝ點頭いた。

「それが旨く行けば、何の故障もなく亞米利加へ行くことが出来る様な話に成るかも知れない。併し——」

私は相手の手を握つた。

「最うこれで何日逢はれるやら分らぬ。縱令如何成つても、貴方は貴方の計畫通りにどん／＼遣つて下さい。私も自分の書きかけた物だけは書く。そして貴方の行く所へ行く準備をするから。」

女も堅く握り回した。

私は何時迄も立ちともないやうな、又急ぎ立

てられる心持で、別荘を辭した。

いよいよ別れを告げて、女に背を向けた時に急に世の中が暗く成つた様に思つた。宿へ歸つてからも、只掴まへ所のないやうな氣持がついた。

一時間許り待つたが、如何したのか母親の姿が見えぬ。私は又それが氣に成つた。終ひには立つても坐しても居られない様な氣がして、上草履の儘庭へ下りた。

海の水は油の様に黒ずんで、雲の切れ目から射す日光に、折々海面が照つたり陰つたりする。

見ると、渚に人だかりがしてゐる。遠目だから能くは分らぬが、七八人の漁師らしいのが寄つてたかつて啾々騒いで居るらしい。砂山の背後から走つて來る子供もあつた。私は不圖、水死人だなど云ふ様な氣がした。で、何氣なく裏木戸を開けて、段々其方へ近づいた。近づいて見ると、漁師が網を乾して居るのだと分つた。私が側を通つても、振向きもせず、こつ／＼と網を乾して居る。

私は其處から外れて、砂の上へ引上げた小舟の舷に腰を掛けた。海の向うの國が思はれる。外に國がないか何ぞの様に、何故選りに選つて

亞米利加へは行くのだらう。あの女が一時寄宿する筈だといふ、桑港とやらの禪宗の布教所と云ふのも、何となく殺風景に聞える。併し私は只あの女の亡骸を送つて行くのだ、生きた亡骸を送つて行く——それと聞いたなら、両親も其亡骸だけなりとも私に呉れなからうか。

不圖、私の名を呼ばれたやうな氣がして振向つた。宿の女中が縁側に立つて手を振つて居るのが見える。私は直に立上つた。

室へ歸ると、彼女の母親が待つて居られた。私は其前に坐つて一大事を言出さうとした、思ひ切つて云はうとした。併し如何しても口へ出ない。現在生みの親を前に置いて、そんな事が云へるものかと思つた。が、それよりも私には、現實の光の下に、そんな傳奇小説めいた事を言出すのがどうも堪へられなかつた。縱令言出しても物笑ひに過ぎない様に思はれた。で、たうとう何も言出さずに、其場だけをつくらつて別れた。

玄關へ送り出して、一人引出した時私は自分でもあの女のマニヤを信じて居ないのぢやないかと思つた。左様いふマニヤが有り得ようか、矢張自分の想像で誇大して居るのぢやなからうか。あの女にしても——あの怖ろしい多感性が

自制を困難にして、感情の暴ぶが儘に任せた時は、自分ながら不安の念に堪へないこともあらう。それが爲に苦悶が内部に湧いて、烈しい倫理上の葛藤に對する不健全な渴望から、自分を動物性に墮落したものと想像して快しむ——そんな事がないとも云はれない。若し左様だとしたら——それだけの事だとして——併し——と、良有つて又考へた。併しあの女の狂氣を私から醒ますことが出来ないとするれば、事實でも想像でも、何方にしても同じことである。いづれにせよ、女はヒステリカルで、男はアブノーマルだ。救はるべき所は少しもない。

私は手を敲いて女中を喚んだ。
「停車場迄腕車を一臺、直に。」
「あの一寸暇がかりりますが、矢張停車場迄喚びに遣りますので。」
「左様か、ぢや歩いて行かう。」
私は直に身支度をして立上つた。沼津發の上りに乗込んだ時は、やうく日も黄昏れて、雨の粒がはたと窓の硝子を打つた。列車の中には一人も相乗の客がない。私はごろりと横に成つた。何だか自分で自分の檻を送つて行くやうな心持もした。

六

山から戻つた當座の持合せも盡きて、私はおひおひ浮世の金子につまる身と成つた。他に工面の出来る當事も無い。折ふし故郷の家に賣れ残つた山林のことも想出しては見たが、今にも如何成るやら分らぬ私の身で、それ許りの物にも手を着ける氣には流石に成れぬ。私はやうく現實と云ふものから包圍せられる苦しさをおぼえて來た。

其中にも、あの女からの手紙はつゞく。七月八日付の手紙には、

あの日以来、母親は中々安心どころか、思ひも奇らぬ臆測をめぐらして、あの儘にては逆も始末に成らず、私渡米の儀につきても非常に苦悶がり、一方ならぬ心配をしはじめ候次第、まして父などに我々の意中を明かしなすれば、何んな事に成るやも知れず、益々實行の上に困難を來すことと存候云々。

あゝ、矢張私は世間見ずであつた。如何したつて、普通の人は私達の思ふ様になぞ考へて呉れるものでない。手を動かせば動かすだけ、餘計に縛しめの繩が緊つて行くばかりである。

私は手紙を持つたまゝ、身内がわななく様に思つた。

次の日、又一通の手紙を受取つた。性急な走り書きに、

昨夜はまた三時間餘りも母に口説かれまして。最う家に居るのも、家の者の世話に成るのも、日増しにいやに成るばかりです。母は暇さへあれば私の部屋に來て居ます。

昨日差出した手紙に、あまり家の者が心配するやうなら、彼地に在る間貴方とは書信の往復もしなくても可い、場合によつては申して仕舞ふ様に書きました。そんな事は出来さうもない。あれは腹立まぎれに親を欺くことに成る。あれだけは取消します云々。

其後、音信はふつと絶えた。

又それが心に掛つた。一旦ケ時を引上げて、自宅へ戻つたとは知らせて來たが、今も未だ東京に居るやら如何やら分らぬ。私はあの女を思ふ時、天地地角、只々を擲むやうな張合のない心持がした。此世の女を思ふとも思へない。

兎に角、私は書きかけた物を書かうと努めた。

只、此一つだけ書く。此世に自分が生れて来た記念として、これ一つだけは残して置く。此小説の世に出る頃、少くとも、私は此國には居なからう。小説ぢやない、遺書である。二人のために遺書を書く。

左様思ふ中から、何うもそんな事には成らぬやうな氣がした。私の意志に反して、頗にそんな氣がする。何にもせよ、これさへ書上げたなら、私は直様あの女の許へ走つて、あの女に合するのだ、それ迄だ、それ迄だと思ひながら、如何いふものか筆が進まぬ。殆ど一字も書けぬ。

それには金錢上の煩ひも有つた。

其月の末、私は故郷の母から絶えて久しい手紙を受取つた。そして、其中に三百圓の爲替が封じてあつた。手紙の文言に依ると、お前の方へは駄つて居たが、去年の暮、山林はたうとう人手に渡した、其金子で始めたことも、案の定、失敗にはつた、お前には重々濟まぬと思ひながら是迄隠して来た、それは呉れくも勘辨して貰ひたい、いろ／＼骨折つて、此頃やつと半分足らず取戻した、其中二百圓は、度々せつされるので、隅江の兩親に渡した、後金だけ其方へ送るから如何でも好い様にして貰ひたい。折角身體を厭つて呉れよとあるばかりで、其外の

事は何一つ書いてない。

私はほつと肝胸をついた。あれ許りの山林さへ無くしたら、これから母親の老後を送る道はない。此手紙の字體にも文言にも、どこか年寄染みた所があるのを見て、老先が思ひ遣られる。親一人子一人の間で、何んな親にして、私の外に前途を見て進るものが何處にあらうぞ。

隅江のことは只考へないことに極めた。固より私がない後の母親の身が託されよう筈もない。

私は切めてそれだけの金子でも其儘送り返さうかとも思つた。左様思ひながら、矢張それにして手附けた。

八月と九月とは白紙の儘過ぎた。十月に入つて、初めてあの女を消息を聞く。神戸の許へ淺間山の麓から出したもので、私と二人の名宛にしてあつた。私は今其手紙を持たぬ。それに對して、何んな事を云つて遣つたものか、それも記憶えて居らぬ。只此處に其返辭がある。

拜啓、御手紙は確に落手いたし候。心苦しさは堪へず候。たとひ何んな物を書くとも、二たびポストに投げ込むやうな

失禮は必ず／＼にすまじく候。何卒御許したいといたく、只々後悔の外無之候。今日迎へられて此處に歸り候ため、御返事おくれたるに候。あしからず、右のみ、かしこ。

十月十九日夕

あの女の名

此處とは信州の松本である。同じく二十四日の日附で、

拜啓、御手紙は只今拜見いたしました。私の意志は決して變りません、茅ヶ崎以來變らない。けれども四日淺間の麓から送上げた手紙はあれは貴方に宛てました。過日來後附して居る通り、咄嗟に妙な氣持に成つて、最う駄目かと思つて、あんな事を書いて仕舞つたのです。間接に心變りを止めかすのなんのと、そんな思慮分別どころか、最う切迫して來た様な氣持が頻に仕出したので、精一お餘裕を附けて、あれだけの手紙を書けたのです。全く滅茶々々な事を申したと、後で後悔いたしました。自分の意志が變つたか何うかと云ふことは、今日迄改めて反省し

たことさへない。

只許して頂きたいのは、決して意思が變つたのではないけれど、時々あんなに成つて仕様がなない。私の目下の境遇と云へば、漸く家の者の眼を離されたと云ふ迄で、其日々々の生き易い道をたづねては今日を終るに止まつて、少しも事が遅んでは行かないのです。丸で見込がないのです。今の状態を幾許辛抱して見た所で、何日に成つたらと考へると最う堪へられなく成つて仕舞ふ。其瞬間の自制を仕かなくてついあんな事も書いたり、又は彼方此方と居所を變へて見るのです。時々出来ませぬ歌などを拵へて見ようと思つて折るのですから、あれは許して下さい。

意思が變つたのぢや決してないのです、此處まで。

これで見ると、私は成々あの女の意思が如何の斯うのと云つて違つたものらしい。自分で自分が不安に思はれる所から、却てそんな事を女に向つて云つたのであらう。

次に一箇月置いて、十一月二十二日の日附の

もの。

御手紙は拜見。私は安心して居る。未だ辛抱も出来るから落着いて書上げて、總て準備をして下さい。夢も最う何でもなない。一時の現象だつた。實は家であまり久しく榨木に掛けられて、息も吐けないやうな、壓服された氣持で居たのが、やつと出られたので、俄にそこいらの辛張棒が緩んで方々妙に成つて来て、始末に成らなく成つたのでせう。けれども今はすつかり取戻した。此家に來てからは落着いて居ます。只最う歩くことは餘り出来なく成つた。肩が腫つて来て、苦しめて、毎日家に許り引籠つて居る。半日座禪をすれば、後半日の力は出て来る。座禪をするだけの體力のある間は、屹度辛抱が出来ると思ひました。讀書位では容易に心が聚らない。それから未だ何でもしなければ成らぬ、片附けなければ成らぬことも残つてゐる。それもする覺悟はして居る。

私、斯う云ふ状態です。未だ辛抱が出来ると信じて居る、又せねば成らぬ

と思ひ定めて居ます。云々。

追かけて、二十五日出の手紙には、更に思ひ詰めた様に、たい、

近頃私は大變弱く成つて見たことに氣が附いた。昨夜から最うちゃんとして仕舞ひました。屹度境遇を切開いて出来る様にするのですから、動搖しないで居て下さい。當分此家を出ないことにしました。

とあつた。

かうして、私はあの女から來る手紙の中に生きて居た。其外に云ふべきことも書くべきこともない。小説は只反古が殖えて行くばかりで焦躁れば焦躁の程、いよく抄取らぬ。つゝまやかにはして居たが、貯への金子も盡きた。それを見かねてであらう、或人の手で私の小説は柙下の或新聞へ掲載されることに成つた。其豫告も出た。

あの女の手紙も最早残り少なくなつた。此處に日附の分らぬものが一通ある。

此處はポストのない山の中の田舎ですから、郵便も遅くなりす。

『煙』の豫告が出て、それ位迄運んだと承はるのは嬉しい。けれども大凡何日頃迄に書終る御豫定か、切めてそれだけでも聞かせて置いて下さい。安心はして待つて居るものの、何だか富度のない様な氣持がして成らぬ。かうして待つて待つて、生きてさへ居れば、或日が來ると貴方が來て下さると云ふだけでは、時々心細く成つて仕舞ふ。それに私は此頃いけなく成つた。餘程氣を附けては居るけれども、本當の自分とは關係のない出來心がふい／＼と起つて、何方が何うだか譯が分らなく成つて、つい捲込れて仕舞ひさうな氣がして成らぬ。理由はなけれども矢鱈に激昂しちまつて、何か書かずに居られなく成るので、頭を過ることを何でも其時々書いて仕舞つては、後で大間違ひをして居るのではないかと心配にも成るし、又先達て神戸先生と貴方とに宛てた手紙と歌との様なことを考へると冷汗が出るし、幸ひ大概忘れて仕舞つたけれども、實は何をして居たら可いか分らない。悲しくて／＼一晩も泣き通して、仰向け

に寝るから涙が襟の方を流れて冷たく成つて仕舞ふ程なのに、何が悲しいのだから取留めもないし、時々可笑しく成つて來て、一人で煙を出して笑ふのは見つともないと思つても、如何しても只可笑しく成るので、いよく氣が違つたのかと思ふけれども、なに、宿の人が來れば上手に話も出来るし、母や姉から手紙が來れば、ちゃんと母や姉に對するやうな返事を出すことも出来るから、未だ／＼確かだと思つて居る。

大抵何ぞ彼ぞ考へては居るけれども別段自分のことなぞ思つて居るのでもなければ、他人の事や東京の事なんか考へたことは無論ない。只時々家のことや貴方のことや何か思ひ出して、母のことも、父にウィルヘルム、テルの話を聞いた餘程昔のことを如何にしたのか想ひ出して悲しく成つたけれども、他人事の様な氣がして涙が出る。洋燈の灯をうつと視て居ると、自宅にある私の部屋の赤いホヤの瓦斯がコォ／＼云つて燃えて居るのを思ひ出して、一度歸つて見たく成つたけれども、あんな物は如何でも可いと思つちま

つた。築土裏の寺とやらへも一度行かうかと思つて、飯田町迄の切符を買つたけれど、汽車が來てから、そんな事をしても仕方がないと思つて、レールの中へ捨てて歸つて來て仕舞つた。

それから私の仕事、仕事と云つたから何事かと思つて頂いたのでせうが、ほんの氣まぐれに過ぎない。只私の姉に残して行くものを書いて居るので、それも別に深く考へて書いて居るのではない。三十粒許り夢話の様なものを書いて見ましたが、手が震へて、字が餘り亂れて居るので、書直しをします。生きて居る間は、斯う云ふことでも違つて居ないと、他人に向つて飛んだ間違ひをするから、最う恐ろしくつて／＼。今度と云ふ今度は少意ばかりして仕舞つた。其時々氣分に任せて亂暴な手紙をつい出して、最う後悔ばかりしたし、後で端書で取消を出すやら、近頃は不當に馬鹿なことばかり繰回したので、最う恐ろしいから手紙を書くことはふつり止めしました。其中で姉にだけ上げる氣になつたのは、姉は誠に／＼センチメンタルな優しい人

で、私の所へ附近に手紙を呉れる、書物を何度となく送つて呉れる、何か書いたら見せて呉れる」と云ふのです。私は如何したら可いかわからない。それで姉の所へ送らうと思つちまつた。私は残念だが何を云ふか少し疑はしいから許して下さい。

小島様 御許に

あの女の名

これを読んだ時、私はまぎ／＼とあの女の裏へたさまを眼に見る様に思つた。最う躊躇して居る所ではない。即座に握つた筆を捨てて、あの女の許へ走らうかと思つた。左様思ふ下から、切めて此作だけでも、又思ひ返す氣にも成つた。

私は返事の代りに、イブセンの『ヘッダ、ガブラア』を一冊送つた。別に如何云ふつもりもないが、女主人公ヘッダの性格と、其猛烈な復讐の念から男が畢生の力を盡めた草稿を火中する所とが、多少思ひ當る節もあつたので、折返して端書が来た。

不思議なればこれだけの事を云はせて

頂く——今後は重要な事がなければ、其日の来る迄さし送へますが——『ヘッダ、ガブラア』は昨夜讀み終へた處です。『海よりの夫人』と二つ讀みました。

惠燕 拜

それが何故不思議だらう。何だかあの女にも似氣ない様な心持がした。それを其儘通して置くのは、如何やら二人が命懸けで仕ようとして居ることを二にび飯事にして仕舞ひさうな不安な心持もしたが、矢張り其儘にして置いた。次の日、私は又一通の手紙を受取つた。小形の汚げな状袋で、それを破つて二行讀むと、思はず顔色が變つた。

私は非人情で申します。私の意思は全然變りました。自分のことは自分で處理いたします。尤も死ぬのでもなければ狂するでもない。人と關係ある位置に身を置くことは、私には最う堪へられない。

信州の土地は去ります。死ぬのではないと云ふことだけ御承知を願ひます。其

他總て私に關することは放棄して頂きます。

以上、確かな心で斷言します。

十二月九日

あの女の名 拜

小島様 御許に

私は手紙を其處へ抛り出したまゝ、二たび取上げて見ようとせず、凝手と障子の棧を見詰めて居た。其間にだん／＼心も落着いた。

昨日あんな葉書を寄越して、今日こんな手紙を呉れる。あの女の癖だ。あの女からこんな日に逢つたのも、今度が初めてと云ふ譯ぢやない。私は最初からこんな手紙を待設けて居た様にも思つた。併し今度のは是迄とは違ふ。これ迄は皆他人の前でしたのだ。他人の爲にしたとも云へる。今度は二人切りの間である。誰も知らぬ二人の間で、私はたうとうあの女から投出されたのだ。最早取附く島もない。

思へば、長い間であつた。私はあの女——あの女と云ふよりは、自分があゝの女の爲に抛つた過去に對する未だから、如何してもあの女から離れまいとした。あの女と離れたが最後、私の手には何ものも残らぬ。それが幸に、何んな凌辱にも堪へて来た。昨日と今日と定まらぬ

あの女の出来心に操られながら、矢張りあの女にいつ着いて居た。最後迄いつ着いて行かうとした——身命を賭しても。

流石に、私は勞れた。此上また立上るだけの力もない。最う如何成つても構はぬ。此儘かうして置いて貰ひたい——ぐざと短刀で胸を貫かれた手負が、次第にのた打ち廻る力も失せて、生臭い血汐の中に平臥したまゝ、静手として動かないやうに、只かうして置いて貰ひたい、此儘動かさずに置いて貰ひたい。

あの女は如何成ることであらう。固より自分の責任など眼中に置く女ではない。心變りの動機もたづねるには及ばぬ。あの女の身に成れば、何日迄ぐずぐずして雲を掴むやうな男の来る日が待つて居られようぞ。斯う成るのが當然かも知れぬ。それにしても、あの女は信州を去つて何處へ行くのか。手紙には、くれぐれも死ぬのではないとある。死ぬのでもなく、狂するのでもなく、人間と關係を斷つと云へば、豫々あの女の云つて居た通り、何處かの僧院へでも這入るのであらう。山奥の僧院の中に、尼僧の淨い生活を營んで、目の前に迫つた終の日を待つとすれば、あの女に取つて是程殊勝なことがあらうか。いかに私でもそれを邪魔するこ

とは出来ぬ。

只、私は如何成ることぞ。あの女は去つた。行先も分らぬ。縱令分つたとしても、僧院の塀は高くして安りに入ることを許さぬ。石垣にでも頭を打附けて血反吐を吐く外はなからう。

私はそれでも私の前を動かかなかつた。良ともすれば戸外へ飛出して、足の向いた方へ行つて仕舞ひたい様な氣がするのを、呪と慄へて動くまいとした。これが一年前なら、私は直様飛出して、街の中を若い顔して彷彿たものだ。うろうろと河庄の店から突出された治兵衛の様に、世の中を呪ふやうな眼附をして——併し今日はそれ所ぢやない、そんな眞似をして濟まされる譯のものぢやない。一生の一日の様に思はれる、切めて今日一日だけでも一人で居たい。一人でしみる、此寂しさを味つて見たい。一夜が来た。小僧が来て、ガラ／＼と本堂のぐりりの戸を締つた。其音が一しきり續く。後は又一時に森とした。

來た。それから柳原河岸を眞直に兩國の橋を渡つた。不圖、何處迄も眞直に行つて見る氣になつた。只眞直に——市川から行徳の向うまでも。眞直に傍眼も振らず歩いて行くと云ふことが、今の心持に添ふ様にも思はれた。幾つも橋を渡つた、大きなのも小さいの。田舎道へ出た。又橋を渡つた。だん／＼夜も深けて来るらしく、終ひに大きな川の縁へ出た。川に添つて、一重並低い町家が續く。一軒あやしげな商人宿で、未だ大戸を下さずにあるのを見附けて、つと軒をくぐつた。

十五六の個体の小女が出て来て、襦袢掛けの儘飯の給仕をした。床へ入つてから、一時を打つても、階下では賑やかな話聲が止まなかつた。

明くる朝、裏の河は江戸川だと分つた。鴻の臺の森も見えた。

何處を如何歩いて來たのか、其日の夕暮れ、私は千住の大橋を北から南へ渡らうとした。遠い旅路の果に、やう／＼此處迄通り着いた様な氣がして、ぐつたりと橋の欄干に凭れた。見ると、私よりも前に同じ欄干に倚つかゝつて、凝眸と水の面に見入つて居る若い男がある。退潮と見えて、芥の浮いたどろ／＼した水が、橋代に

突當つては渦を捲きながら、ずん／＼下へ流れ
て行く、絶間なく流れて行く。私もそれに心を
取られた。時々背後を通る荷車にゆら／＼と櫓
が搖れるので驚かされながら、矢張水の流れに
心を取られて居た。

朝から曇つた空が時雨れて、何時の間にやら
毛の様な雨が降出した。

私は思はず頭を上げた。前の男は矢張水の
面に見入つて居た。布衣一枚に小倉の角帯をし
めて、髪が生びた工合が、何うやら職業に離れ
て行場がないとでも云ひさうな。

私は其男のことが心に掛りながら、二足三
足引回した。二たび大都會の中へ押分けて還入
つて行くのかと思へば、何うも足が進まぬ。寧ろ
そ此水について下らうかと思つた。鍾ヶ淵から
向島の堤を抜けて、本所横網の河岸へ着しかゝ
つた頃は、雨は小止みもなくしと／＼と降り出
した。

其夜一時頃、一日中雨にしよほ濡れた小島の
様な、みすばらしい風をして、私は寺の門へ駈込
んだ。

「何誰、何誰」と云ふ聲が奥でしたが、やがて
梵妻が袈卷のまゝ洋燈を持つて出て来て、玄關
の戸を開けて哭れた。

「まア、大變、如何なすつたんで御座います。」

「え、何うも、晩く成つて済みません。」

「それは宜しいが、お召物は如何なすつたんで
す。嗚、お氣味が悪いでせう。」

「え、何と云つたまゝ、私は直に本堂へ引込
まうとした。」

「あ、もし」と、梵妻が背後から呼び留めた。「あ
の、信州から女のお客様が有りましたよ。」

「信州から」と、私の聲は高かつた。

「え、誰か信州でした。」

「そりや何時、何時のことです」と、私は急ぎ
込んで、梵妻の前に突立つた。

「ほんの今し方、私が床へ還入つて直でしたか
ら、十一時、彼は十二時前でせう。何でも車夫
が上野の終列車で着いて此處迄お供をした様に
云つてましたから。」

「ぢや、いよ／＼此處へ来たんだ。」

「何ですか——急な御用でも」と、梵妻は氣の
毒さうな顔をした。

「いえ、何と云つたが、「一寸其邊を見て來ま
すから。」

私は思はず飛出して神樂坂を駆け下りた。

右側左視見廻しても、雨上りの霧ににじんだ
様な家端の電燈がちらほらと續くばかりで、そ

れらしい影も見えぬ。私は少時線路の上に立つ
て居たが、やがて又とぼ／＼と坂を上つて行つ
た。

玄關へ洋燈を出したまゝ、戸が一枚開放して
あつた。私は自分で戸締をした。

「如何でした。最う見えないでせう」と襖越し
に梵妻が訊ねた。

「え、」と云つたが、「洋燈は此處に置いて行き
ますよ。」

「え、今起きて行きますから」と云ふのを聞捨て
て、私は廊下傳ひに本堂へ廻つた。

本堂には、須彌壇の御燈明も消えてあつた。
冷たい壁を手探りに、擦足をして裏手の自分の
部屋へ戻つた。其儘どきりと疊の上に坐つた。

時間の中に静手と坐つて居ると、何故とも知ら
ず、只ぼろ／＼と涙が飢れる。私は泣いた。

机の曳出から、何日ぞやあの女に貰つた左の
手袋を出して、いきなり涙を拭くと、又後か
ら留度もなく新しい涙が湧いた。

やがて押入から夜着を引出して、それを引被
つたまゝ、夜を明かした。明方からとろ／＼と眠
つたが、目が覺めると、不圖車夫を調べて見た

らと云ふ氣が附いた。上野から乗せて來たと云
ふから、停車場の構内の車夫を一々調べたら分

らぬことも有るまい。そこへ気が附くと、矢も柄も堪なく成つて、むつくと起上つた。

上野の停車場へ着くと、私は直に人力車の札賣場へ行つて訊いた。左様云ふことなら、車夫溜りへ行つて訊ねた方が早分りだと云はれて、又其處へ行つた。

「左様だ、昨夜の終列車なら雨が降つて二人しか客がなかつたが、何でも女で築土迄と云ふのが有りましたよ。其方アお年の召した方ですうと、中でも親方らしいのが云つた。

「いや、年は行つて居ない。兎に角昨夜築土迄行つて呉れたのが分りや可いんだが」と、私は稍性急に成つた。

「おい、誰か此中に昨夜築土迄御婦人の御客様送つた奴は居ねえか。」

「うむ、そりや堅の野郎だと、即座に云ふ者があつた。

「おい、堅公は居ねえか。」

「なに、堅公なら今迄將基を指して居たんだが、内へ歸つたかも知れねえよ。」

「家と云ふのは」と、私は透さず其男に訊いた。

「御徒士町の裏通りでさ。」

私は委しく道順を聞いて其處を出た。大通から裏町へ曲らうとする角ではつたり向うから來

る車夫體の男に出遭つた。

「あ、堅公が遣つて來ました。あれが堅公でさ。おい、此方がお前に用が有るとよ」と、私の後から來た車夫が云つた。

堅公はどきまぎして足を留めた。

此車夫について、昨夜確に信州から來たと云ふ女の客を築土迄送つて行つたが、先方へ着けば留守だと云ふので、雨は降るし、何處か泊る宿はと云はれて、此方も不案内ながら神樂坂の下の定宿へ送り込んで、其儘歸つたと云ふことだけ確めた。其宿の名も聞いた。

直に又神樂坂へ引回した。屋根を見ると、宿の名が出て居る。私は思はず大息を吐いた。

腰硝子の戸を開けて這入ると、三十恰好の丸髷に結つた主婦さんが出て來た。一寸言出しにくい様に思つたが、思ひ切つて、昨夜これくの女が泊つた筈だがと切出した。

「其お方なら、昨夜晩くお着きに成りまして、今朝最早く御飯も召上らないでお立ちに成りました。」

「で、其行先は分らないでせうか。」

「へえ」と云つたまゝ、一寸思索して居たが、「何でも車夫に小石川の白山の方へと仰有つた様に覺えて居りますが、何なら一寸其車夫を喚んで

參りませうか。」

白山へ歸つたと云ふなら、最う訊く迄もない。私はほつと安心した。それと共に、又何時逢はれるやらと云ふ様な氣がした。朝飯も食はずに立つたと云ふから、恐らく昨夜はあの儘枕に就かなかつたのであらう。それが如何にもあの女らしい。

私は主婦さんに禮を云つて、軒端を離れた。

七

二三日は商の脱けた様な日が續く。私は待つともなくあの女の情報 waited。あの女の性癖としても、そんな筈はないと思ひながら、矢張り心待ちに待たれた。それも空頼めと成つた。

いよくあの女との關係も絶えた。

最初あの女を見た刹那、如何云ふものが、私はわが生涯の危機に臨んだやうな氣がした。

それが好いか悪いかは知らぬ、兎に角、非常に喜びと悲しみとが前途に隠されてゐる様な氣がした。最う逃げるにも逃げられない様な氣がした。

實を云へば、あの女から親切らしい親切も、眞心らしい眞心も、嘗て一度も受けたことはな

い。あるものは只苦痛と屈辱とばかりである。それでも私はあの女から離れられなかつた。あ

の女の出来心に操られて右したり左したりしながら、私にはそれが自分の思想に表現を與へ、自分の感情に形體を與へ、又自分の夢に實在性を與へるものの様に思はれた。そして、それが私の生きる唯一の道だと信じた。

只、何處かに無理があつた、始終物足らぬ所があつた。

勿論あの女も普通の女ぢやない。あの女の身の周囲には、何物か常人の持つて居らぬ力がある。あの女の背後には圓光がある。それが只私の幻影とも思はれぬ。只私があの女を理想化して見て居るばかりとも思はれぬ。併し何處かに無理があつた。自分ながら強ひて左様して居るやうな形跡があつた。目のあたりあの女の實際とあの女の上に描いた幻影とが喰ひ違つて居るのを見ても、私は只あの女から離れともなさに、強ひてそれを見まいとした、考へまいと努めた。

それだけにしても、矢張離れる時には離れた。只あの女と離れた上は、私の自由だ。あの女の代り、私は私の思ふ儘に幻影をつくる。幻影を不朽にする。それに依つて、私は失つたものを取戻すのだ。其外に、私の救はれる道はない。

私は二たび現實の世界から空想の世界へ逃げた。二たび死物狂ひに成つて製作に取りかゝつた。

一日、僅かながらも原稿紙が嵩んで行つた。あの女とは別れたが、あの女のために書くのだと云ふ心持は離れない。一字といへども、一行と云へども、皆あの女の爲に書くのだと思つた。私は極力あの女を理想化した、誇張もした、文飾もした。それでも未だあの女の實體には及ばぬ様な氣がした。これが出来上つた上、あの女が見たら——あの女は如何思ふだらう、何と思つて讀んで呉れるだらう。私はあの女の爲に、あの女に代つて書いて居る。

それにはいろいろ苦しいこともあつた。殆ど前例のない境遇に立つて書いて居るだけ、一寸した世間の取沙汰でも、筆と胸に做へて、二三日筆の執れないこともある。そんな時は、毎もこれが最後だと思つた。これを最後に書く——これが済んだ日は、私が此世から解放される日だ。縱令そんな事には成らぬにしても、二たび文筆に挑はるやうなことは有るまい——左様思つて、自ら安んじた。私はこんな卑屈な狀態に陥りながら——女と一緒に死なうとして死損ひ、其女にも捨てられて、自分で自分の顛末を

綴れば成らぬと云ふやうな——こんな狀態に成りながら、私は未だ自分に何處かヘロイックな要素が残つて居ると信じて、一日の生を偷まうとしたのだ。これさへ済んだら、私の身は如何成るか分らぬと思つた。左様思ふ側から、私は能く如何も成らぬと云ふことを知つて居た。切めて文筆を賣つて口を糊すことだけは止めたいと思つても、それさへ心に任せぬのぢやないかとも思はれた。

かうして自分の肺甲斐ない心根を知つて居るだけ、私は一しほあの女が崇高に見えた。離れて居るだけ、一しほ高い山の巔にかゝつた雲か、野に燃える陽炎の様に思はれた。それ程人界を離れたものの様に、あの女を思ひ込んで仕舞つた。

あの女が霞を喰つて生きるなら、私は土の中に棲んで泥を嘗める。私は出来るだけ自分と云ふものを眞黒な色で描かうとした。意氣地のない、黒癡つばい、其時自分の利益を忘れることの出来ない男として——殆ど取柄のない男として表はさうとした。私は自分の上に何の容赦も加へないつもりであつた。あゝ併し何事ぞ、私はそんな事をしながら、かうして自分で自分を非難して置きさへすれば、他人は最早自分を非

難する權利がないか何その様に思つて居た。何と云ふ淺ましい心根であらう。

其間にも、だん／＼年の暮に迫つた。私の小説が紙上に掲載される時期も近づいた。私はうか／＼側視をしては居られなく成つた。あの女の消息もふつとりと絶えたが、何事もなく自家に居ると云ふことだけは、何處からともなく傳はつた。あの女の氣性としても、そんな筈はないがと思ひながら、そんな事に心を使つて居る暇もなかつた。

一月二日初めて私の小説が紙上にあらはれた。小説らしい小説を書くのも初めてなら、勿論新聞に出るなど云ふことも初めてである。即日一人の友から端書が來た。つゞいて田舎の友からも手紙を寄せた。いづれも何んな物を書くかと案じて居たが、先は安心したと云ふ意味であつた。私はそれに力を得た。

小説は日に／＼出た。毎朝自分の書いた物の挿畫を見るのも樂みに成つた。挿畫はカットの様な小形の筆を省いたものであつた。

只、其中にも、何となく淺猿しい心持が失せない。本當に好きな者の名は、他人に云ふのも可厭なものであらう。他人に一寸漏らしただけでも、味ひが抜ける様に思はれる。それを、

小説とは云へ、斯うして日々自分の秘密を曝け出して行くのは、自分自身の爲にも可厭ぢやないか。どんな詰らぬものでも、秘密にさへして置けば、自分の眼にも有難く見える。此世の中にローマンスを齎す唯一のものは秘密である。私は其ローマンスがしつかり捕へたさに、自分の手でローマンスを壊して行く。私は只寂しかつた。一字書き一行綴る毎に、何とも云はれぬ沿しさに震はれた。

それに、漸く日々の掲載に追はれ出した。最初それでも二十回分計り出来上つて居たが、瞬／＼間に追附かれて、其日々々に出る分を前に書く外はない。朝も晩も机に猫齧みついて居て、それでも未だ間に合はなかつた。斯う成れば、最早精神の勞働ではない、肉體の勞働である。

一月二月と經つて、山の夜の年同日も廻つて來た。其頃或雑誌に、あの女の書いた脚本が載せられると云ふ噂が立つた。それを聞いても、私はどうも信じられぬ。今更あの女がそんな事をとも思つたが、噂は矢張事實と成つた。大袈裟な廣告も出た。が、實物について見れば、夫程でもない。

『退京』と云ふ題で、女主人公に最一人女の

友達を配して、／＼迄父親の言葉に従はず家を出ると云ふ筋、最後に一人の文科大學生を新橋へ喚んで無理矢理別れを告げる幕があつた。二人の中を暗示するものとも云へば云へる。

勿論あの女が何んな事をしたとて、何んな物を書いたとて、私の知つたことではない。でも可厭な心持がした。何んなつもりで書いたのかは知らぬが。自分で書くのさへ可厭だと思ふもの、あの女には何更書かせたくない。作の好い惡いに拘らず、書いて貰ひたくない。あの女には、只黙つて居て貰ひたい。私の書いた物なぞも、手に觸れても見ないと云ふ程、夕風に立つ池のさざ波の様に見做して、一八高く行ひ澄まして居て貰ひたい。左様されたら、私は堪らなく寂しからう。寂しくとも、私の眼に映じたあの女としては、左様して居て貰はねばならぬ。

あの女の最後の手紙に、人と人との關係を斷つて自分で處理するとなつたのはこんな事を指したのか、自宅に居て、こんな物を書いて日を送ると云ふことであつたのか。

私は二たび其脚本を讀み回した。長い間、あの女の名に飢えて居たので、活字に印刷されたあの女の名を見るだけでも胸が躍つた。

あの女自身に擬した女主人公の登場とあるのを見ては、目の前にあの女の姿が泛ぶ。女の友達と云ふのは勿論木下らしい。をかしい事には、二人の女の顔立やら風采やらがあべこべに成つて居た。此二人の對話の中に、父親が二人のことを心配して、何方か一人だけでも結婚して呉れたら屹度片方の意思も變るだらうと云つて居るが、私達はそんなに見えてせうかなぞと笑ひながら話合ふ所があつて、それから新時代の女性らしい議論がいろいろ並べあつたが、何の事が能く解らぬ。解らぬ癖に解つたつもりで居るやうな風も見えた。併し二人が父親の前へ喚ばれて、意見をされながら如何しても家出をすると言ひ張る、それなら其理由を云へと云はれても、押黙つたまゝ、口を開かぬ。そこに云ふに云はれぬ力があつた。

父「とき子！ 其涙は何の涙ぢや？」

娘「泣癪にて」御父さんには解りません。

父「私に解らぬ。道理の解らぬ様な父ぢやない」と云ふに。

(とき子泣く)

父「お前の様な剛情者が泣く程悲しい譯があるなら、明かに申したら可からう。

娘「最う何も申すことは御座いません。只

家を出して頂きます。これからは自身のために生きますから。

(とき子退場)

とき子と云ふのは女主人公の假名である。

この父子の對話には、私は實感を以て讀まされた。併し家出の理由として只自分自身のために生きるるとしか云はぬのは、云ひたくても云へぬのか、それとも云ふべき理由がないのか。私はどうも外に云ふ事がないのではないかと云ふやうな氣が仕出した、あの女は飽足はぬ、飽足秘密にする。其秘密に釣られて、私はあの女の周圍に幻影をうかべ、一人でローマンスを作つて居たのぢやないか。これで見れば、家庭の撞着と云ふものも、ほんの單純な飽氣ないものに過ぎぬ。勿論此脚本が本當で書かれたものとは思はぬが、それにしても心にもない事は書けなからう。こんなのが本當の所ぢやないのか、これが本當だとしたら最う悲劇ぢやない喜劇だ、物笑ひだ。左様成るのが悲しさに、私は何れだけ心を盡したらう、あの女が詰らなければ、私は尙更詰らないのだ。それとても、最う仕方ない。

二三日は、それでなくとも澁り膠ちの筆がよいよ盡つた。原稿紙に向ふのも懶かつた。併し

し斯う成れば愈々此作の外に頼む所はない、此作の中に自分の長い夢を託して、切めて影を固定する外に生きる道はない。

私は今一度細の様に勞れた身體を起した、餘りに筆の盡つた時は、人に顔を見られる事かしさも忘れて、新聞社へ出かけた。社の輪轉機の側で一枚宛書く後から活字に組んで貰つた。そんなにして漸く一日分を纏めた。

五月のある日、私は社の樓上でやつとをはりの一回を書上げた。最う一時間待てば明日の初版が刷れると云はれて、つくねんと待つて居た。やがてしつとりとインキの匂ひのする新聞紙を貰つて、それを讀みながら戻つて來た。

神樂坂の下で電車を降りた時は、兩側の廂に夕日の影が射して居た。眞白に塗立てた土地の裏者らしいのが、不常着のまゝ、我衣紋をしたがらぶら／＼と歩いて居るのにも出逢つた。私は不圖其邊で夕飯を済まして行くつもりに成つて、坂の上の往來からやゝ引込んだ西洋料理屋へ這入つた。

二階へ上つたが、折悪しく何處とやらの生徒の會合があるとかで、梯子段の上の狭い部屋へ通された。どつかと身體を椅子に投出したまま、眺へた物の來る迄うづら／＼として待つて

居た。

明日からは何を爲しよう。

こんな心持がぼつと白雲に包まれたやうな頭の中にも湧き。今日迄はそれでも爲ることが有つた。明日からは何にも爲ることがない、爲ることはかりでなく、何を爲る力もない様に思はれる。

俺は最う不用な人間に成つたのか——自分にとつても不用な。

私は地の底へ落ちて行くやうな心持がした。隣の部屋からは、しつきりもなく騒々しい、しかも若やかな會衆の聲が聞えた。

矢鱈に強い酒をあふつて見たが、如何しても酔を成さぬ。そこくにして其家を出た。

九時頃私はいろく世話に成つた禮のつもりで、或家の玄關に立つた。鈴が鳴ると、ばたくと子供が大勢出て來た。中には寢巻を着代へたまゝのもあつた。私は何と云ふこともなく人の世が戀しい様に思つた。

主人はちつと私の顔を見ながら、

「如何した」と訊かれた。

私は蒼醒めた顔を隠す様にして、やつと今日書いて仕舞ひました。」

「左様か。」

其儘少時言葉が途絶えた。

「どうも、氣が減入つて——これさへ書いて仕舞つたらと思つて居ましたが、矢張不可ません。」

やゝ在つて、私は訴へる様に云つた。

「そりや、小説を書上げたつて、そんなに愉快なものぢやないさ」と、主人は輕く笑はれた。

一時閑許りして、其處を辭した。二たび築土へ引回して、寺の門をくぐつた。玄關から自分の部屋へ戻つて、灯火を點けて蒲團を敷くまで、さも他人の事でもして遣るやうに、只器械的に手や足を動かして居た。まで帶を解かうとして、不圖、一週閑許り前に故郷から手紙が來たことを想出した。それが其儘見ずにある。私は自分で見たくない手紙だと、いづれ見ではかなはぬものと知りつゝ、かうして封も切らずに捨てて置く事がある。

私はそれを机の奥から出して、思ひ切つて讀み下した。子供の書いたやうな大きな文字で、

此中はたよりも無いが、息災にておはし候や。私もまめに候故御安心下され候。五月二十一日は父の法事、ぜひく

一とおかへりなされたく。

隅江こと永らく内に居りましたが、此春再縁して、むこを取りました。右御知らせ申上候。

私も其地へまゐりたく、念じ居候。

五月九日

要吉どの

はゝか

一わたり目を通したまゝ、ぐる／＼と巻いて封へ突込む。直に洋燈を吹消して横に成つた。小僧が窓の戸を閉め忘れたと見えて、障子の紙がぼんやりと白く映る。私はそれが氣にかりながら、二たび起きて閉める氣にも成れない。

隅江が再縁した。到頭他人の妻に——それも私が自分で左様させたのだ、自分で手を下してあの女の貞操を破らせたやうなものだ。何んな女でもあゝした上に、あゝして、あれだけ長く打撚つて置けば、かう成らぬ女はあるまい、かう成つて行くのが當然であらう。私は暗にそれを豫期して居たのだ。かう成るのを待つて居たのだ。私は左様云ふ非道な男であつた。

斯う思ひ捨て、私は強つて眠らうとした。

此上あの女のことを考へるのは、あの女に對して、いやが上にも濟まない様な氣がしたので。

併し、私は眞實それを豫期して居たのか、それで可かつたのか、私は数々の女を知るには知つた。が、自分の爲に生れた女だと思つたのは、あの女の外になかつた。あの女だけは、此世に生れた時から自分の妻に極つて居たものと思つた。私は凡ての缺點を自認した上でも、只心の底からあの女を愛して居たことだけは誰の前でも云ひたい。成程打捨つても置いた、虐待もした。そんなにしても、毫も自分で疚しく感じない程、私はあの女を愛して居たのだ。あの女の身にしたら、随分當に成らぬ良夫でもあつたらう。是からも如何成るか分らぬ。併し何處でどんな不行跡な一生を送つたにしても、最後にはあの女の許へ歸つて行く積りであつた。あの女も私を待つて居て呉れるものと思つた。よほどと枕に縫つて、やうく通り着いた私を背戸に迎へて、私の白髪頭を抱いて呉れるものは、あの女の外にないと思つた。私はあの女の一生を歌にして仕舞はうと思つた。昔の物語の中の歌に——併し左様思ふ中から、左様は成らぬと云ふことも知つて居た。今日の様な日があると思ふことも。

併し、こんな事を思ふのは我ながらはしたない。最う何も思ふまいと心に誓つて、頭から夜着を引被つた。とろ／＼と寝入つたかと思ふと、何か怖ろしい夢を見た様な氣がして、はつと眼を覺ました。何んな夢を見たのか能く記憶えて居らぬ、只、今にも直ぐ如何かして遣らねば成らぬ、私があの女を救つて遣らねば成らぬ——そんな氣がするばかりで、前後には何も記憶えて居らぬ。

私は寝手と暗がりの中を見詰めて居たが、やがて寢巻の袖で頸筋の汗を拭つたまゝ、二たび枕についた。

又同じ夢を見た。夢だとしりながら夢を見て居る。

私は長良の橋の上に立つて居た。しと／＼と降る雨の中に、傘を翳しながら橋の下を眺めて居た。河原の石はつゞ濡れに濡れても、未だ水

嵩の増す程でもない。上の瀬の邊り霧がかつて、其中から筏が一つ箭を射る様に流して来た。又一つ、其後から又一つ。それが段々橋の下前へ近づくにつれて、次第に水の流れも激んで筏師は棒を上げたまゝ、壘の上を滑る様に下つて来る。二たび橋の下手へ出ると、ぐるりと水押を轉じながらたわ／＼と下の瀬にかゝつて流れて行く。私は幾つとなく見送つた。見る／＼裏を着た筏師の立委が、川下の霧の中に包まれて行く。何時の間にやらそれがふつと消えて仕舞ふ。あの先は十里、二十里、桑名の海へ出て宮の濱まで廻すのだとも聞く。水の上の一生と云つても、筏師程水に濡れて暮すものもなからう。私は橋の上に立つたまゝ、筏の行先を思ひ遣つた。

其間にも、筏は幾つとなく橋の下をくぐつた。不圖上から流れて来る筏の上に、何かしら黒いものが見えた。それが女らしい。だん／＼近寄つて見ると、丸太の上に板切を敷いて、其上に一人の女が寝て居る。何處やら病氣らしく、雨に濡れたまゝ、寝手と上眼這ひに橋の上の人を見上げた。其大きな眼に見覚えが——

あッ、鴨江ぢやないか。

筏は其儘橋の下へ這入つた。私もつゞいて下

手を膝下した。女は背後を見せたまゝ見回らうともせぬ。ぐつと後師の張つた棹に、早や下の瀬の真中にかゝつた。

隅江だ、隅江に相違ない。それにしても、あの女が筏乗りの妻に——あの筏乗りと夫婦に成つたのか。

私は少時薄紙に包まれたやうな二人の姿を見送つて居たが、いや盗まれたのだ、あの女は今盗まれて行くのだ。斯う思ひ返すと共に、私は遮二無二驅出した。川添ひの堤について、何處迄もと筏の後を追かけた。如何しても水の足が早い。初めはそれでも筏の影を見失はぬ様にして居たが、一里行き、二里行く間にたうとう見失つた。それでも夢中に成つて驅けた。

其間、雨は篠突くばかりに降つた。四邊はだんだん暗く成つた。時々振回つては見當をつけた。稲葉山も、霧に隠れて見えぬ。何時の間にかやうとも離れた。今は方角さへ分らぬ。私は一人途方に暮れた。

まゝよと、足に任せて歩いて居ると、目の前に白壁の土蔵が見えた。何でも寺の御堂の裏手らしい。前へ廻ると、門の扉に昔菊の紋のついて居たのを太政官の御布令で剝がした跡がある。これは隅江の實家ぢやないか。今頃こん

な所へ来る筈はない。夢だと思ひながら、くぐりを押して潜入つた。物音を聞きつけたのか、玄關の障子を細目に開けて、そつと女の顔が覗く。

隅江だ。

其途端に、又びしやりと障子を閉めた。私は一人雨の中に立つて居た。やがて又くぐりの開く音がして、袈を着た大男が潜入つて來た。じろくんと私の顔を見ながら背戸の方へ廻つて行く。あの男だ——隅江と一線に筏に乗つて居た男に違ひない。

夢だ、夢なら醒めよとあせつた。私は聲を上げて叫んだ。其聲に驚かされて、眼を開く。

夜は明けたらしい。窓の障子も白んだが、四邊はまだ森として物音一つ聞えぬ。私は夜着を脱ぎ回す様にしながら寝返りを打つた。

夢を見た様でもある。只そんな事を続けざまに考へて居た程でもある。それにしても、何處からあんな事を思ひ着いたのであらう。あの女と筏乗りの妻——何うやらそれがあの女の行末を暗示する様にも思はれる。あゝあの女の一生の日は暮れた。如何して遣らうにも、最う如何することも出来ない。

私はあの女を知つたそもくから、二人の中

の様々を一つ／＼心に泛べて見た。何うやらそれが凡て光彩を失つた。あの時の事も、あの時の事も皆私一人で造つて居たも同じらしい。あの女の言つたことも、爲たことも皆私が左様爲せたのだ。あの女の心から出た事は一つも無いのであらう。それにしても私の云ふことを好く聞いた、何んな事でも私の云ふが儘に成つて居た。私の云ふが儘に成る女は、又他人の云ふことも聴く、あの女は柔順に側の者の云ふことを聴いて、私を見棄てる氣に成つたのであらう。又女と云ふものは、斯うしたものなのであらう。

何時迄考へても、同じことを繰回すに過ぎぬ。私は思切つて起上つた。寝巻の儘背戸側へ降りて、釣瓶の水で頭を冷して來た。窓一杯に障子を掛け放すと、空は増硝色に光つて、向側の高い煙突からうす／＼と煙の立つのが見える。豆腐屋の喇叭の音も聞えた。何處からともなく大洋の様な大都のどよみが傳はつた。

私は窓の闕に凭かゝりながら、腹の底に力のないやうな心持がした。それから袂の底を探つて、二三本よれ／＼に成つた巻煙草を取り出した。其一本に火を點けて、一息吸ふと、チリ／＼と物の爆せる音がして、急に死骸を焼く様な匂

ひが鼻を打つた。私は驚いて巻煙草を見た。薄い紙の下に、髪の手が一筋捲込まれて、それから透いて見える。あゝこれだと思つて、少時それを見詰めて居たが、其儘窓の外へ捨てた。最う次の一本に手をつける氣もない。

考へて見れば、私は是迄何事をするにも串戯の様な氣がして居た。幾許自分では眞剣のつもりで居ても、何處かに遊戯分子が加はつて居た。何事も遣つて見づくであつた。未だ串戯だ、串戯だと云ふやうな心持が半分して居る間に、こんな事に成つて仕舞つた。取返しのかね境遇に——少くともあの女の身の上を取返し、私はあの女を戀ふのか、戀ふるのが罪惡に成つてからあの女を戀ふる因縁であつたのか。

私は戀の悲劇を知つた。戀に不忠實なる者のみが、眞の戀も知る、戀の悲劇も知る。一生忠實にをはる人は、只戀の滑稽な半面のみ知つて終るのだと、私は日頃そんな事を思つて居た。成程、私は戀の悲劇を知つた。併し私の知りたいと思つたのは、かうした悲劇であつたのか。

あゝ、小説もをはつた。小説と共に人生が終

るものなら——小説は終つても人生はつゞく。長たらしい、小説にも成らぬ人生がつゞく。小説や劇の與へる慰安と云ふ様なものが有るなら、それは最後の頁の後には——大詰の幕が下りた後には、人生がないと云ふことである。ああ、人生のローマンスを生き延びた人間程惨めな、而もやぐざなものはないからう。

八

あの女——あの女と云つても、色々ぐつちやに成つた、此自傳を書始めてから、始終あの女と云つて来た、其女である。此處迄あの女で通して来たのだから、いつそ終ひ迄あの女で通さうかと思ふ。元來小説の中で人の名を附ける位六ヶしいものはない。若し本名と云ふ様なものがあるならそれに越したものはなからう。其本名が云はれぬとすれば、矢張あの女で済まして置く。

私はあの女を離れて小説を書くことと云つた、あの女を離れて、あの女の上に描いた幻影に形を與へるとは云つた。併し左様云ふ中から矢張あの女のために書くのだと云ふ心持は離れない。今こそあれ、かうして中が絶えて居るにしても、これさへ出来上つたら——あの女から何と云

つて呉れもしよう、縱令あの女からは何とも云はぬにしても、何とかして近づく道もあらう、私は心の奥にこんな未練があつた。何處かの隅にこんな卑しい考へを持つて居た。

それが、小説は終つても何のこともない、何の音信もない。一日と経ち二日と過ぎる。私は毎日洞穴に面して呼吸をして居るやうな心持で日を送つた。

尤も、未だ残つた仕事はある。如何かして書上げた小説を一冊に纏めて置きたいと思つても、どうも思はしくない。かねて約束のあつた本屋は、此頃出版物の取締が厳しいと云ふのでそれとなく當局の意向を引いて見たところ、どうも駄目らしいので残念ながらと、一度持つて歸つたスクラップ、ブックを返して来た。それでもと思つて、外に知合の本屋を呼んで話して見たが、これも二の足を踏んだ。スクラップ、ブックの上には、徒らに埃がつもつた。

其間に月もかはつた。何處からともなく、あの女が又告自めいたものを書いたと云ふ噂が傳はつた。到頭あの女から音信があつた。一年半かゝつて、『煙草』を書いた報酬は與へられた。最う可い、何んな事でも書くが可い。

私は日中の炎天に蒸されながら、雑誌屋の

店先へ行つて、其雑誌を買つて歸つた。それを机の上にひろげた時は、わな／＼と指先が戦へた。

それは臨時増刊として、所謂驚くべき手紙を集めたもので、あの女のも其一つであつた。今、其概略を抜く。

偽らざる告白

私はストイックが所好です。堅忍にして清に動ぜざる底のものでなければ人間は駄目だと思ひます。女々しいと云ふことをあらゆる意味で憎みます。男は勿論ですが、女でも平生から生死得脱の工夫はして置くべきです。従容として死につくだけの覺悟は何人でも日頃いたして置くべきだと思ひます。

修養の或階段に於て、人は是非とも禁欲主義で行かねばならぬと、私は信ずる。無論思想上にて、これが人生に於ける最上の主義では決してない。修養の極致は心の欲する所に従つて矩を踰えずと云ふ至妙の境でなくてはならぬ。併し精神鍛錬が十分な爲に、私などは遺憾ながら時として頭腦と身體とが一つに出ない。誠に恥づべきことであるが、今日の私の境界に於

ては仕方がない。それで實行上に於ては禁欲主義で行かねば成らぬ。この階段を通過せぬことには、一步も先に出ることが出来ぬのである。止むを得ぬと云ふ外ありません。

今日の小説に描出されてある人生を偽らぬ人生だとか、眞の人生だとか云ふのは許すまじきことである。眞の人生は向上せむとする努力奮闘でなくてはならぬ。眞の自然境、大自在の解脱境に到達せむとする向上の道程でなくては成らぬ。一切の欲望を征服し、一切の誘惑と闘つて徹底せる自我を發揮するところに人生はあるのである。

私が小説を讀まぬのも小説中の人物に同情同感する譯に參らぬのも、之が爲である。自意識が強いからと云ふやうなことも無くはあるまい。併しそんな事ではない。同情するだけの價値がないと認めるからせぬので、同情がないと云ふのとは譯合が違ふのである。『煤煙』の中の朋子の如き者に對しては、未だ同情する譯には行かぬ。あれでは弱い。要吉の如き人物にも同情することは出来ぬ。私は寧ろ隅江を愛する。今一つ私が小説に興味のもてぬのは、

私の頭が何方かと云へば科學的に出来て居るからである。何を見ても聞いても直ぐ抽象化する癖があるのです。骨ばかりしか見ぬ癖があるのです。具體の世界にばかり住んで居ることが出来ないのです。世間の事や日常の生活の事に興味を有てぬのも此故でせう。

近頃いろいろの方々から『煤煙』のことに就て御質問を受けます。無論私と『煤煙』とは關係がある。少くとも朋子と私とは關係がある。併し『煤煙』が既に藝術品である以上は、藝術の堂に參じたことのない私などは、一步半歩も立入ることは出来ません。たとひ事實と相違の點があらうとも作者の想像は自由なのでせう。其邊の事を私が彼是と申しますのは潔しとせざるどころです。御返辭は致しませぬ。

只私が禪と云ふことに多少關係がありました爲に、私の行爲によつて、又あの『煤煙』に依つて、禪と云ふものが變なことに曲解されて、禪とは宜しくないものだ、危險なものだ、人を誤るものだなどと早合點をなさる方が若しあるとすれば、それは大きな間違ひなのでして、私の行爲が原因と

成つてそんな誤解を來したとすれば、誠に申す可く思ひます。新道の前に立つて罪を感ぜずには居られませぬ。就ては私の口から申せませうだけのことを及ばずながら申して置くだけの義務があるかと思ひますので、私など連も云ふだけの資格はないのですけれど、少し云はせて頂きます、具眼の士の一笑にも傾せぬでせう。

一體見性と云ふことは睡眠状態や夢の状態や、特殊な病的状態の中に於て實際される様なものでは決してないのです。精神並に生理的状态の最も健全な時なので、無論覺醒状態なのですが、普通かうして居る時の覺醒状態即意識状態とは違つて、更に覺醒し、更に意識して居るとでも申しませうか、意識が最高潮に達して遂に意識を超越した時なので、半意識や無意識の状態とは全然別なのです。

感官を閉塞し、心的作用を制止した幽然と暗黒との中に、神様でも天降りするかの様にばつと光明が射込むやうなものではない。若し寂光の世界とか、永劫調和の世界とか稱するものを、斯くの如き神秘めいた、奇蹟めいたもので、特殊の状態に於て

でなければ見られぬ世界轉瞬の間にして消えるやうな世界、現身の儘一寸現世を脱出して垣間見るやうな別世界であるならば、それは何程美しい世界であらうとも、楽しい世界であらうとも、私などに無關係なものです。淺草公園の活動寫眞を一寸覗いて來たのと大差ありませんまい。ところが左様ではなくて、何人も通常の狀態に於て日夜見て居る此世界であるからうらしいのである。娑婆即寂光土であるからよいのである。決して瞬間に於て見得る特殊な世ではない。

催眠術にでもかゝつて居るやうな、不可抗の狀態に陥つて居るやうな存氣な事では、千億萬年たつても、見性などは出來ますまい。座禪でもして居ますと、如何にも外見は存氣さうに、さも眠つてでも居る様に見えるかも知れぬが、實はきつはつつの大戦闘です。我々が平生「我」と思つて居るもの、エゴと稱して居るものは、實は眞の我ではない。決して實在して居るものではない。假の我である。小我である。假想假感到過ぎぬ。千變萬化して起きては滅ぶ幻影に過ぎぬ。この假想の我を打破し盡した

時に、眞相の我が本體を見ることが出来るのです。これを本來の面目と云つても、徹底せる自我と云つても、神と云つても、佛と云つても、何と云つても差支ありません。これが所謂即身成佛なので、靈と肉とが一枚に成つた所です。此處が所謂生死解脱の境涯です。決して耳目を閉ぢて外界と絶縁して死人の様に成つて居る狀態ではないのです。色相即無色相なので、何もわざ／＼色相界を遠ざかる必要などはないのです。山川草木人畜、何でも一切の物を有の儘に見て、それで少しも邪魔にならぬのである。丁度眞空の中に居ると同様なのである。大虛堂の中に坐つて居ると同様なのである。水晶宮裡に居ると云ふか、萬里の米河原の只中に坐つて居ると云ふか、とにかく云ひ知れぬ涼味を感ずるものです。古人も水を飲んで冷暖自知すと云はれた通りで、連も申様はありませぬ。

禪は身を以て努力するものである。内なる一切の欲望、外なる一切の誘惑に克つて、眞の自我を發揮する所にあるのである。更に廣義に云へば、禪は心のことである。決して着魔録や、從容錄の中になど大人しく

隠居して居る譯のものではありませんね、禪學などと云つて學問か何ぞの様に思はれては少々違ひます。禪をいたしましては何一つ智識を煩はすものではありません。のみならず、今迄一大事の様に論じ合つて居た抽象的の空論などさりと消えて仕舞ひます。自己其者を忘れて、他人の學説を追ひ求めて動いて居たことの如何に愚かであつたかと云ふことが存じます。

私の日頃の修養上の實際を申して見ますが、精神鍛鍊とか意方の養成だとか何とか難かしく云ひませんでも、何は偕おき二六時中自分の姿勢を正しく保つて居ることが一番だと思ひます。姿勢と云ふことは精神生活の上に至大の關係のあるものです。大變問題を詰らぬことに片附けて仕舞ふやうですが、姿勢と云ふことは全く怖ろしい程道徳的生活の上に重大な關係があります。私はさう信じて居ます、確信して居ます。精神鍛鍊とか何とか云はないでも、先二六時中姿勢を正しく保つて居るのが一番だと思ひます。これが出来ないやうな者は——これが出来ない様に成つては人間はもう駄目です。一切の欲望を制御し、一切

の誘惑に克つて眞の生活をしようと思ふならば、まづ姿勢を整へることから始めねばなりません。姿勢が眞に正しく成れば、血液の循環、呼吸状態、其他の生理的狀態がちゃんと整つて來ます。生理狀態がちゃんと整つて來れば、決して欲情などは起るものぢやありません。起きうと思つても起つて來るものではありません。起らないのが當然なのです。此境界にあつては意力を以て己れを抑制すると云ふやうなことも必要です。私は意志の弱いと云ふことは姿勢を整へて居ることの出來ぬと云ふことであると信じて居ます。私は生來虚弱な體質です。併し自分の姿勢を正しきに置き、生理狀態を自分から整へることに努めました結果は普通以上の健康を得ることが出來ました。又意力を養ふことも出來ました。私は生來の神經過敏です。併しこれに依て感覺の爲に煩はされることが少いやうに成りました。然らば此修養法は人の感受性を鈍らし、無神経なものにするのかと云へば、決して左様ではありません。刺戟を受けることは同じ様に受けて居るのですが、只受けただけで終ふことが出

來る様に成るのです。反動的なことを直にして仕舞ふといふやうなことが無くなるのです。何も感じない、無神経だと云ふのは、外見は同じでも、其間に大變相違があります。

諄く申す様ですが、姿勢を整へると云ふことは生理的狀態を整へることで、生理的對する抵抗力を増さしめることである。欲情を制御せしめむが爲の事である。更に進めば制御の必要もなきに到らしめむが爲のことである。此處が修養の極致で、解脱の境とか、至善の境とか、理想の境とか何とか云ふ様ないろ／＼面倒な言葉は要するに此處を指したものでせう。此境が不斷に繼續すれば、二六時中この境界に遊ぶことが出來る様になれば、其人は聖人である、達人である、大悟の士である、眞の人である、自然の人である。然るに私共になると繼續すると云ふことが出來ぬ。それ故或時は自由な境に居るが、或時は不自由な境に落ちる。今日なほ不自然な一階段を超越し得ぬのもこれが爲である。鍛鍊が不十分な爲に動搖するからである。恥ぢざるを得ぬ。

私は過去の半生涯に於て何一つとしてしなかつた。何一つの仕事もしなかつた。此努力だけが私の唯一の事業なのである。私の生命なのである、誇りなのである。これを抜き去つた時、私は零なのです。此力の盡きた時は私の死です。努力は価値を生む。私が身を以てなしたる努力は私にとつては無上の価値あるものである。何物にもかへられぬ。この前にはあらゆるものを犠牲にしても惜しからざらと思ふのである。

勿論修養の極致に於て自殺など成立しやう筈のないは當然である。併し不幸にして半途に奮闘力が盡きぬかも知れぬ。其時己に克たむと思へば、己を殺すより外に道はない。自殺によつて勝利を得る外に道はない。斯くして一代の戦闘史を一貫させるより外に致方がない。遺憾である。併し止むを得ぬのである。この死は私の勝利ではない。勝利の死である。勇者の死である。權威ある死である。世を厭ふが爲ではない。厭世など云ふことは許すまじき横着なことと私は思つて居る。人間はそんな受身なことでは駄目である。人格の力は

自然の力を征服し得るものである。人生は無量弱から無量強に達する過程ではないか。

佛教がショッペンハウエルの厭世主義の如きものであつて、私が其影響を受けて厭世の考へでも有つて居るかのやうに御察し下され御教示下さつた方もあつた。併し私は信ずる。佛教は決してそんなものではない。涅槃寂滅とは死ではない。未來的ものでは無い。縱し又佛教がそんなものであつたにせよ、私は人の思念の爲に死ぬ譯には行かぬ。生命は佛教よりも高價なものである。私は私の半生の努力の価値を高價なる生命よりも更に高しと思ひ、更に尊しと思へばこそ死しても遺憾なしと思つたのである。又思ふのである。今後よりよく活きむが爲に或は佛教を使ふかも知れぬ。併し佛教の爲に使はれる譯には参らぬのです。以上。

何日ぞや、あの女の手紙に、『煤煙』が濟んだら、いろ／＼親切にたづねて呉れた師友や未見の知己に、一應自分の意度を明かにして置く積りだとあつたが、畢竟これがそれなんだらう。

尤も、其後では、そんな事を云つて白ばつてくれたので、今日自分と云ふものと云ふものが何處にあらうか、それだけでも察して呉れとは云つて来たが、一旦云つた言葉は反古にするのはあの女の常だからわざ／＼答立する迄もない。

如何にも公明正大な論旨である。誰に聞かれても差支はない。それだけに、又誰からでも聞けるやうな議論である。あの女に特殊な所がない、あの女の口からでなきや聞けないやうな所がない。私の目から見ては、あの女自身について何一つ詰つちや居ない。

成程、あの女の修養については詰つて居るが、何故其修養が妨げられるのか。半途に奮闘力が盡きて自ら殺さなけりや成らぬと云ふのも、何者の爲せる業ぞ。そんな不安や恐怖は何處から來るのか、あの女は何も云はない。昔から裏面の消息については一切聞らさない。それにしても、それを明かさないう程なら、こんな物を書く必要が何處にあらう。書いても意味はない。

ともあれ、『煤煙』は其點に觸れた物である。あの女に代つて、其點に觸れるのが唯一の目的である。あの女が自分ぢや避けて云はずに居ながら、只『煤煙』に向つて、『縦糸事實と相違の

點があらうとも、其邊の事は彼は云ひたくない。なぞと、妙に絡んだ物の言振をするのは卑怯である。あの女の一身だけではない、他人の家の秘密を計くことに當るのだから、私だつてそんな事をすりや如何成るか位のことは考へて見た。それだけの用意もした、覺悟もした。それだけの思ひをして仕上げた仕事でも、あの女が朋子でないと云ひたけりや、それも構はない。何なりとも云ふが可い。只、あの女自身は本來何者なのか、明白に名告つてからにして貰ひたい。

それには又、あの女が自分達のために禪學が世間に誤解されたからと云つて、自分で禪學の講釋を始めたのも解らない。禪學の奥義を講ずるには別に其人がある。敢てあの女を煩はすにも及ぶまい。あの女が本當に禪學のために世間の誹を解く氣なら、先づ眞先に自分の暗い半面の歴史から曝け出して、それに依て禪學の享けた汚名を雪ぐべきである。それを爲し得ないで、只あの女の様な事を云つて居るのぢや、千萬言を費しても何の足にも成るまい。何の足にも成らぬばかりでなく、いよゝ以て禪學は危険なものだと思はせるかも知れない。それ程の事があの女には分らぬだらうか、分つて居て造

つてるとすりや、何と云ふ空々しい仕事であらう。

餘りのことに、又白はつて居るのぢやないかとも思はれる。が、今に成つて、二たび彼の當時の態度を繰回すのだとすりや、あの女の心持は最早私の考へにも剩る。何うもそれ程ぢやない、それ程深酷な女とは思へない。第一、何處か幼稚な所があつた。こんな物を書いても、本當に禪學のために辯じ得たつもりで居るのぢやないか。本氣で書いて居るのぢやないか。見よ、何處かむきに成つて居る所がある、思ひ込んだ所がある。

これが本氣だとすりや、此外にあの女がないとすりや、隠して居るのでも未だ悦んで居るのではない、無いのだとすりや——最う何も云ふな、云つて呉れるな。

あの女が禪に没頭して、あの女の不安と云ひ恐怖と云ふものも、こんな所から割出されたものだとしりや、まつたく世話はない。詮じ詰めて見れば、こんな事だらうとは、時々思はんでもなかつた。あの女の云ふ理窟が内々此方の心持に合はなかつたことも、一度や二度ではない。が、斯う明らさまに打出されて見ると、何とも言ひ様のない氣持である。

私はもつと變つた女だと思つた、變つた所のある女だと思つた。『煤煙』の中の朋子が小説を讀まないといふのも、あの女の性格から推して、何處迄も自分の生活を生かすに忙しく、小説の中の男や女と一緒に成つて泣いたり笑つたりしては居られないのだとした。私は其外に考へ様がなかつた。あの女の云ふ様だと、如何やら道學先生でも云ひさうなことで、世間體は好からうが、矢張私の云ふ様であつて貰ひたい。

又、ある時、あの女が自分の癖として、間々一種の恍惚状態に陥ることがある。あらゆる感覺と情調とが調和して、無念無想、閑なく光明が照渡るやうに、頭の中はそよとの影を亂すものもない。同時に、諸々の活力が横溢して、自意識と存在の意識との頂點に達するものである。此状態は日夜時を定めずして起る。かうして一緒に散歩して居ながら起ることもあると云ふのを聞いて、それが見性の實驗を仄めかしたものと知らないから私は的切癡癡の發作前に於ける症候だと思つた。縱令それぢやないにしても、あの女にはそんな様な持病があるのだらうと思つた。一つは『死の勝利』の女主人公を連想したからでもある。が、私のつもり

ぢや、飽迄あの女にはあの女に特殊な情みがあると思ふたので、見性が夢幻状態であらうが、覺醒状態であらうが、意識を超越しようがしなからうが、そんな事は私の知つた事ぢやない。

併し、此方如何思つても、相手が左様なけりや仕方がない。幾許あせつて見ても藻掻いて見ても、あの女は矢張禪學の産んだ子らしい。禪學から生れて禪學で死なうとしたものらしい。私がそれを如何することが出来よう。只、あの女のために、一身の破滅ばかりか、何も知らぬ家族の者の一生の運命にも取返し難い變動を來したことを思ふと、いかにも瞞されて居たとは認めたくない。虚誕でも可い、何時迄も瞞されて居たい。

あの女も、それなら何と思つて、私の前に心にもない振舞をして見せたのだらう。あの女は朋子ぢやないかも知れぬ。只朋子の様に物を言つて、朋子の様に振舞つた。あの女の云つたことにも爲たことに始終暗い影が伴つた。時には私の手を執つて自分の暗い半面を覗かせる様にしながら、此處迄來てそれを握れとも云つた。それが皆識か。口で云つたことには事實と相違があるなど云ふなら、手紙だけにしても

可い。手紙にも歴々其跡がある。あれが皆狂言か、狂言なら狂言でも可い。何の積りでそんな狂言をつづけた——私は許さない、許すことが出来ない。

私は寫ペンを握つた。指が曲つて伸びない程握り緊めて、連二無二書き續けた。次の日も一日机の前に坐つて居た。やつと書上げた物を讀んで見ると、まはり冗い駄味や揚足取ばかりで、少しも急所を突いて居ない。私は落膽してペンを抛り出した。一旦は其儘棄てて仕舞はうかとも思つたが、又思ひ出して、其日暮原稿紙三十枚餘りの手紙を小包郵便で送つた。

幾日待つても返事は來なかつた——そんなものに返事を出す必要がないと云ふやうでもある。私は後悔もした、苛立ちもした。そして、だん／＼平靜に成つた。

私の手には只スクラップ、ブックが一冊残つた——毎日自分の手で『煤煙』の切抜を貼つて置いた、あのスクラップ、ブックが。

これだけは私のものだ。何と云つても、朋子は私のものだ。畫工が心を籠めて描き上げた肖像畫は、描いた畫工のもので、モデルに成つた女のもではないとしたら、私の朋子も矢張私のものだ。本當の朋子は『煤煙』の中に居るの

だ。あの女は只其影法師だ。影法師に似て居るばかりだ。

こんな事を思つて、思ひ詰めては、俄に激昂することもあつた。

併し最一度『煤煙』を繰回して讀む氣もない。時々スクラップ、ブックを出して續つて見ることもあつたが、其儘枕にしてうとうと寝入つた。

九

夏が來た。

此頃から漸く死んで行く人が殖えるらしい。淋しい寺ではあるが、時々思ひがけない時分に葬禮の鉦が鳴つた。そんな事が二三日つゞくともあつた。

あ、今日も又誰か死んださうな。

本堂の裏の薄暗い部屋の中で、禿びた筆を握りながら、そんな事を思ふ日もあつた。須彌壇の前には、目に／＼白、青、金色の蓮華が幾對となく殖えて行つた。夜に成ると、鼠が造花の糊を喰べようとして夜どほし騒ぐのが、廣い御堂の中だけにうすら淋しい。

それでも、何うやら斯うやら約束の短篇小説を二つ三つ書いた。書く事もなく、書く氣にも

成らぬのを、無理矢理書くのだから堪らない。後の一つなどは、締切りの日限を越しても未だ出来ぬので、遠方から毎日催促の使者が来た。終ひには、只其使者に立つた人が氣の毒さに筆を握るやうに成つた。

昨夜は到頭徹夜をして書上げた。明方近くとるゝとしたが、目を覺すと、朝の間に自分で行つて、玄關口から投込んだまゝ、引戻したが、日光は頭の上からちかちかと射る。今日は舊盆の精霊祭をするから、お喧しいでせうが一日だけ何卒と、出掛に梵妻から云はれたことを想ひ出すと、寺へ歸る氣にも成れない。私の足は数寄屋橋を渡つて、何時ともなく日比谷公園に向つた。門を入つて、圓形の運動場を横に見ながら、眞直に噴水のある池の畔へ行つた。そして蕪棚の下の倚架に腰を下した。

いろいろの人が同じ倚架に腰をかけて又立つて行つた。私は一人何時迄も動かなかつた。洗ひ晒しの浴衣に兵帯を緊めて、黄色く成つた麥稈帽を被つたまゝ、此處にかうして居る自分の姿が自分ながら眺められた。此先如何しようと思ふ家もない。只今日一日生きるために生きて居る。自

分は文字通りの放浪者に成つたのぢやなからうか。

あの女——あの女ともあれ限りに成つた。かうして此儘をはるのが物の順當であらう。少くとも無事だ。それにしても、長い夢を見たのだ。あの女を知つてから、今日迄あれだけ人騒がせもしながら、あれが悉皆私の夢なのか、自分一人で行つて居た幻景だと云ふのか——私はそんな男なのか。

私は何とも云はれぬ屈辱をおぼえた。左様に思ふ中から、左様思ひ切つて仕舞ふのが苦しさに又思ひ返した。あるが儘の女を戀ふるのは、男の戀ぢやない。男の戀は斯く有らせたいと思ふ、其女を戀ふるのだ。矢張自分の描いた幻影を戀ふるのだ。それが男の戀だ。男の戀の權威である。

こんな言草を想ひ着いた時、私はそれが動かすべからざる真理でもある様に思つて、何時迄もそれを思ひつづけた。

「おい、何が面白いんだい。」
斯う云つて私の肩を打つた者がある。私は思はず眼を上げると、其處に一人洋服を着た若い男が立つて居たが、
「久しく逢はないやうだね。」

「あゝ、小早川か。しばらく」と、私も相手の顔を見上げながら云つた。此露天に酒でも飲んだのであらう、髪を長く生ばして、華美な衿飾をつけた細面の顔を眞赤にして居る。
「何方へ」と、つい其嬉しさうな容子に釣られて訊ねた。

「一寸病人を見舞ひに来て、その歸途なの。」
「病人? 誰かわるいのか。」

「いや、何」と云つたまゝ、小早川は額に垂れ下る髪の毛を煩さうに搔上げて居た。私も強ひて訊かなかつた。

「あゝ左様だ。君に逢つたら訊いて呉れと頼まれて居たんだが、小説を一つ書かないか、日出新聞に。」

「今、何か出て居るんぢやないか。」

「あれは最う直き濟むさうだ。」

「左様さな」と云つて、少時口籠つて居たが、「どうせ何か書かなきゃ居られないんだけれども、實際何も書くことがないもんな。」

「ふむ」と云つたまゝ、小早川も左様ぢやなからうとは云はなかつた。

「僕の小説も最う濟んだよ。」

かうひとり言の様に云つて、自分一人の意味に解釋しながら、私は静手と考へ込んで仕舞

つた。

「あゝ、今直に行くよ」と、不意に頭の上で小早川が大きな聲を出した。

其聲をしるべに眼を移すと、松本樓の軒から、緑の葉がぐれに、二三人組の友禪を着た雛妓らしいのが此方を覗いて、小手招きをして居た。あのおとなしい男が何日の間にこんな事をする様に成つたらう。

「何でも構はず書いたら可いぢやないか。そんな時に却て好い物が出来るかも知れんよ」と云ひ云ひ小早川は立上つた。

「兎に角書く氣がないでもない」と、僕から云つておくことにしようね。」

「左様さな」と云ひながら、未だ心が極まらなかつた。

「ぢや、今日は失禮するよ」と、一寸私の顔を見て悪い顔をしながらかうへ走つて行つた。

私は又正面へ向直つたが、不圖噴泉の水が出て居ないのに氣がついた。今迄それに氣が附かなかつたものか、青銅の鶴も臺石も干上つて、池の水はどんよりと濁んで居た。日盛りの炎熱に藤棚の葉も凋れて、四邊に人も見えぬ。私は俄に淋しく成つた。

最う歸らう——矢張歸る外はない。

かう思つて立上つたが、足許がよろ／＼して、それを踏み應へると、急に眼が眩むやうに思つた。又／＼と歩き出した。

あゝ、俺の小説もはつた。

私は又其言葉又想ひ出した。おれの一生のロマン스는終つた。明日から自分を待つものは無味な、極めてプロゼイックな長たらしい月日に外ならぬ。而も自分には甘い思ひ出すらしい。すべてが悪い夢であつた。あの女自身も私の夢であつた。只、あの女の顔——あの顔だけは夢ぢやない。如何してもロマンズの女主人公の持つ顔だ。ロマンズの中の女でなけりや、あんな顔は持つて居らぬ。あの顔だけは生きて居る。あの顔だけは忘れられぬ——あゝ、是非がない。私の息のある限り、あの女は私を支配しなければ済むまい。

あの女の顔——私はいつそ『顔』と云ふ題で小説を書いて見ようかと思つた。

明くる朝、私は俳人で小説家で、日出新聞の文藝欄主任といふ人の訪問を受けた。昨夜小早川君からの手紙に接したが、次の小説を是非書いて貰ひたい、日限は二週間後に迫つて居ると云ふ話であつた。

「さ、書きたいには書きたいのですが、私

の言葉は濁つた。

「餘り急いでお氣の毒ですが、なに書きかけへすりや、書けますよ」と至極無造作に云はれた。

それを聞くと、私は長命寺の櫻餅といふ話を想ひ出さずに居られなかつた。或時此人が小説を讀せ始めたが、一向に未だ趣向が纏まつて居らぬ。で、主人公を向島へ散歩に遣つたまゝ、九日の間櫻餅を食はせて置いたといふ話である。

「私も好く腹案もないのに書出すことも有るんですが、其間には如何か成りますよ。」

「いえ、一つ書かうと思ふことも有るには有りますが。」

「それを如何です。」

「何だかそれが——幾許書いても書き盡されぬ様でもあるし、又一日か二日書けば、直ぐお仕舞になるやうな氣もするので。」

「はゝゝ」と、其人は象の様な鼻の上に小皺を寄せて笑つた。

兎に角、私も如何にかして書くつもりに成つて送り出した。御堂の青い疊の上に新しい絹の羽織がいかに涼しうに見えた。

私は机の前へ引回すと、俄に氣が苛々して來

た。あの女の顔——すべてが消え去つた中に、あの顔だけ残つた。何方を向いても可厭な思ひ出の中に、只一つあの顔だけが私の瞳子の底に燒着けられたやうに残つた。これが私の今の實感ぢやないか。其實感を後から藝術化して行く——何といふ變則な生活であらう。

それにつれて、時々聞くともなく聞いたあの女の名も思合はされた。三松學舎へ老子の講義を聴きに行つたと云ふ噂も傳はつた。麻布とやらの傳堂へ座禪に通ふとも聞いた。殊に三松學舎では、あの女と知つた外の生徒が黒板にいたづら書きをしたのを、あの女は黙つて立つて行つて、それを拭き消したまゝ、二たび座に着いたと云ふやうな噂もあつた。それさへ逸話と云ふものに興味をもたぬ私には、たゞ可厭に思はれた。

三日の間、いろ／＼思ひ悩んだ擧句、如何しても出来さうもないので、二たび斷りを云つて止めることにした。私はさま／＼陳謝の辭を列ねた。

恰度其手紙を出した日の夕方であつた。私は神樂坂の下から電車に乗つた。車掌臺に飛乗つたまゝ、車臺の中を覗くと、不圖、思はぬものが眼にとまつた。

あの女だ。何うもあの女らしい。着て居る浴衣の模様にも、セルの袴の細目にも見覚えはないが、夏瘡の様に頬こそけたたれ、あの子供染みた髪結び様と云ひ、あの女の横顔に違ひない。

私は俄に胸の動悸が打つて、眞鍮の棒に掴まつたまゝ、たじ／＼と眼が眩んで行く様におぼえた。

線路の交叉點で、がた／＼と車臺が揺れると、其機みに乗客の頭が皆動いた。あの女は不圖此方に向いたが、私の居るのには氣も附かぬらしい。其儘俯向いて膝の上に載せた友禪模様の風呂敷包みの端をいぢつて居た。

如何せう、如何して呉れよう。

そんな心持が私の胸の中に渦卷いた。未だ如何しようとも心が定まらぬ間に、電車は水道橋の停留所へ着いた。此處であの女は白山行に乗替へるのだと思つたから、一足先に私は電車を降りた。そして、道の真中に突立つたまゝ、後から降りる人々を見守つて居た。

やがてあの女の顔も見えた。車掌に切符を渡して、足許に氣を附けながら踏臺を離れたが、仰向く拍子に私の姿を見附けた。見る／＼顔の色が暗く成つた。屹と唇を噛んだまゝ、私を

目覚めて眞直に近づいた。そして突然、「何處かへ行きませう。え、何處かへ行つて好く話をしませう。」

又例の負け嫌ひがと、少時女の額を見下して居たが、

「えゝ、行きませう」と云つて、直に足を轉じた。

私は先に立つて水道橋を渡つた。女も直ぐ後から跟いて來た。日はもう高臺の町の屋根に隠れて、夏の夕べの長い餘光のつゞく頃ほひであつた。擦れ違ふ人の足どりも忙しかつた。私はとゞろく胸の中から、不圖、初めてこの女に逢つた目のことを想ひ出した。夏と冬との違ひはあれ、時刻も恰度今時分なら、場所も矢張此處だつた。かうして私の後から跟いて來た女は、不意に私を呼び留めて、

「何處かへ行きませう。此儘自宅へは歸りたくない」と、あの時も矢張左様云つた。それでも、私は女を伴れて他人の家の屋根の下に這入るのが疚しさに、

『それぢや、空に星のかゞやく下へ』と逃れるやうなことを云つた。そして二人で上野の森へ行つた。森の下蔭で、

『如何かして呉れ、如何かして仕舞つて呉れ』

と、身體を擦附けられながら、私は如何する事も出来なかつた。私はあの女の熱湯の様な涙を人の世のものではない様に思つた。小説の中の女が脱け出して来て物を云ふ様に思つた。そして、長いく幻影を描いた——此女の上に。何んなこにも成らば成れ、俺も二たび彼の様な眞似はせぬ。

私は急に自分以外の役に扮した役者のやうな、不自然な力と學東なきとおぼえた。

三叉に成つた街の角に立つて、一寸思索して見たが、半町程先に赤煉瓦の塀をめぐらした三層樓の旅館に目を留めて、

「彼の家が好いでせう」と、顎でしゃくつた。

「何方でも」と、女は軽く頭を下げた。

私は其口元に微かな反語の影が泛んだ様に思つたが、其儘思ひ切つて旅館の軒をくつた。

帳場に居た丸顔の主婦さんは、二人の異様な容子に目を留めて、じろくくとして居たが、やがて、

「何卒お上り下さいませ」と聲を掛けた。

暗い廊下を通じて、奥まつた一室へ案内された。二人は、いろく持運ぶ女中には目も呉れず、座敷の片隅へ寄つて、互に面を見合せたま

ま坐つた。二人ながら何とも言ひぬ。「あの、お風呂をお召しに成りますか」と、女中は私の背後に手を突いて訊ねた。

私は一寸振回つたが、

「いや、這入らない」と云つた限り、又向直つた。

女中も其儘引下つた。

私は二たび目の前に女を見据ゑた——顔面筋

肉の表情の一點一劃をも見逃さじとばかりに見据ゑた。女は思ひの外に驚れて居た。夏場薄着

の所爲でもあらうが、目頃から人並外れた撫肩

が、一際ほつそりとして、何處やら力なげに見え

た。只、何時見ても、下腮だけは二重に括れて

初々しい。

あゝ、私は何れだけ此顔に飢ゑて居たらう。

だんく見て居る間に、私の心は淡雪が土の中

へ沁み込むやうに溶けた。私の眼には露が宿つ

た。今度逢つたら、何時何處で逢つても、何よ

りも先づ第一番に、

「未だ死なないのか、何時死ぬんだい」と云つて

遣らうと思つた。唯今迄も左様思つて居た。

何過も心の中で繰回して居た。それも最う口へ

は出ない。

餘り口を利かぬので、女の方から微かに唇

を開いた。

「如何爲さいまして、え？」と、此女の癖として少し首を右へ傾げた。

其聲を聞くと、私は又俄に胸が早鐘を撞くやうに躍つた。何か言はうとしても、物を言つた

ら聲が顔へて悟られようかとなほ并黙つて居る

と、女はずつと身體を延して、男の膝の上に顔

を伏せようとしたが、間が隔つて居て肩かな

い。それでも、私は堅く腕組をしたまゝ、手を

併すことも爲し得なかつた。

女はやがて起直つたまゝ、冷笑を含んだ眼元

に、凝乎と私の容子を眺めて居たが、つと膝を

ずらして側へ寄つて來た。

な、何を爲る氣だらう。

私が何も爲し得ないのを見て、海山に功を積

んだ手だれ女の態度を學ばうとするのか。今に

見よ、如何するものかと云ふやうな心持がむら

むらと起つた。

そこへ、西洋風に成つた入口の扉を開けて、女

中が膳部を運んで來た。

「貴方は夕飯を上げるか。」

女は只頭振を掉つた。

「ぢや、最些つと後にするから、其處に左様し

て置いて下さい」と云つたが、二たび「おい、お

い」と喚び戻して、

「何で可いから、酒の燭をして持つて来て呉れ。」

女中は畏まつて退いた。

私は手酌でつゞけ様に酒をあふつた。此家の器は、建物の見かけが立派なのにも似合はず、能代塗の下等なもので、酒も悪かつた。つんと頭へ來さうなのを、我慢して、又盃をかきねた。初めから女には俯めようとしなかつたが、女も見かねたのか、不器用な手附で酌をしようとした。

私は一寸其顔を見返したが、

「ぢや、最う止めませう。」

かう云つて、盃を下に置いた。口の中がえがらいうで心持が悪い。

何時の間にか、大粒の雨がぼつり／＼降つて居た。明放した窓と、隣の土蔵との間が三尺にも足らぬので、土窖の中にでも居るやうに蒸暑い。そこへ、次の間から音も立てずに兩戸を繰つて來た、盲目織の長半纏を着た宿の若者らしいのが小腰を屈めて、

「御免下さい。えゝ、驟雨が來さうですから、一寸戸を閉めさせて頂きますと云つたまゝ、又次から次へ兩戸を押して行つた。悉皆閉め終つた頃には、最う土沙降りに成つて、樋をつたふ

雨の音がやかましく聞えた。室の中は人香が籠つたやうで、一しほ息苦しい。

「最う何時でせう」と、女はうつとりとしたやうな顔をして云つた。

「おい、最う何時頃だい」と、私は更に膳を下げに來た女中に訊いた。

「へえ」と、女中は二たび膳を下に置いて、「今し方十時を打ちました。」

「あゝな様か。」

女は女中が扉を閉めて廊下へ出たのを見ると、何やら急に落着かぬ素振に成つた。

「私最う自宅へは歸れない。」

私は黙つて女の容子を見て居た。

「本當に最う歸れない」と云つて、不圖、私の容子に氣が附いたのか、下から顔を覗き込むやうにしたが、「私、今日から貴方の寺へ押掛け行つても宜う御座いますか。」

「來る氣が有つたら、被入しやいな。」

「何も致しませんよ。」

「何も爲なくつても宜う御座んす。」

「併し、あれぢや可厭だ。外の事を要求なすつぢや——唯、一緒に棲むだけ。」

私は何を云ふのかと思つた。

「此頃、大禪寺へは行かないんですか。寺で寝

て居るのなら、彼處でも可いんでせう。」

「えゝ、彼處の坊主が仕様のない坊主ですから——焼餅なぞ焼いて。」

「坊さんが焼餅を焼く。可笑しいんですね。」

「そりや坊主だつて——それに少し譯が有るんですから。」

私は何事かと胸を躍らせた。

女は私の容子を尻目に掛けたまゝ、得意らしい笑ひを口の邊りへ漂はせて居たが、急に眞顔に成つて、

「禪の方でも、これは祕密に成つて居て、滅多に他人に云つちや不可いんですが——大分進んだ所に婆焼庵と云ふ公案がある。」

「公案とは」と、私は口を入れた。

「えゝ、左様云ふものが老師から出るんです。老婆庵を焼くと言ふんですが、其解答を用意して入室した時、老師の前で——」

虚誕だ！何を云ふのかと思ひながら、其中から私は堪らないやうな可厭な心持がした。

「それで、そんな事が有つてから、彼處の坊主が私のことを何とか思つて居る様なんです」と、女も早口に言葉を次いだ。「現に『煤煙』が出てから、あんな事が實際あつたかなつて、長い手紙を寄越すんですが、それが全く別の意味な

んですから。」

私は返辭をすることも忘れた。

何の爲にこんな事を云ふのだらう。一時の座興か、それともあの女に繋がる私の執着を根柢から覆さうための佯話か。いづれにしても興の醒めたことには違ひない。

室の中は彌々むむとして、じと／＼と肌汗が滲んだ。そこへ足長の蚊が来てへばり着く。女も額に汗掻いて、ぼつと上氣した。

「最う私共も臥りますから、お床を」と、女中が這入つて来た。

「そんなに晩いのか」と私も今更今日の成行を思つたが、直に如何成るものかと思ひ返した。

「如何しませう。自宅へ電報でも打つて置きませうか」と、女は又急におど／＼して来た。

私にはそれが憐れに見えた。

「それが可いでせう」と云つて、女中に吩咐けて電報用紙を持つて來させた。此方の居場は省いたが、女の言ふ通りに文句を認めて、二たび車夫に持たせて電信局まで遣つた。

「寢ませう。左様して居ても仕方がない。」

かう云つて、私は蚊帳の中へ這入つた。

恰度一時間許りしてから、宿の大戸をどんと敲く者がある。四邊が寢鎮まつて居るだけ

に、それが手に取る様に聞える。

女は急に半身を起した。

「お宅から」と、私も聲を弄んだ。

やがて、廊下を走る女中の足音がして、前に遣つた帳場の車夫が戻つて來たものと分つた。

私は寢苦しい一夜を明かした。朝、目を覺ますと、敷蒲團は寢汗に冷々として、身體は細の様に疲れて居た。

未だ薄明りの間から、女は起上つた。私もつづいて顔を洗ひに立つた。洗面所には早起きの客が二三人居たが、どうも客子が日本人らしくない。間の延びた顔をして、じろ／＼二人を眺めて居る。やがて頭を洗つて仕舞ふと、皆こそそと二階へ上つて行つた。

あゝ支那人の下宿！二人は支那人の下宿に泊つて居たのか。

左様云へば、昨宵からどうも變だなと思つたことが、一々點頭かれる様でもあつた。何たか、其邊の柱や壁迄が薄汚れて居るやうにも思はれ出したが、それも思ひ返せば、昨夜といふ一夜の宿には應はしいかも知れぬ。

そこ／＼に含嗽をしたまゝ、座敷へ引回した。女は先へ戻つて、鏡臺の前に寢亂れ髪を直して居たが、

「彼處に居たのは、皆な支那人の様ですね」と云つても、わざと右に左に櫛を持扱つたまゝ、振回らうともしなかつた。

私も窓の國に腰を掛けたまゝ、黙つてそれを見て居た。これから二人の身の處置を如何したものであらう。決心次第で、直にも此處を立たなければ成らぬと思ひながら、これからの事よりも、昨夜の一夜が心に懸つた。

女は頸筋から胸へかけて、思つたよりも捲せて居た。

何だかぐつたりして、骨の折れるやうなとは考へたくない。

其間、女は指先で生毛の様な額の後れ毛を直したまゝ、鏡臺を片寄せて、眞面に顔を見合せた。何か云つたらしいが、能く分らぬ。

途端に女中が顔を出して、

「あの、此方様へ訪ねてお出に成つた方が」と、二葉の名刺を出した。

「え、私の所へ？」と云つたまゝ、私の顔色はさつと變つた。

「玄關に待つてお出ですが、此方へお通し申しまして。」

名刺の主はそれでも神戸と最一人の知人であつた。昨夜から二人の跡をたづね廻つて、やつ

と突留めたと云ふことである。何でも女の宅へ出した電報から足が附いて、郵便局で訊くと、直に此處だと知れたさうな。私は餘りのだらしないに身の置場もないやうな心持がした。他人事の様に啞く口を結んだまゝ、女は只側の者のするが儘に成つて居た。間もなく胸車に乗せて連れられて行つた。少時して、私も一人こそぐと其宿を出た。

十

あの朝、あの様にして別れた限り、あの女との消息はふつと絶えた。偶あ女が自宅へ戻つてから、私のことを黒様に罵つて、無理にあらん所へ連れて行かれたとやら、如何されたとやら云つて居るとは聞いた。あの女が正可そんな事も云ふまいとは思つた。又あの女だからそんな事位言ひかねないとも思つた。何れにしても、私にはそんな事は如何でも可い。私は只あの女に逢ひたかつた。あの女の代りにと思つて『煤煙』を書いたのだが、一度あの女に逢つてからは、そんな小説など見かへる氣もない。自分の描いた女では、自分を満足させることは出来ない。縱令何んな女でも——何んな背景のない女であつたにしても、矢張あの女の側に居

たい。過去のことなどは如何でも構はぬ。最うあの女の心を動かさうとも思はぬから、強ひて物を言はんでも可い。物は言はんでも、只あの女の顔を見てさへ居りや可い。逢ひたいと思ふ時、自由に逢ふことが出来さへすりや、其上の望みはない。私はそれで澤山だ。其日が来るのを、かうして氣長に何日迄も待つて居る——何日迄も。

あの女を思ふ日はつゞいても、あの女が如何して居るかも知らない。何をして、何を考へて居るやら、皆目分らない。私は暗がりを手探りで歩くやうな、遺瀾のない思ひがした。こんな思ひが募つては、ふら／＼と寺を飛出して見ても、さて、何處へ行くといふ宛もない。一足づつあの女の棲家に近づいて、夕方の暗まぎれにぐるりと垣根の外を一周りして來ることもあつた。自分ながら、昔の人情本の中にでもありさうな、意氣地のない今様ぐうたら男の身の上も思ひ合はされて、流石に後目た。秋へかけて、しと／＼と長雨がつづいた、日に日に單衣の肌ざりがうすら寒う成つて行く。私も外出を止めて、机の前に坐つたまゝ、雨に濡れた石塔を見て暮した。石塔は圓いのも、角なもの、五輪の形をしたのもあつた。此間か

ら墓地の移轉が始まつて、片端から掘崩して何處かへ引いて行つたが、それも止んだ。其跡を地均して、二階建の長屋が建つと云ふことであつた。それが雨のために拂取らなかつたのを、やつと雨合を見て、土嚢を据ゑて細い柱を立てた。明るく日は最う屋根根が來て、木羽板で屋根を葺き始めた。壁下地に取かゝるのもあつた。

私は所在なきに、毎日窓からそれを見て居た。こんなにして、此窓の前に長屋が建つ様になつたら、今に此部屋を見捨てる外はない。其上又見知らぬ家族の中へ這入つて行くのも可厭だし、そしたら、寧ろ——私は不圖故國へ歸つてみたいと云ふやうな心が泛んだ。何處へ行く所がないとしたら、人間は矢張居れた國へかへる外はない。すべて傷いた者、敗れた者の歸つて行く故里へ——が左様思ふ下から、自分自身を裏切るやうな、冷やかな笑ひが泛んだ。私は二たび隅江を見ては成らぬ。

矢張東京に居るんだ。東京に居たとて、別段當事もないが、切めてあの女の住んで居る所に居るのだと思へば、縱令顔は見いでも、聲は聞かないでも、いさ／＼かの思ひ遣りに成らぬこともない。あの女と同じ土地に、同じ呼吸をして、

あの女も歳を取るのだ——私も歳を取つて行く。あの女が生きて居る間は、私も生きて居なければ成らぬ。

それからそれへ、斯んなことを想ひつゞけては、氣勞れに勞れて、其儘うとく寝入ることもあつた。此日も、疊の上に肘枕をしたまゝ、思はず轉寢をしたと見えて、眼を覺ました時には、朝から降りつゞいた雨の脚も響つて居た。私は起上つて、床裡の流元へ顔を洗ひに下りた。

何やら戸口で案内を乞ふ聲がする。誰も出て行かぬと見えて、先刻から幾度も繰回して喚んで居る。何うもそれが女の聲らしい。

私は歸りしなに茶の間を覗いて見たが、鐵瓶の湯が吹いて居るのに、誰も居ない。裏へでも出て居るかと、縁側に立つて見廻したが、其邊に姿も見えぬ。で、止むを得ず、引回して、自分へ上櫃へ出て見た。

この小寒いののに浴衣を着て、乳呑兒を十文字に背負つた女が、片手にびし濡れの蝙蝠傘を下げて、格子戸の中に立つて居たが、私の顔を見ると突然お叩頭を二つ三つした。

「何か御用ですか」と、私は立つたまゝ云つた。

「へえ、あの此方が正定院様で？」
「左様です。」

「あの、一寸伺ひますが」と帶の間からよれく成つた紙片を取出して、「私は斯う云ふ者を尋ねて参りましたが、角の薪屋さんで訊きますと、四十三番地は此方一軒だと云ふことで——」

私は其紙片を手に取つて見た。成程、築土八幡町四十三番地大工職丹羽辰五郎とある。

「これは番地が間違つて居るやうなことで有りませんか、私も能くは知らないんだが。」

「へえ」と、女は當惑さうな顔をしたが、「で、若しや此方何つたら分るかと思ひまして。」

「左様ですねえ、住職でも居たら分るかも知れんが、何しろ此寺の中にや左様云ふ人は居ないやうですよ。」

「へえ」と、いよゝ泣出しさうな顔に成つた。其顔が如何にもあどけない。背中に子供を負つては居るものの、母親自身未だほんの子供の様にも見えた。

「如何したら可いので御座いますせうね。」

「さ」と、私はそつと脾弱さうな子供の寝顔から眼を離して、「交番で訊いて見たのですか、交番で訊けば先の人が此邊に居さへすりや大抵分るでせう。」

「左様ですか、何うも有難う御座いました」と、女は丁寧な頭を下げて、やがてすゞと出て

行つた。門迄行くと、關の上に子供を下して、二たび背負ひ直して居るやうであつた。

私はそれを見送つたまゝ部屋に引回した。何と云ふこともなく、隅江があんなにして自分を尋ねて來たらと云ふやうなことが思はれた。他人の子を生んで、内懷をはだけながら、乳房を銜ませて居る所なども、まさしくと眼に見えた。

その日は鵝頭酒を被つて寝て仕舞つた。

何時の間にやら、私は酒に親しむ癖がついた。

『煤煙』を書いて居た頃、夜遅く迄書き續けて眼が冴えて眠られさうもない時、冷酒をあふつて床に入りくしたのが癖に成つたのであらう。

近頃は庫裡の板の間に酒樽を据ゑて置いて、呑口からたゞと湯呑に注いで来て、それをぐいぐい飲りながら筆を握ることもあつた。

一度出盡つた『煤煙』も、本屋の番頭が此儘にするのは餘り残念だから一冊宛分本にして出して見たいと云ふのに、うかと乗せられて、私もつゝ其氣に成つた。その校正やら、氣に入らぬ所を直すやらで、年の暮は忙しく終つた。明けの春、第一巻が市上に出たが、案じた程の事もなく濟んだ。第二巻は二月の半ばに出した。それだけならば何事もなかつたものを、本屋が故意に出版局を後らしたとかで、名義人

として、私は法廷へ喚出された。此小説の世に出るためには、おそかれ早かれ、いづれ不祥な事が起らねば止むまいと思ひながら、事が事なので、それが爲に作物までも滑稽化されたやうな心持もして、忌々しさの遣場もない。

それでも、生れて初めての場へ出ると云ふことに、一種の好奇心がないでもなかつた。私の前には、請負師らしい、でつぷり肥つた男が、抵當物件の騙取か何かで裁判長の訊問を受けながら、分り切つた罪跡を晦まさうとして、つべこべ述べ立てて居た。それを煩いと思つて聞きながら、傍聴席に控へて居ると、間もなく喚ばれて棲木の前に立つた。取調べは三分間許りで済んだ。

私は法廷を出て、待たせて置いた腕車に乗らうとしたが、何うも此儘歸る氣にも成れないで、車夫だけかへして、一人日比谷公園の門を這入つた。少時木立の中をくぐつて歩いたが、噴井の池の畔へ出ると、急に思ひ附いて松本樓の二階へ上つた。片隅の卓に腰を下して頬杖をついたまゝ、眼を瞑つた。

何うせこんな事が落ちだらう。

私はせゝら笑ひたいやうな心持に成つた。自分も他人も笑つて仕舞ひたいやうな——その

下から、ずん／＼地の底へ落ちて行くやうな氣もした、木の根に絶つた指の力が脱けて行くやうな。

生麥酒の大盃が行列をつくる頃、私の顔もほてつて来た。夕日の射す窓から噴井の飛沫を見下しながら、何日ぞや小早川が雛妓を伴れて居るのに此處で出逢つたことを想出した。あの後、小早川と雛妓とは噂の種にも成つた。あゝ、して酔はれるものなら、自分も二たび酔つて見たい。

私は椅子の背に凭れたまゝ、昔知つた女の冷たい髪の毛を心に描いて居た。

やがて、つと立上つて電話室へ這入つた。手早く電話帳を繰つて、下谷の一九一三番へ繋いで、女中頭のお直と云ふのを喚んで貰つた。間もなく聞き覚えのある聲がして、

「何誰? 何方様やらでしたのね」と、案内生眞面目な訊ね様である。

それに鼻を擧がれて、其儘切つて仕舞はうかとも思つたが、又思ひ直して、
「高砂屋の千香は未だ居るのかい」と訊いて見た。

「千香さん——居ますよ。」

「何だぜ、二三年前に出て居たのだぜ。」

「ちや、前の千香さんだ。あの女は去年の暮に廢業しましたよ。」

半ば待設けたことながら、私は間の悪い思ひをして一寸返辭にもまごつた。

少時すると、又お直の聲がして、
「貴方、失禮ですけれども、何誰やらでしたのね」と訊く。

「随分薄情だね。」

「あら——だつて電話ぢや分りませんわ。ね、ですから是非被人して頂戴な。千香さんが居ないたつて、そんなにお見限りなさるものぢやありませんよ。」

「左様なら」と、電話を切らうとした。

「ね、お待ち申して居りますよ、屹度ですよ」と

云ふ聲が、未だ聞えて居た。

元の座へ戻つて腰を下すと一緒に、何とも云はれぬ可厭な心持がした。何と思つてあんな眞似をしたらうと思つても、最う追附かない。

左様思ふと、此儘にするのが一層不問な様な氣もした。で、何がなし追かけられるやうな心持で其家を出た。電車道に沿うて、銀座の方へ歩いて行つたが、何處へ行かうと云ふ當もない。

小早川は如何して居るだらう。急に逢つて見たやうな氣がした。いつそ今夜はあの男を喚出

して、あの男一流の雛妓を相手に飯事でもするやうな遊び方でも見て居ようかと思つた。私は最う何處へ行つても傍觀者の側に立つ外はない。

一時間後には、池の中の旗亭の一間に胡坐を置いて居た。障子の腰硝子を透して、黝黒い池の水を眺めては時々想出したやうに盃を上げた。此家へ着くと、私は直に手紙を持たせて小早川を迎ひに遣つた。それと一緒に、大抵當りをつけた雛妓を名指して三人計り掛けて置いた。その一人は間もなく遣つて来た。お客の顔馴染がないので、一寸繼穂がなささうであつたが、女中の側へ寄つて行つて、何やら耳こすりをした。

「左様ねえと、女中は私の顔を見て笑つて居る。」

「百合ちゃんも来るの」と、今度は甘えたやうな聲を出して、人並外れた猪頭を傾げた。

「誰も來ないさ、お前一人を喚んだのよ。」

「左様、嬉しいわねえ」と、銚子を取上げて、「お酌！」

私はその人を呑んだやうな言草を聞くと、つい返辭も出さねた。

早く小早川が遣つて来て呉れたらと、心の中

に念じた。やつと使の車夫が戻つて来たところへ、小早川は三時頃に宿を出たまゝ未だ歸らない。此頃は好く晩におそく成るから、お歸りの程も分らないと云ふ口上である。私は思はず舌打をした。

「何方か被入しやられないの」と、側から猪頭が口を出した。

「うむ」と云つたが、又氣を更へて、「此頃小早川は相變らず遣つて来るかい。」

えい、被入してよ。あの、そら、あの方でせう。一昨日——昨々日の晩も御日にかゝつたわ。」

「今夜邊り如何だらうね。何處かへ来て居ないかしら。」

「あ、屹度被入してよ。電話で訊いて見ませうか。」

「うむ」と、私は笑つて點頭いた。直に駈出さうとした時、廊下で若い女の聲がした。

「あら、百合ちゃんだ」と、其儘駈出して、一人でべちやくちやと喋舌つて居たが、「そんな事云つても、私知らないわ」と、鼻へかゝつたやうな聲も聞えた。

三人とも揃つて這入つて来た。一番後から來

た柄の小さいのが、私の顔を見て、何やらうそと笑つて居たが、突然、

「しばらく」と云つた。

「私を知つて居るのかい。」

「知つて居てよ。何日か日比谷公園でお目にかつたわ。」

「能く記憶えて居るね。」

「え、感心ですよ。」

私は不圖此子の可愛らしい味嚼齒に目を留めた。一張羅の女禪に帯を矢の字に結んで、頭から上は水の滴るやうな化粧をして居るものの、兩手に赤く凍瘡の出来て居るのも惻々しい。かうしてむくつた男が来て蹂躪するのを待つて居るのだと思ふと、何やら雛妓を繪の様にして眺めて居る小早川の心持も解つたやうな氣がした。件しいよく小早川が來ぬとすれば、如何したら可からう。相手と同じ水準に下つて洒落を云つたり、役者の噺をしたりするのが面倒としたら、どうも手持無沙汰で成らぬ。色氣附いたのが、わざと邪氣ないやうな物の言樣をするのも煩かつた。

「誰か一人掛けませうか、雛妓さんばかりぢや詰りませんわ。」

女中がかう云ふにつれて、直ぐ「それぢや」

と云つて頼んだ。何事も女中任せにした。二三人電話を掛けて、最後に一人やつと来ることに成った。

其間に小早川が造つて来るかと心待ちに待ったが、矢張来ない。私は火桶を抱へたまゝ、ちびり／＼盃を襲ねた。やがて音のせぬやうに襖を開けて、一人の妓が半身をあらはした。

「姐さん、お先きへ」と云つて、ばた／＼と座を譲つたが、雛妓どもとは一人も顔馴染がないらしい。

「雛助さん、お盃」と、女中が取次いだ。

「有難うと受けたまゝ、妙に俯向き加減にして顔を上げない。

私は這入つて来た時から、此女の顔が氣に成つた。折々盗む様にして、凝乎と其横顔に見入つた。稍面長の顔で顎が二重に括れて居る。只髪は、迄濃い。それが爲に、何處か下卑て見える。矢張自分から似させようと思つて居るんだと思ひ返した。

三味線を下に置くのを見て、私は女の前へ火桶を押して遣つた。

「夜が深けた所爲か、寒いね。」

「冷えますこと」と、女は其側へ寄添ふやうにして、兩手の指を拵合せながら疊の上を見詰め

て居た。何處か人擦れたやうな所も見えるが、又何處か含羞んで居るらしい様子もあつた。二三言三言談話をした。ふる／＼と聲帯が斷ち切れさうな細い聲を出して、物を言ふたび蟲齒の沁むやうに息を吸ふ癖があつた。私にはそれもある女を想出させる種子であつた。

其間、雛妓どもは勝手な事をして遊んで居たが、好い加減にして切上げることにした。がやがやと立上つて、銘々迎ひに來た腕車に乗つてかへつた。私は一足後れて出た。

戸外の冷たい風に吹かれて、ふら／＼と反橋の上迄來かゝつた時、背後から棲をとつて駈けて來た女が、

「御一緒に参りませう」と云つて、びたりと寄添ふやうにした。

冬の夜の深更として全く人通りがない。向側の待合でも戸を閉めたのか、毎もの書割のやうな二階の灯も見えぬ。私は池のまはりを駆けながら大踏に歩いて行つた。自分ぢや酔はない積りで居ても、書間からの飲みつゞけで大分脚元が怪しい。一寸した土塊に躓いて、意氣地もなく膝を突いた。

「あ、危い」と、女は聲を上げて駈け寄つた。

「まあ速いこと」と、手を貸して扶け起しなが

ら、「私や又急いだもんだから、こら、こんなに動悸がして、せい／＼息をはずませながら立つて居る。私は夜目にも女の白い呼吸を見るやうに思つた。

「ね、私の行く所へ行かないか」と云つて見た。何となく左様云はなきや成らぬやうな氣がした。

「えゝ」と云つて、少時言葉途切らしたが、小さい聲で、「お見送り申しませう。」

何だ、伴聲をしてと思つたが、其儘何とも云はずに歩き出した。雪見橋を渡つて仲町へ出ると、未だちらほら往來の人の影も見えた。私は、不圖何をするのかと思つた。暗がりの街を女の手を引いて歩く――あの女に似た女の手を私は堪らないやうな氣持に成つた。

「一寸用事を想出したかい、今夜は歸るよ」と言出した。

「えゝ？ お歸りに成るの。」

「今夜は歸るんだ」と、四邊を見廻して車夫の提灯に眼を附けながら、「明日にも喚んだら來て呉れるだらうね。」

「何卒」と、女は頭を下げた。

私は直に腕車を喚んで乗つた。一二間駈出した時には、女は未だ其處に立つて居たが、二度目

にはばたくと駆けて行く後姿が見えた。

一里の夜道は、提灯の灯も水つて、膝掛の下ながら膝坊主が千切れる様に冷たかつた。

朝、目を覺まして、平常の寢床の中で寢て居るのだと氣が附いた時には何だか心強いやうな心持がした。其中から底に水が差して来るやうな寂しさもあつた。あゝ、常に——恆にと云ふことは、人間にはない。

一日ぶら／＼して居たが、夕方に成るのを待遠しいやうな氣がして、外出の用意をした。何をしに行く。

電車を降りて、少時清水堂邊りでぶら／＼しながら、軒洋燈のつく頃を見計つて、つと山樂の軒をくぐつた。家の中の普請をしたと見えて、前とは座敷の模様も變つて居た。私は着花を入れて来た女中を見回つて、

「お直さんが居たら、一寸來て貰つて呉れ」と頼んだ。

「えゝ、何でした」と、慌けた面を上げて、「お直さんを喚びますか。」

「あゝ」と云つたまゝ、脇息に凭れて足を抜出した。

やがてお直が段梯子を上つて來た。

「まあ」と、仰山に驚いたらしい顔をして口を

噤んだ。「本當に如何なすつたんで御座いますえ。」

「如何もしないさ。」

「それだつて——あ、左様だ、昨日電話を掛けて下すつたのは、貴方でしたらう。」

「あゝ、飛んだ事をしたね。」

「何ですよ。だつて、何うも聞いたやうな聲だと思つても、能く分らないし——左様ぢやありませんか。最う二年越しですよ。」

「左様かい。」

「時に、千香さんね」と、何やら聲を低めて、「あの女も可憐な事をしましたよ。」

「へえ、廢業したと云ふぢやないか。」

「そりや、引くには引きましたけれどね、自宅へ引いて、到頭肺病で死にましたの。」

「死んだ？」

私はぎくりとした。

「眞個弱い體質でしたからね。それに、矢張りんな商賣をして居ちや、如何してもね。」

「ぢや、何だね」と云つたが、何を云はうとしたのか、つい胴忘れして其先が出なかつた。固より其女ともさしたる譯があつたのぢやない。只肉と肉との關係である。それも錢で購はれた一通りのものに過ぎぬ。それにしても——私は

冷たい手で抱かれるやうな心持がした。

「本當に可憐なんですよ」と、お直は何氣なく言葉をつづけた。「お寺詣りでもしてお上げなさいな。」

「うむ、左様でもしようかね。兎に角新聞に迄唄はれた仲なんだから。」

「えゝ」とにや／＼笑つて居たが、何の事とも解らなかつたらしい。

「で、今夜は」と、急に眞顔をつくつて、

「誰か喚んで來ませうね。」

「さ。」

「何ですなえ、そんな陰氣な顔をして、一つ景氣をお附けなさいよ。」

そんな事を云はれると、いよ／＼尻込するのだが、それでも、「吉三樹の雛助と云ふなア、此家へ來るかい」と訊いて見た。

お直は一寸首を傾けたが、「此頃に出たんでせう。」

「左様らしいね。」

「ぢや、雛助さん掛けますか。」

「あゝ。」

一人置いてけ抛りにされて、酒盃を下に置いたまゝ、まじ／＼と松に日の出の床の懸軸を見て居ると、やがて「此方？」と云ふ聲が段梯子の

上でして、すうと襖が開いた。一寸顔を見合
せたが、

「昨晩は」と云つて、側へ寄つて来た。

女は昨宵よりも太り肉に見えた。

「此方は近頃奥様をなくして弱つて居るんだか
ら」と、後から鈍子の代りを持つて来て、お直が
こんな事を云つた。女はじろりと私の顔を見
た。

お直の降りて行つた後で、別に云ふこともな
いから、「未だ出て間がないんだつてね」と訊い
た。

「私？ えゝと點頭く。」

「何時披露目をしたの。」

「此正月。それ迄は仲ノ町に居ました。」

「ぢや、江戸前の藝者なんだね。」

「でも有りませんけど——それでもね、此處へ
來てからは随分苦勞しますのよ。」

「そんな事を云つても可いのかい。」

「如何して」と、女は急に顔を上げたが、「いえ、
そんなんぢや無い。決して左様云ふ譯ぢやあり
ませんが、只ね、彼方で餘り賣れないもんだか
ら、此方へ來た様に云はれるので——斯う云ふ
商賣と云ふものは可厭なものですよ。」

女の述懐は本當らしくも思はれた。

「其間、好い旦那でも目附けるさ。」

「左様ですね、精々氣を付けて捜しませうよ。」

かう云つたまゝ、初心さうに巻煙草の吹殻で

火鉢の灰を搔均らして居る。

一つは髪の方で違つて居る所爲でもあつた
らう。昨夜あれ程迄に似たと思つたものが、今
見ると左程でもない。何處か似てゐる所はない
かしらと思つても、如何見ても、矢張普通の藝
者である。私は騙されたやうな氣もした。

あの女が死んだとしたら——

私は不意にこんな事を想つた。此家で知つた
前の女は死んだ。兎に角に其暖かい息に觸れた
おぼえもある女が死んだ。斯うして私の知つた

女が一人宛おひくゝ死んで行つたとしたら——

そして、私一人後に取殘されたとしたら——

何時の間にやら、女は脇に垂れた私の手を執
つて、一本指を弄つて居た。私の注意を惹く

やうにそつと手の甲を撫でて見たりした。それ
に氣が附いてからも、私はわざと知らぬ顔をし

て其儘抱つて置いた。

「私、此方へ來て居ても、お稽古には毎日吉原
迄行つてますのよ」と、女は其手を離しながら

云つた。

「随分大儀な話だね。」

「えゝ、だつて、それ位のことは。それに親爺
が彼方に居るものですから。」

「何だい、親爺さんは。」

「親爺ですか」と、一寸此方を見たが、「吉原の
幫間。」

私は思はず其顔を見返した。幫間と云ふも
の、爲永春水の『柳屋』で讀んだ外には知らぬ
只、左様聞けば、此女がわざとらしい嬌聲を含ん
だ中にも、少しも思ひ上つた所のない、藝者らし
い張さへ持たぬ様に見えたのも、今更思ひ合は
される。

女は何氣なく語りつゝけた。

「あんな商賣をして居ながら、本當に變人です
よ。第一お入湯が嫌ひで、幾許押出すやうにし
ても、一箇月に一度位しきや入らない。」

「不思議だねえ、それが本當なら。」

「えゝ、眞個なの。」

こんな事から、お座敷ではペコ／＼頭を下げ
て居るだけ、家では又我儘で手に負へぬ、始終

氣六かしい顔をして、妻子にも小言の絶間がな
い、其爲家中の折合がわるく、阿母さんが度町

で二度目の様を執るやうに成つたんだと、そん

な事迄話して聞かせた。最後に、

「私、それでも阿母さんより阿父さんの方が好

い。」

いのよと云つた。

何の爲に此女がこんな話をしたのか、私に解らない。

其夜、一時近く、私は此家を出た。

「今度吉原のお師匠さんのお遊びが常盤華壇であるんですが、貴方も来て下さらない？」と、歸りに女が云つた。

「お前さんが出るのかい」と訊くと、

「え、お附合に詰らないものを。」

「何だい。云つて御覽なさいな。」

「本當に引立たなくつて、詰らないもの。賤機頭の船頭と、それから名取が五人揃つて、新しく手の附いたものを一つと。」

「賤機の船頭なら好いぢやないか、私も二三年前歌舞伎の藤間の淺ひで見たやうだ。」

「好う御座んしたでせうね。藤間さんのは土臺が舞臺跡ですから、私達のは云はゞ座敷跡で——只、お座敷ぢや矢張ね。」

「そんなものかい。」

「ですが、本當に被入して下さるの。」

「お邪魔に成るんでなけりや、見せて貰はうね。」

「ぢや、屹度、宜う御座んすか。」

「あゝ屹度。」

二人は言葉番へて別れた。

十一

朝晴れの日、私は手に持った鷺ペンを抛出して、疊の上に寝轉んだまゝ天井を見詰めて居た。廊下を小走りに来る女の足音がして、

「朝からお勞れ」と、梵妻の聲が聞えた。

思はずばかりと眼を開くと、

「まあ眼を覺ましてお坐んなさいな。好い物が参りましたよ」と、蓮葉な口の利方をして、手に持ったものを枕頭に置いた。

「何です」と云ひさま、起直つて見ると、小本に型どつた番組に花柳歌代として、扇子と手拭とが添へてある。

「へえ」と云つて手に取りながら、「誰が持つて來ました。」

「左様ですね。六十位の肥太つた婆さんに、てら／＼した坊主頭の男が随いて——二人とも身形はちゃんとして居ましたよ。お婆さんが白襟紋附なら、片方も仙臺平の袴を穿いて、そりやア流とした服裝でしたよ。」

「未だ居るんですか。」

「いえ、最う歸りました」と、梵妻は一寸間の悪さうにしながら、「只ね、此方に小鳥さんと仰有

る方が被さかといひ、此三品を差出して、何分御最良にと云つた限り、さつさと歸つて行きましたよ。門前に腕車が待つて居るやうでした。」

「ふむ」と云つたまゝ、私は番組を摘んで見た。奉書を二つ折にして、上り藤を桃色で摺込んだ上に、

一、種時三番叟 三番叟社中
長 暇 連 中

とあるのを手初めに、番組の次第が並べて書いてある。手習ひ子だの、潮波だのと順に練つて行くと末の方に、一、賤機帯として、其下に鑑助の名が出て居るのを見附けた。

「踊のお淺ひですか」と、側から覗き込むやうにして梵妻が云つた。「好う御座んすねえ、本當に綺麗ですから。」

梵妻はそれから自分が小さい時に琴のお淺ひに出た話を長々と始めた。何でも他人の持つて居るものを、自分も持つて居た様に云はなきや氣の濟まない質だと知つて居るので、只「ええ、ええ」と空返辭をしながら、やつと追返して、又餘念もなく其番組に見入つた。

私の所へこんな物を持つて來る筈はない。いづれ鑑助が寄越したものだと思ふが、それにしても——

兎に角、私は三種の物を地袋の上に置いた。赤や草色で縁取つた包紙を見て居ると、薄暗い室の中が急に明るく成つたやうにも思はれる。

明くる日の夕方、それとなく山樂迄行つて見ると、女は遠出と云ふので来なかつた。私は約束でも間違へられたやうな気がして、すぐく戻つた。歸る途すがら、不圖、三月二十一日も最う四五日の間に來るのだなと思つた。去年の今頃は一生懸命に小説を綴つて居た。今年はこの道歩いて居る。來年は如何成ることぞ。かうして年毎に違つた年回日を繰回しながら、私の身は終に如何成つて行くことであらう。

いよくお淺ひの日が來た。一寸氣が重い様にも思つたが、それでも午後三時頃から出掛けを見た。入口から素張しい景氣で、何だか脅がされるやうな心持もした。二階の廣間に個の舞臺をかけて、見物席は竹で仕切つてあるが、それも滅茶々々、只黒山のやうな人の頭がざわざわとして、正面に垂れた幕の金字さへ濁つた空氣にぼんやりと霞んで見える。其中を鑿下地に結つて肩を引いた女が右往左往に人を分けて歩く。私は隅の方の柱に凭れたまゝ、其邊に雛助が居るやすると、頸を長くして場内を見渡

した。花道脇には常陸山かと思はれる角力取りが居る。長髪で袴を穿いた男は浪花節語りの雲右衛門らしい。何處にも色街の勢力がうかいはれた。

幕が上ると、山臺の上に、ずらりと並んだ長唄連中の三味線に作れて、八つか九つ位の分不相應に大きな髪を着けた女の子が、日傘を舞して千代紙の草紙を抱へたまゝ、ちよこ／＼と花道から出て來た。蝶に捌んでの振も美しい。番組を見ると、河内樓おしんとあつた。大きなリボンを下げた花環なども舞臺へ持出された。

次は濱松風で、此兵衛に成つた女の調子外れな聲が聞きしい。私はかうして一人話相手もなく見知らぬ人々の間に挟まれて居るのが段々不安に成つた。終ひには舞臺よりも其方が氣に成り出した。で、少時廊下へ出て彼方此方見廻して居たが、別に仕様もないので、又元の座へ戻らうとすると、後から追廻るやうにして雛助が跟いて來た。

「好く來て下すつたわねえ」と云つて、前へ廻りながら、「何時の間に被入したの。」
「先刻から——最う歸らうかと思つてる。」
「如何して、折角被人したんぢやありませんか」と、急に鼻聲に成つて、

「最う二つて私の番だから、それだけでも見ていらして下さいな。」

「あゝ、私は何方とも附かぬ返辭をした。女は四邊の人を見い／＼「先達て親命が参りましたでせう」と訊く。

「あれが阿父さんかい。」
「私が好い加減に云つて、酒井様のお邸へ何つたついでに廻らせたいのよ。」

「何だかお婆さんの人も居たと云ふが、それがお師匠さんだらうね。」

「えゝ左様なの」と云ふ時、又幕が開いたらしい。

「ぢや、宜御座んすか。屹度被坐しやいよ」と云つたまゝ、ばた／＼と駢けて行つた。

其幕が下りると、直に又這つて來た。伏目に足袋の爪先を見ながら、小さい聲で、「此間は失禮しましたわね」と呟く。

「それに、如何しても逢つてお話ししたいことがあるんですが、一足先きに彼の家へ行つて待つて居て下さいな。」

「だつて、今夜は忙しいのだらう」と云ふと、

「いゝえ、開はないの、私ゝ如何かして行くから。」

「左様、屹度來られるね。」

「貴方も屹度ですよ」と念を推した。

次の幕は何が出たか知らぬ。いよゝこの女の出る番に成つたが、吾妻八景とでも云ふやうな新曲の素顔で、歌の文句からして今めかしい。私は柱の蔭から見て居たが、それが済むのを待つて、匆卒に賑やかな人いきれの中を逃れ出た。

戸外はとつぷりと日が暮れて居た。

四疊半の下座敷で、水焜爐にかけた鍋の物から沸々と湯気の立つのを見守りながら、私は箸を附けようとしなかつた。

「何うも失禮しました」と、お直が這入つて来た。「今日は、何方のお歸り？」

「今迄お歌さんのお浸ひ。」

「あゝ、左様でした。何でせう、あの人も出たのでせう。」

「なに、そんな譯でもないのさ。」

それから、いろ／＼出物の噂などをして、段々芝居の話に移つた。此家の主婦さんが紀の國屋最辰だと云ふことも聞いた。そんなに芝居が厭でないなら、千島命に附合つて貰ひたいとも云はれた。私は何心なく承諾した。

「それぢや、此次の總行には屹度切符を送りますからね。」

「あゝ。」

お直が外の座敷へ行くと、私は又一人に成つた。待遠しくもあれば、退屈もした。何の爲に私に先へ行つて待つて居れと云つたのか、疑へばそれも分らない。何だか、口から出任せの言葉を眞に受けたやうで、馬鹿々々しくも思はれて来た。

其間に柱時計は十時を打つた。

今頃かうしてこんな處に、私は何をして居るのだらう。私は、不圖、あの女に對して申譯のないやうな氣がした。あの朝別れた限り振向いても哭れぬあの女に對して——私は未だそんな氣があるのだらうか。あんなに迄突離されて居ながら、未だそんな氣があるのかと思ふと、自分ながら冷汗が流れる、誰にも云ふことの出来ないやうな冷たい汗が流れる。

十一時を打つた時には、私の身體中水に浸つたやうな疲勞を覺えた。天井から下つた電球が薄暗いの氣にかゝる。いつそ思ひ切つて此儘歸らうかとも思つた。

俄にどや／＼と足音がして、段梯子の下で何やら啖く女の聲も聞えた。私は思はず耳を敏てた。

やがて女中が十能に火を持つて来て、「お待遠さま、漸と見えましてよ。」

「筆拂つて居るのかい。」

女中は只私の顔を見て笑つて居る。

「好いのよ、私一人で行くから——關はないで下さいな」と、襖の外で駄々を捏ねて居るらしい。

「まあ好いからお這入んなさいよ」と、お直の聲も交つた。

女中の手に倚つかゝつたまゝ、一日じろりと室の中を見渡したが、よろ／＼と跟けて来て、べつたり其處へ坐つた。其儘だらしなく兩臂を出して簡臺の上に顔を伏せて仕舞つた。

「如何したんです、雛助さん。さ、起きて被さしやいよ」と、女中が二三度肩を揺振つたが、

「好いのよ」と云つたまゝ、女中は顔を背向けた。

女中は私を見回りながらにや／＼として、冷たく成つた銚子を下げて行つた。

私は少時凝乎として、女の耳朶のうしろに後れ毛のへばり附いたのを眺めて居たが、

「おい／＼と揺起して見た。「何處でそんなに飲まされたんだい。」

「おや／＼、此人は可笑しな事を云ふよ。」

女中はむつくり起上つた。其眼の色が變つて居る。

「如何だつて可いぢやないか、他人のことなぞ。」

私はこれでも約束したんだから、未だ後におなつ如きや冬次さんが居残つて居たのを逃げるやうにして来て上げたんぢやないの。来る早々可笑しなことぞ云はれちやア埋まらない」と前先の荒いことを云つたが、急にがっくりとして、「貴方は普通の人よりもしつこいんだよ。」私は黙つて相手の顔を眺めた。何を楯にこんな悪態を吐くのかと怪しみながら、此女が何日になく向う腹を立てて、やゝ氣色はんだ顔のほんのりと色づいたのも憎からず思つた。

「何を見てるのよ」と、女は氣味悪さうに訊ねた。餘り相手が何とも云はぬので、却て無氣味らしい。

「お前さんの顔を見て居るのさ。美しい女と云ふものは怒れば怒る程美しくなるものだね。」「馬鹿にしてるよ、本當に」と云ひ捨てたまゝ、つと立上つて襖の外へ出て行つた。何處へ行くのだらうと、其後姿を見送りながら、私は何となく引摺んで抱緊めて遣りたいやうな心持もした。

其儘、女は暫く戻つて来なかつた。

「ね、貴方一寸」と、お直が這入つて来て、「雛助さん、最う歸しても可いでせう。如何しても、今夜顔を出さなきや濟まないお座敷があるんで

すつて、あんな事に出りや、如何してもね、そんな義理も有るでせうから。」

「あゝ左様かと、私はお直の口を箝ぐやうにして、」

「うん云ふ譯なら、私も最う歸らうよ。」

「何だかお直の手前も氣の引けるやうな氣がした。そんな譯があるからこそ、来た時からぶり

ぶり他人に當り散したのだなと、大方諦めたものの、それなら、何故わざ／＼私を待たせて置いたのだらう、待たせて置いて如何する積りだつたらう。

「何うも濟みませんねえと、お直は背後から羽織の襟を直して居たが、「ぢや、最う一本熱いのを翳けて来ますから、それだけ上つて被入しやいな。」

「うむ」と云つて、一寸躊躇したが、「矢張り止さうよ。」

「いよく」立つ間際に成つて、雛助は玄關迄送り出した。私はそれを後目にかけたまゝ、黙つて馬車に乗つた。

其後、しばらく彼の邊りから遠ざかつた。日の經つにつれて、女のことと忘れともなく忘れた。女の顔さへ想出せぬやうな氣もした。

或朝、新聞を見て居ると、噂の種の中へ組入れ

た小形の寫眞が何うも雛助らしい。何心なく讀んで行くと、此頃大根河岸の旦那とやらを探な

して、吉原の暫間、櫻川のなにがしに身上りをして居ると云ふやうなことである。私は苦笑ひ

をしながら新聞を抛り出した。

それよりも、私の心を波立たせるやうなことが一つあつた

ある日のこと、私は郵便脚夫の手から一冊の雑誌を受取つた。かねて此號には小説に描かれたモデルの感想といふ記事の中に、あの女の談話が出て聞いて居たので、何がなし落

着かないやうな心持がして、直様封を解く氣には成れない。今頃になつて、あの女も何を云ふことが有るのだらう。何なりとも云ふが可い。

あの女はあの女で勝手なことをして居るが可い。私は私でそんな物は見ずに置くばかりと、

其儘押入の中へ抛り込んだ。兎に角、私は同じ見るにしても、一刻でも後へ延ばして置きたかつた。

夕方からぶらりと戸外へ出た。打水の香の心地よく、浴衣の新柄が瀧の様に店頭に吊される

時節であつた。電車を降りて、私の足はおのづと山樂の軒をぐぐつた。

「まあ随分お見限りでしたねえ」と、お直が愛想

好く迎へた。

私は座に着くと、「ありやア如何したい」と訊いた。

「雛助さん？」

「いやと、頭振を押つて、例の總見の話さ。」

「左様々々、あんなにお願ひして置いてあれッ限りに成りましたねえ。ですが、紀の國屋は何とも折合が附かなくて、彼時からずつと大阪へ行つてますからね。」

私はそんな事情も聞いては居たが、わざと空恍けて、

「惜しいものだねえ、如何かして此方の舞を踏ませる法はないかしら。」

「ですから、皆さんがやきもきして被坐しやるんですよ。何ですか、此盆興行には矢張元の所から出るやうな噂もありますがねえ。そしたら何卒お願ひします。今度は屹度お知せしますから。」

「あゝ、何卒ね。」

「では、雛助さん掛けませうね」と云つて立上つた。

私は不圖何日ぞの噂の種を想出したが、如何だつて關はない、又そんな事を氣にする人柄でもないと思ひ返して、其儘にした。一つは

其後如何成つたらうと云ふやうな好奇心も手傳つた。

やがて女は思ひなしか元氣のない容子をして這入つて來た。毎朝素面の時は、いやに含羞んだやうな所のある女ぢやあるが。

「何日ぞやは大變失禮をしました。最う喚んで下さるまいかと思ひましたよ」と、こんな事も云つた。

私は女の額の邊りをじろく／＼と見ながら、「大變變れたやうだね。苦勞でもあるのかい」と訊いて見た。

女は何氣なく、「左様ですか、そんなに見えますかねえ」と、黒く成つた眼瞼を引上げるやうにしながら、「私、今日は朝ッばらから何か好い事があるやうな氣がしてましたのよ。そしたら矢張貴方が来て下さつたわね。」

斯んなあざとい事を云ふ傍から、さも物臭さうな手附で煙草入を引寄せながら、ぶうと小鼻から煙の輪を吹出した。それが如何にも不貞腐れたやうにも見えた。

一時間許りそれでも話して居たが、一向に話もはずまぬ。私は此處へ來たのが今更後悔なやうな心持も出て、早く切上げて歸らうとした。

「此次は何日來て下さるの。」

「左様だねえ」と、私は立上つた。

女は側へ寄つて、相手の羽織の紐を弄りながら、「來ないつもりぢやないの。えゝ、左様だ。それなら可いのよ、可いのよ。」

ずる／＼と滑り落ちるやうにして、足許に蹲んだまゝ、兩手で堅く顔を抑へて仕舞つた。

「如何したんだな、えゝ」と、私も身を屈めて無理に其手を離したが、女は本當に眼の縁を赤くして、涙を一杯溜めて居た。

如何云ふつもりかしらと、私は不思議でもあり可笑しくもあつた。

そこへお直が這入つて來たが、「最うお立ちですか。大層お早いですねえ」と云ひ掛けて、じろく／＼二人の容子を見比べて居る。

私は只笑ひに紛らした。女も鼻のみながら涙を隠した。

三人揃つて廊下へ出た。お直が一足先に駆出したのを見て、前後を見廻しながら、私はそつと女の頸を抱へた。

これ限り、此女にも逢ふまい——左様思ひながら、手を離した。其儘ぶいと表へ出た。

寺へ戻つてからも、まじく／＼と寝もやらず、

机の前に坐つて居た。氣が附いて見ると、未だ外套を着たまゝであつた。私は何やら急に立上らうとして、又坐つた。きよろ／＼と部屋の中を見廻した。

少時又動かずに居た。

やがて、押入の隅から小さな支那靴を出して来て、机の上に置いた。玩具の様な錠が卸してある。それを外して、蓋を開けた。中はあの女から来た手紙の束である。

私は先づ胸が躍つた。赤いものや、青いものや、角などのや、いろ／＼な封筒がある。いづれも一昨年の日附である。何れかこれかと迷ひながら、例の一番長い手紙を拔出して、最一度讀み回して見た。

長い手紙は初めから火の出るやうな文字で繋がつて居た。一字々々舌を嚙んで滴る血潮に染めたやうな——それも、長い歲月の間には流石に色が褪せたらしい。鉛筆の走書も所々文字が滲れて居る。

時々氣にして洋燈の心を上げたが、上げる後から又暗く成つた。

私は初めて虚心坦懐であの女の手紙を讀んだ——讀まうとした。是迄は讀まうとしたこともない。如何やら眞正面にあの女が解つて来たやうな。

やうな。

これがあの女の凡てである。凡てがこれである。あの女の苦痛も不安も希望も矜持するところも皆此手紙の中にある。此手紙を見るたびに、何も云つて呉れぬと恨んだが、何も彼も云つてある。此外にあの女がある様に思つたのが私の間違ひである。あの女を凡て禪學のものにして仕舞ふのが残念に、あの女の不用意に出た言葉や仕草までも倫理的に裏附けようとしたのが間違ひである。西洋の劇や小説を見る眼であの女を見たのが間違ひである。自分の生立に引比べて、あの女にも——

但しこれなら——あの女の不安と云ひ恐怖と云ふものも、斯んなものだとしたら、何もあの女一人のものぢやない、あの女一人で苦しい思ひなぞすることは無い。誰の前で懺悔つても疚しいこともなければ恥ぢるにも及ばない。それだけに又、こんな事に理解も絲瓜もない。あの女はそれを如何して、如何云ふ積りで、斯う大業に考へて大袈裟に物を言ふのだらう。只、それが女である。

私は堪らないやうな心持がした。あの女の癖として、口を開けば、自分を知つて呉れるものはない、誰一人自分を了解して呉れるものはない。

いと云ふ——それ程自分のことを云ふなら、あの女は少しでも私を了解して呉れたらうか。不圖、そこへ氣が附くと、私は思はず手に持つた手紙を下に落した。あの女が私を如何思つて居るか——そんな事には今迄考へも附かなかった。あの女は私を知らぬ。何一つ了解して居らぬ。

あれ迄にして、あれだけの犠牲も拂つて、二人は到頭互に知らずして別れたらうか——あの最後に水道橋で逢つた夜までも。

私は丁字の隅の隅を見ながら眼を瞑つた。

それにしても、あの女のあのモノマニヤクな所は何處から來るのだらう。禪學なら禪學でも可い、一筋に思ひ込んで離れない所は——

それも女だからと云ふのか。

あゝ、何れにしても萬事が終つた。何日となくず／＼に終つた。かうして終る外に別段終り様もなからう。

俄に森とした本堂の中で飛立つやうな大きな音がした。私は吃驚して眼を開いたが、後は又森として何の音とも分らない。

十二

女の面白いのは、何でも知つて居る女が、それ

でなけりや何と知らぬ女だと、オスカア、ウィルドが云つた。換言すれば、自分を自由にする女か、それでなけりや自分の自由になる女だと云ふことであらう。私は一生の間に其何れにも出逢つたと信じた。一人があの人なら、一人は隅江をそれに擬した。そして、二人とも極力其鑄型に當て嵌めようとした。併し事實は二人とも夫程の女ではない。何方も並の女であつた。あれが女の當前だ、あんなのが當前の女だと思ふと、私は女の仕た事について女を憎む氣になれぬ——憎むことさへ出来ぬ。只要するに自分とは他人であつたと思ふ外はない——二人とも終に路傍の人であつた。

私はこれでも私のために生れた女、生れた時から私に戀して居るやうな女が一人はあると思つた。私の爲に生れて、私の爲に死ぬ、絞首臺迄も隨いて来るやうな女が——私を理解してなりとも、或は理解せずとも可い——そんな女が一人はあると思つて居た。

私はいよ／＼こんな長い間の夢も捨てなければ成らぬのか。

此廣い世の中に、私の考へて居るやうな女が一人も居ないとするや、私には世の中がないと云ふに均しい。不圖、死と云ふことを、何か忘れ

て居た道伴侶を想出してでもした様に考へて見た。昔は死を想ふ毎に、何とも云はれぬ恐怖の念が伴つた。其恐怖の念が却て死に近づくせよとした。死と云ふものを何か懐かしいもの、親しいものの様に思はせた。恰度星の上に立つて下を瞰下した時、日眩いて、あゝ怖いなと思ふ傍から、むら／＼と飛下りて見たくなるやうなものであらう。流石に今はそんな恐怖の念もない。只、死なぞと云ふことを考へるたびに——

これは私一人に限つたことであらう——一種の差取の念が伴はずには置かぬ。他人は知らず、私は滅多に死なぞと云ふことを口にする資格はない。人並にそんな事を云へる身ぢやないと云ふやうな氣がして、つい自分で自分の考へを反す様に成つた。

冬の薄い日が本堂の簷をくゞつて、斜めに影を落す頃、障子の棧にび／＼と羽音を立てて、死残つた蒼蠅の飛廻るのがうるさく耳に附く。

初めは目に入らなかつたが、其姿を見附けると、鉛筆の尖で突殺さうとした。幾度も抑へようとして逃げた。それでも、遠くへは逃げようともせず又元の所へ歸つて来て、白い障子の紙に突當りながら、び／＼と繰り返して居る。

「おい、自宅に居るか」と、聲を掛けたものがあ

る。

「あゝ」と返辭をした。

小早川は玄關へ廻らずに、裏場の木戸を開けて入つて来たものらしい。がらりと外から障子を開けて、窓の口へ頭を出した。

「まあ上れな。」

「うむ」と云つたまま、背中に日影を浴びて立つて居る。

「如何したんだい。」

「只睡いよ」と、やけに手の甲で眼を擦つたが、下駄を脱いで廊下から上つて来た。

「何だかとおぼ／＼として居る。影が薄いやうだね。」

「ふむ」と、烏打帽を下に置かうとして、不圖、そこに落散つて居る一枚刷の辻番附を取上げながら、

「おや、斯んな物があるね。」

「あゝ、それかい。そりやア何さ、山樂のお直が送つて呉れたの。」

「何だ、ぢや未だ彼の家へ行つてゐるんだね。」

「いゝや、夏頃から一度も行かない。只ね、何時か鯉之助の見進に誘はれて行く約束をしたものだから、それで今度送つて寄越したのだから。」

「あゝ左様か、それなら恰度好いや。僕は初日に行つて見たけれど、明日も行くから向うで逢ふことにしよう。」

「だつて僕は分らないよ。」

「如何して？」

「如何と云ふこともないけれど、僕は君の様にあの役者が別段品貞と云ふ譯でもないもんな。」

「だから此後品貞に成つてお呉れよ。折角戻つて来たかと思ふと、又大阪へ行つて仕舞はれちや皆衆が困るから。」

「それぢや、僕一人の力で引止めて置くやうだね」と笑つて、「君は又何かい、例の所から皆衆を連れて行くのかい。」

「そんな見つともないことは最うしないさ」と云つたが急に浮かぬ顔をして、「此頃一寸可厭な事があるんだよ。」

「何だい、それは。」

「うむ、何でもないがね」と、稍言ひ辛いやうにしたが、「小まんと云ふ雛妓を知つてるだらう。近い間に、あの子が如何か成つて仕舞ひさうでね。相手は何者だか分らないが——只榮太の奴め欲張つてゐるものだから、未だ大丈夫の様だけれど。」

「何かい、榮太と云ふのは其家の如さんかい。」

「あゝ」と、下唇を噛んで居る。

私は小早川が去年から雛妓を引張廻して、日夜あの邊りに入浸つて居ながら、一人も如何することも出来ない、男を知らぬ女をむぎぐと踏み躪るやうな、そんな真似の出来ない性分だと知つて居るだけ、それぢや君の方から先へ如何かして仕舞つたら可かりさうなものだとも云へない。少時相手の顔をまじぐと見守つて居たが、

「矢張仕方がないね、生きた人間だもの。」

「まア左様さな。」

「それとは違ふがね、僕は近頃如何云ふものか生きた女を見ても心が動かない。昔から畫ける女を見て心を動かす」と云ふことは果敢ないものの譬にもしたやうだが、あの豊國や國貞のなまめかしい姿勢をした女の繪を見ると、大に心が動く。それで居て、實際の女を見ては——實際女に接して見ても、何うも欲望さへ起らない。餘り何だから生理的に如何かしたんぢやないかとも思ふが。」

「そりや、左様だらう」と、小早川は氣の乗らぬやうな返辭をした。

「併し何だぜ、君が雛妓ばかり相手にして如何することも出来ない」と云ふのも、矢張同じやう

な心持ちぢやないのかねえ。」

「そんなんぢや無いよ」と云つたが、それでも稍氣の晴れたやうな顔をして、いろ／＼小まんの話をして聞かせた。あの子だけは自分のことを思つて居る、此方でも思つて居ることも知つて居るらしい。他の雛妓と一緒に喚んでも、あの子だけは如何しても自分の側に坐らなく成つた。暗がりへ連れて行くと、あの子の自分を見る眼が大きく成るなど、そんな話を幾つもしてから、二人とも巻煙草の盡きる頃に、「それぢや、明日は繪の女を見るつもりで雛妓を見においでな。」

「あゝ」と、私は笑つて返事をしなかつた。

小早川を玄關へ送出して、大戸の掛金を叩いてから再び部屋へ戻つた。ぐつたりと身體中勞れたやうに思つたが、眼だけは冴えて眠られさうもない。一人ぼつねんと考へ込むのも可厭だし、書物を開けても讀む氣には尙更成らぬ。何もなら酒でも飲むのだが、此夏偶とした出来心で禁酒してから、こんな時には自分で自分の身を持てあぐむ外はない。切めてもつと小早川を止めて置けば可かつたとも思ひ出した。

床柱に凭れたまゝ、凝手と洋燈の火屋を見て居たが、押入から蒲團を出してごろりと横に成

つた。暫く眼の前をちらちらと光る物が飛んで行つたが、やがてそれも止んだ。時間は何れだけ経つた後とも分らぬ。

「太陽が――太陽が上る。」

私は聲を上げて飛び上つた。眞夜中に、眞暗な中から太陽が昇る。圓い銅色をしたものがつるつと昇る。

不圖、それが撤消すやうに消えた。

私は暗闇の中に腕組をして坐つて居た。何と云ふ理由もなく、最う永久に太陽が上らぬやうな氣がした。此儘、二たび日の光を見なかつたら――人間と人間とが手と手で探り合ふやうに成つたら――私は思はず兩手を出して疊に觸つて見た。

やがて又蒲團の上へ突伏したまゝ寢入つて仕舞つた。

朝、目の覺めた時には、何よりも先づ朝の光を見るのが嬉しかつた。ねとくした頸筋の汗を寢巻の袖で拭きながら、今日の芝居行を思ひ遣つた。一刻も早く人の顔が見たい、人の居る所へ行きたい。

午飯を済まして、直に出掛けて行つた。久松町で電車を降りて、橋を一つ渡ると、軒並柿色の半暖簾を垂れた芝居茶屋が見えて、繪看板やら

積櫓やらに、おのづと人の心も浮立つ。私は軒提灯の屋號を見い、座の櫓手へ曲つて、三軒目の茶屋へ這入つた。机の前に、頭のてらてらと光げた番頭らしい男が控へて居て、

「えゝ、山樂さんの御連中ですか。最う疾く開いて居ります。何卒直に小屋の方へ――ああ、誰か御案内を」と、氣の引けるやうな聲で呼ばはつた。

私は茶屋の烙印を捺した福草履を穿いて、男衆に連れられて行つた。恰度幕の下りた所と見えて、がや／＼と人立がして居る。櫓の中には、見知越しの山樂の女隠居が居て、座を譲りながら、「何うも、今日は御苦勞様」と、小さな胡麻鹽の盥を下げた。

「えゝ」と云つたまゝ、背後を振向くと、其處には小早川と、其外三四人知合の者も来て居た。「や、や」と挨拶を交したが、最後に又小早川に向つて、「如何だい」と訊くと、

「うむ」と云つて笑つて居る。

「そりやア舞之助が好いんですよ。今度は紀の國屋一人の芝居ですね」と前の隠居が引受けて云つた。

「ぢや、好い鹽梅ですね。」

こんな事を云ひながら、私は周囲を見渡した。

何方を見ても女連ばかりである。小早川はそつと私の肩を敲いて、

「彼處に居るのは皆吉原の連中だよ。あゝ、今恰度向うを向いた、あれが例の松子なんだよ。」

「何處だい、分らないね。」

「うむ、今立上つたのさ。そら此方に向いたらう。」

富士嶺の稍せゝこましいのが、小早川と眼を見合せて、一寸目禮したまゝ、直に又知らぬ顔をして彼方此方見廻して居る。小早川は何か考へて居たらしいが、又氣を取直して、

「それから、君に是非紹介して置くものがあるよ。あの櫓から一つ、二つ、三つ目で、お婆さん連の揃つてるのが有るだらう。」

「あゝ、あの舞臺に取附の櫓かい。」

「左様、あの中に一人若い女が居るだらう。好く見たまへ、一寸眼が綺麗だからさ。」

「左様だねえ」と云つたが、他の人の肩と肩との間に、前髪と銀杏返しの大い輪だけしか見えな

い。

「魚河岸の娘だ」と云ふが、一寸見ると素人ぢやないやうだよ。ね、お金さんと、小早川は側に居る女中を見返つた。

「えゝ、そりやア全く。それに紀の國屋氣狂

ひで、頭の先から足の先迄千鳥の紋散らしです
よ」と云ひかけて、「お待ちなさいよ、今立つて
来さうですから。」

かう云つて、お金は頸を延ばして其女を見守
つた。私も一緒に成つて見て居たが、其女は
狭い假花道の上に立ちながら、何やら同じ樹の
者と話をして居る。「一言云つては笑ふたびに、
口許の締りが弛んで齒莖が遠慮なく出る。私は
其表情の何處かに智慧の足らぬ女の様な氣が
仕出した。」

間もなく、下座の三味線が鳴つて幕が開いた。
其女も立ちかけたまゝ元の座に歸つた。一番
目は座附作者なにかしの新作物で、眞面目には
見て居られないやうなものの、それでも女どもの
瞳子は目じろぎもせず舞臺に聚つた。私もそ
れに釣られて段々舞臺に見惚れた。が、舞臺の
上の發展を辿るよりも、衣裳の色や背景の取合
せから、私の連想はあらぬ方へ走り勝ちであつ
た。終ひには舞臺を見ながら、私は私で別の
事を考へて居た。

やがて、ゆる／＼と緞帳の下りた時、私は
ほつと息を吐いた。同時に、浅敷の上下へ連ね
た御園白粉の提灯に、ぱつと灯が入つた。土間
中が又がや／＼と陽氣立つ、私は俄に寂しく

成つた。何だか自分なぞの来る所ではない所へ
來て居るやうな、何とも云はれぬ淋しさが萌し
た。

「おい、一寸出よう。」

私は小早川に促されて廊下へ出た。一緒に
隨いて來た雛妓どもにせがまれて、小間物店の
前に立つて、小早川がいろ／＼な物を買はされ
て居るのを少時辛抱して見て居たが、つと反れ
て、一人三階へ上つて見た。浅敷裏の欄干に凭
れて、土埃に塗れた町の屋根を見下しながら、
冷たい風に當つた。

『智慧の始まる所に美は終る。』

誰やらの云つたことが想出された。紀の國屋
氣狂ひの女が美しいのは、あの女が馬鹿だか
らだ。智慧が足りないから美しいのだ。私は一
人で左様極めて、美しい女の智慧が足りないの
は肉感的なものだと思つた。只肉感を満足さ
せるために生れて來たやうにも、男の慰みもの
に成る女の様に思はれた。あの女が意氣張り
にして居るだけ、一層そんな氣がする。こんな
のが女と云ふものであらう、これ以上女に望
むのは男の無理であらう——併し異性を侮る
位、私には寂しいことはない。

やがて場内がどよめくので降りて來たが、不

圖、梯子段の下で、其女が懷中鏡を出して顔
を直して居るのに出逢つた。女は足音を聞いて
一寸見回つたが、又側目も振らず鶴の羽根で小
鼻の邊を抑へた。

私は其前を通り抜けて元の座に戻つた。直に
中臺の幕が開いた。歌舞伎十八番の内鳴神上
人と云ふので、瀧臺の前に四本柱の庵をしつ
らへ、其中に結跏して、天下國土に雨降らさじ
と上人一生の祈願を籠めて居る。朝廷を恨む
筋あつてのことである。そこへ雲の絶間姫、天
子の敕詔を受けて、國土のため上人の心を
蕩かし其修法を破らんと、はる／＼山に分入つ
てくる。

絶間姫に扮した鯉之助が、揚幕を出て、花道
の七三にとまつた時には、何處かで、
「あれ、鯉ちゃんかと、溜息を吐いた女があつ
た。本舞臺へ來て、二人の青坊主を相手に去に
し男の戀しさを語る。語るに伴れて、振がある。
男に逢ひに北山へ裾を絡げて川を渡るやうな、
仇つばい振がある。其振よりも、役者の少し顔
へを帯びた聲音が私の心を惹いた。其聲の色よ
りも、物を云ふたびに、折角美しい顔の造作をく
づして仕舞ひさう、なああの汚い口元が——そし
て、あれも男が女に扮して居るのだと思ふ時、

私は一しほ心をそゝられるやうな気がした。自分ながら如何したことであらう。

私は矢張繪に書いた女に焦れるのだ。まことの女よりも繪に書いた女に、女でない女に、焦れても、如何することも出来ない女に――あゝ女でない女が戀しい。

私は鳴神上人も舞臺も忘れて、只絶間姫に見入つた。絶間姫と云ふことも忘れて、只目前の女に見入つた。絶間姫の白も耳に入らねば、科も目に映らぬ。私の眼中には、只女があつた、女でない女があつた。

幕が下りてからも、少時女の姿が眼を離れなかつた。

「あゝ好い――と、背後で小早川の聲がした。

「本當に好う御座んすわねえ。」

「全く好い女に成るわねえ。」

彼女此方の女の口から感嘆の聲が出た。

「併しあの口元は穢くろしいね」と、一人の男がわざとらしく云つた。

「それが好いんだよ、其汚い所が」と、私は思はず口を出した。「何處迄も揃つた女と云ふものは、餘り好くない。何處か一所缺けた方が却て其美を添へる。女は左様したものだ。」

「大變な御執心ねえ、貴方」と、お金も惻れた様

に云つた。

「あゝ執心だよ。あんな女なら何時迄も見て居たいね。」

「それぢや、一寸此處へ來させませうか。」

「うんにや、私は役者の素顔なぞ見たつて仕様がない。そんなものを見たいとは思はない。」

「ぢや、髪を着せたまゝ側へ引附けて置かうと云ふんですね。随分貴方も物好きだね。」

「あゝ物好きだよ。こんなのが色氣違ひになるのかも知れない。」

「さうね、色氣違ひとも違ふわと、稍宥めるやうな調子で云つた。お金は私が腹を立てたとでも思つたのであらう。」

私は何だか初めから云つたことが取返されたら取返したい様に思つた。

「後は何だ、太郎冠者の喜風ちや詰らないね。敢う歸らう――と、小早川が言出した。

皆總立に成つた。私も一緒に立上つた。

茶屋の二階へ戻つた時、小早川が私を側へ喚んで、

「これから彼の子達二人伴れて吉原へ行くんだ。君も一緒に付け」と云つた。

「僕は」と云つて見たが、

「東海も行くぢやないか。君が附合はぬと云ふ

法はないと、一口に押附けた。

小早川が吉原で遊ぶと云つても、只引手茶屋へ藝者や藝妓を喚んで騒ぐだけに止まつて、それから中へは一步も踏込んだことがない。それも聞いて居たので、何を見せびらかす氣なのか、見せるなら見て遣らうと云ふやうな氣にも成つた。

間もなく、五臺の腕車が北を向いて景氣よく走つた。暗い町明るい街を幾つも駈抜けた。

やがて五十間を遡入つて、仲ノ町を水道尻の方へ、「信濃藩」と掛行燈をした店頭で榎格を下した。店の火鉢にあたつて居た女どもが皆立上つて、

「おや、被入しやい」と口々に。

一同二階へ上つた。五十餘りの眼のぎよろりとした女中が隨いて來た。

「お土産」と云つて、小早川が裏米の小さな重箱を差出した。

「おや、お芝居のお歸りですね、皆さんお揃ひで。」

「鯉ちゃんの總見さ。」

「左様々々、今日は左様でしたねえ。それぢや、小夏ちゃんや松子さんも行つて居たでせう。」

「あゝ、だから其連中に逢ひに來たのさ、早く

喚んで来てお呉れ。」

「左様ですか、最う歸つて居ますかしら。」

「歸つては居るさ。疲勞れたなぞと我儘を云つたらね、鯉ちゃんの言傳があるから、一寸でも顔を出すやうに、私が左様云つたつて。」

「左様申しませうね」と、女中は階下へ降りて行つた。

「おい、お松どんく」と、追かけて喚んで見たが、返辭をしない。今夜小早川は何か非常に興奮して居る様に見えた。

「ね、小早川さん、私達送つて呉れなきや可厭アよ」と、おづ／＼座蒲團の上に坐つて居た雛妓が、小まぢやくくれた言様をした。

「ね、私も」と、今一人が云つた。

「大丈夫だよ」と云ふものの、小早川自身落着いては居なかつた。

銚子が出て、私は一つ受けて見たが、はら／＼して、自分が先へ酔はずには居られない様な氣がした。早く酔を貰はうとして、蒔繪の御殿火鉢に凭つかゝつたまゝ、引つかけ／＼盃を襲ねた。

やがて芝居で見たのと、三人ばかり妓が這入つて來た。

「あら、皆さん」と断寄るやうにして、「先刻は

何うも失禮を。」

それを序開きに、役者の噂が始まつた。渦巻が如何の蝶々が如何のと、情人の噂でもするやうに、傍通も同じ話が繰回された。駄洒落の鵲返しもまじつた。小早川は一人でそれを引受けて切つて廻さうとした。

今一人の東海と云ふのは、只にや／＼と笑つて聞いて居る。

「此方は好いわねえ、本當に大人しくつて」なぞと云ふ女もあつた。

私は盃を襲ねるに伴れて、だん／＼土の底へでも沈んで行く様に思はれて來た。周囲と自分との懸離れた心持が、芝居に居た時よりも一際強く身に迫つた。かうして自分一人取残されたやうな氣がして、小早川も憎かつた、女どもも憎らしい。自分でも迎へて寂しい心持を誘ひもした。誘ふが儘に涙も出さうな心持に成つた。泣きた、泣けたら泣いて見たい。私はそつと隣に坐つた、友達腕に凭れるやうにした。

「如何した。顔色が悪いぞ」と、東海も可成酔つて居るらしい。

「え、如何したんだ。氣持でも悪いのかと、小早川は巫山戯て居た手を止めて訊いた。それを

機に、私は東海の膝へ顔を伏せて仕舞つた。

「なに、酔つたんだらう。僕が預つて居るから可い」と、東海が云つて呉れた。

私は兩手で顔を押へたまゝ、傍の見る目も憚らず、思ふが儘に涙を流して泣いた。何故泣けるのか、自分にも分らぬ。只、後から／＼留度もなく涙の出て來るのが、子供の様に嬉しかつた。其間、東海はそつと私の背中を撫でて居た。

少時經つと、又小早川が側へ來て、

「如何だい、心持は。若し吐く様だつたら吐いて仕舞つた方が可いぜ。」

私は只頭振を掉つた。

「如何で御座います。枕を持つて参りますから、少時機にお成りなすつたら」と、女中が氣を利かせた。

「大様だねえ」と、小早川は一寸考へて居たが、「いづそ此男だけ何様かへ送つて仕舞つたら如何だらう。」

「それが可い／＼」と、東海まで同じだ。

「おい／＼」と、私はむつくり起上りながら、「そんな無暗な事をしちや不可い。」

「なに、好いから黙つておいでよ。」かう云つて、小早川は何やらお松と膝合せた

が、「さ、起きたく」と、私の手を執つて引起した。

私は小早川に手を離されたまゝ戸外へ出た。足許がふら／＼として、一步毎に頭の心がづきんと痛む。仲ノ町はひとりとして深けたらしい。

「何處へ連れて行くんだい」と、私は不意に街の真中に立停つた。

「好いんだ、僕が随いて行つて上げるから」と、小早川も振返つて促すやうにした。

「そりや好いけれど、あの家だと一寸困るんだが。」

「如何したんだい、そりや。」

「なに、何でもないんだよ」と、わざと言ひ紛すやうにしながら、「只ね、あの家へは一度来たやうに思ふからさ。それも一昔前に。」

「一體誰だい、そんなのが有れば早く云やア可いのに。」

「何と云ふ花魁なの、お馴染は」と、お松も側へ寄つて来た。

私はそんな事を訊かれるのが、堪なく可厭なので、

「名前前は忘れたよ」と云つて、すた／＼と歩き出した。

大黒樓のひろい段梯子を上る時、私は自分ながら胸の轟くのを覺えた。引附では、お松が又顔を覺めて、

「そんなのがお有んなさるのなら、仰有つて下さらなきや困りますよ」とも云つた。

私は投出すやうにして、「何とか云つたよ、薄米と云ふ女が居るかい。」

「薄米さんなら居ます」と、言下に云はれた。

私は直に其女の新造の手へ移されて、未だ明いて居た女の部屋へ連れて行かれた。そして、宛然自由意志のない子供の様に、衣を剥がれて、敷いてある蒲團の上に寝かされた。私もされるが儘にされて居た。

次の間で、新造が脱棄てた着物を纏んで居るのを、薄目を開いて見く、部屋の中を見廻した。屏風の蔭に成つて能くは分らぬが、夜具戸棚に掛けた萌黄の風呂敷のやうなものにも、硝子の蓋をした裸人形にも、長火鉢にも、鏡臺にも、それ／＼見覚えがある様な氣がした。

此廓でなければ見られないやうな風俗が心を惹く。

只、此大きな家の中に三味線や太鼓の音もせぬ。夜は静かであつた。

間もなく、廊下に重草履の音がして、障子の外で止まつたかと思ふと、すうと身丈のひよろ長い女が這入つて来た。赤地に金糸の縋のある襦を着たまゝ、長火鉢の前に片膝立てて坐つたが、いきなり長煙管を出して二三服すば／＼と煙草を吸つた。私は息を凝らして見て居た。電燈の光を眞正面に浴びる所爲か、眞白な横顔が死骸に白粉でも塗つたやうで、濃烏田に紅白綯ひ交ぜの奴をかけたのも却て薄ら淋しい。

やがて煙管を抛り出して、襦を脱いでふはりと衣桁に掛けたまゝ、女は枕元へ寄つて来た。

「貴方、お睡つてらつしやるの。」

「いゝや。」

「大變酔つて被人したことねえ。それでもよく忘れずに來て下さつたわね」と、蒲團の上に片肘を突いて、だん／＼顔を側へ寄せて来た。

私は此女の聲に一番記憶が残つて居る様に思つた。

「伴れの男は如何したい」と、私はわざと外のことを訊いた。

「如何ですか。最うお歸りに成つたでせうよ。」私は黙つて居た。

したわね。」

「私のことを知つて居るのかい。」

「それは記憶えてまさアね。同じくよくいんさいの國ぢやないの。」

「ふむ」と云つたまゝ、そんな事迄話してあつたかと、一人顔が赧らむ様に思つた。

女は何氣なく、「併し考へて見ると長いわねえ。私が此處へ來てから六年日だから、恰度五年目よ。」

私は思はず女の顔が見られた。「能く辛抱したものだね、それにしても。」

「えゝ、随分長かつたわ——何だか、恥かしいやうねえ。」

「併し、それぢや最う年期が明くだらう。」

「えゝ」と、何故か其語はしたくない様に見えるた。

「あの時分から此部屋だね。」

「えゝ、能く記憶えていらつしやるわね。」

「今度は此方がかい。」

女は急に身顫ひして、「おゝ、寒い。夜が深けると冷えるわねえ。」

かう云つて、——

「私ひえ性だから、冷たいのよ。」

眠られぬだらうと思つて案じたが、酒が廻つ

たと見えて、間もなく前後を忘れた。時々はつとして目を覺ましたが、直に又寢入つた。朝に成つて下新が長火鉢に火を入れたに來た物音を聞いて、むつくり頭を上げた。

女は未だ正體もなく寢入つて居る。

「おい——」と喚んで見たが、一向返辭をせぬ。どす黒い眼臉に、うつすら白眼をして、がつくりと口を開いたまゝ、側に何んな男が寢て居る。

私に凝乎と其顔に見入つた。そして、何とも云はれぬあはれを身におぼえた。

茶屋に居残つた連中が昨夜の間に引上げたと聞いて、目の光を浴びて此廓を出るのが可厭さに、其日は到頭ぐづ／＼して一日中此部屋で暮した。私はそれが日の目め拜めぬ日蔭の國に居るやうな氣がして、何となく心を惹いた。日蔭者が日蔭者を相手にして生きて居るやうな心持もした。

女は私の顔を知らぬ新造に向つて、私が以前如何にもしげ／＼此處に通つたやうなことを云つた。そして、素晴らしい全盛な遊びでもした様に吹聴した。私は只女が疎ましかつた。

「それぢや、同じお國ぢやあるし、幼馴染とでも云ふんだわねえ」と、新造はさきも氣の無さう

な挨拶をした。

「あゝ、だけれども此人は薄情だから、五年の間顔も見せないんだもの。」

「本當に花魁が可哀想ですわねえ。其埋合せに、これから些と来て上げて下さいましよ。」

私は其五年の間に何をして來たらう。今の私はあの時分の私ぢやない。そんな事を思ふと、不圖味氣ないやうな心持がした。

二人に成つた時女はこんな事を言出した。「ね、本當のところ、私來年の三月で年期が明けるのだから、それ迄だと思つて来て下さらないの。又これ限りに成つちや、實際酷いわ。」

「へえ、來年の三月かい。」

「こんな事は誰にも云はないんですけれど、まつたく三月の三十一日よ。それに如何してもね、年期明前に成ると、何んな人でも客が落ちるの。どうせ今に居ない女だと思ふと、お客の方でも詰らないのでせう。」

「ぢや、私にも三月迄と期限を附けるんだね。」

「だつて、其上の事は望まれないんだもの。貴方も皮肉ね。」

「まア、そんな事は如何でも可いさと、私は笑ひに紛らした。

こんな女の云ふことなぞ、何が何やら當に成

らぬとは思ふものの、來年年期が明くと云ふのは本當らしい。それ逆しか居ない女だと思ふと、かうして居るのが不思議の様に思はれて、やゝ殘惜しくもある。

日が暮れて、隣近所の店をつける音が聞えた頃、私はこそと吉原を出た。山下で胸車を棄てて、やうく廓の空氣から逃れたやうな氣に成つた。初めて頭を上げて往來の人を見た。

十三

明くる朝、寢床の上で眼が覺めた時には、四股が關節からばらばらに離れて、只並べであるだけの様にも思はれた。一度目を覺ましたまゝ、又つととと寢附く。いろ／＼な處でいろ／＼な女に逢つた。美しい馬鹿の女にも、舞臺の女にも、それから籠の鳥と云はれた境遇の女にも——皆それが走馬燈の様にぐる／＼と廻つた。そして、皆一所に成つて消えて行く。

私ははつと思つて眼を覺まし／＼した。日暮前に、やつと起上つて見たが、他人の身體の様にふら／＼して、折角箸は執つて見てもどうも物を喰ふ氣にも成らぬ。私は又暗い洋燈の下に、一人自分の影を見出

した。今夜も又あの瘦せた女は、あの骸骨のやうな顔に白粉を塗つて、煙客の寄つて来るのを待つて居るのだらう。女を俯つて見たり、繪に書いた女、女でない女を戀したりしながら、終には色を賣る女の所に落着いたのも、自分ながら怪しい。併し、私は矢張末はあんな女の所に落着く宿命を持つて生れて來たのぢやなからうか。あんな女の所より外に行き所のない身ぢやなからうか。あの女を女としては何の興味もない。何一つ心を惹かされる様な所もない味も無い。ばさ／＼とした女である。こんな無味な女でも、六年の間籠の中に入れられて、さんざ生血を絞られた擧句、骨と皮ばかりに成つて、それでも三四箇月後には其體を立つて行く。其後は何處へ行くやら分らぬ。何處へ行つて如何成るやらも分らぬ。只それだけの事が心を惹く。切めては、あの女がいよ／＼巢立をする迄見守つて居たいやうな氣もする。思へば、私は是迄女よりも女の置かれた境遇に心を寄せて來た。何の女にも左様であつた。そして、其結果は何の女にも捨てられた。何の女にも捨てられた擧句、何一つ心を惹かされぬ女の境遇だけに心を寄せて行くとしたら、それが私の最後かも知れぬ。女に心を寄

せる最後かも知れぬ。

山に行く前に、私は二人の女を知つて居た。二人とも水商賣の女であつた。其中一人は死んで、一人は生きて居た。何だかそれが私を待つて居た様でもある。

此處迄考へて來て、私は一人苦笑ひした。其儘洋燈を吹消して眠りについた。

明くる日、夜が明けて見ると、宵にはさも意味があるらしく思はれたことも、すべて色の褪めた絹絲の袂に見えた。さのみ心にも懸らない。かうして其日は無事に暮れた。次の日も、其次の日も同じ様な日がつゞいた。

師走の月は、山の手にも下町にも歳の市が立つた。一年中で、此頃程一人様の者の心淋しい時はない。ある日、私は神樂坂へ出て往來のはげしい中をばら／＼と歩いて居たが、坂の下へ降りて、

「おい／＼と、柳の下で客待をして居る車夫を喚んだ。車夫が相棒を上げた時、「待て／＼」と云はうとしたが、又えゝ、儘とも思ひ返した。

大門を這入る時には、何となく氣後れがした。何となく社會の裏面へでも這入つて行くやうな氣がして、物を突破るやうな捻針な心持に成つ

た。それが、私には一種の刺戟にも成つた。

只、信濃善の前は素通りをした。いづれは直に分るものとしても、今日一人で造つて來たと云ふことは知られたくない。で、何と決したこともなく、廊の中を一週りした。未だ灯が入つたばかりで、金襴の前に女の姿も見えなければ、格子先に素見客の聲も聞えぬ。何の小路もひっそりとして居た。やがて大黒樓の店頭へ出たが、四邊に人が居らぬのを幸ひ、私は直に二階へ通つた。座敷には女も居なかつた。

おくれて隨いて來た新造を片陰へ喚んで、茶屋へかゝつて來ないからと頼んだ。新造はつけざまに點頭いて、

「今、お湯に入つてますから、何卒」と、煮花を出して俯めた。

「外は一向寂しいね。」

「えゝ、不景氣ですよ。今年の暮の様に寂しいつたら、そりや全くない。」

こんな話をして居ると、やがて女が顔だけ眞白に塗つて顔をほてらしながら、湯から上つて來た。

「何うも相済みません」と云つたまゝ、つと背後向に鏡臺の前に坐つて、頬にお化粧を始めた。やがて濡手拭で顔の白粉を抑へながら、此方を

向いて、

「お品どん、松前屋の金玉糖が有つたでせう。あれを出して上げて下さいな。」

「未だ有つたかしら」と、新造は茶簞笥の上の鑑を出して振つて見る。

「あれ、それぢやないのよ。」

「何れ、私にや分らない。」

女は手に持った手拭を鏡の上へ掛けて置いて、側へ寄つて來た。

「此處に有るんぢやないの。物覺えの悪い人ね。」

私は出された菓子を摘みながら、何となく心がくつろぐ様に思つた。此女が私を此度來るものと極めて居たやうな——來るものとも來ないものとも全然意に介して居なかつたやうな態度も、今の私には嬉しかつた。私は此女に對して、何一つ求むる所はない。此女の心が誰に占められて何處へ走つて居ようとも、私の知つたことではない。私は只かゝる女をかゝる女として見て居る。其間に微かなあはれを求めて満足しようとして居る。こんな淡い心持で女に對したことは、是迄私にはない。

あゝ、私も變つたな。私は自分で自分を憐れむやうな心持が湧い

た。

「何をそんなに鬱いて被坐しやるの」と、女が側から訊いた。

「あゝ」と、私は顔を上げたが、「左様だ、私は未だ飯を喰はない。」

「おや、此人はお腹が空いてるんだとき。早く御飯を喰べさせて下さいな。」

「何にしませうね」と、新造が側から訊く。

「何でも可い、只ぐつぐつ煮て喰ふ物が可いね。」

やがて茶屋から寄鍋を持つて來た。酒は壺で取寄せて、小注をして銅壺に入れられた。飯櫃も醬油も押入から取出された。

私はそれを見ながら、「何だか斯う所帯でも持つてるやうだね。」

「貴方が御主人よ。」

かう云つて、女は鍋の物を小皿に分けて呉れた。

私は早速に返辭も出なかつた。私が自分で自分の家を壊して、一人寂しく膳に向ふ様に成つてから幾年に成ることであらう。

「ね」と、少時經つて言出した。「私が此處へ來なく成つてから、何處へ行つて居たと思ふかい。」

「何處へとは、女の許なの。」

「左様さね、まあ女の許でも可い。」

女は少時考へる様にして、「素人?」

「いや。」

「ぢや、不見轉? 不見轉はお止しなさいよ、汚いから」と、顔を覺めた。

「そんな者ぢやないさ」と云つたが、「實はね、私は或女と心中しかけたことがあるんだぜ。」

「まあ」と、兩女とも聲を揃へて云つた。

「そんな事諺でせう」と、女は私の顔を下から覗く様にして、「あゝ諺だ、諺だ。」

「諺ぢやないさ」と云つたが、輕々しくこんな事を言出したのが、自分で自分を侮つて居るやうにも思はれた。

「へえ」と、新造は道理らしい顔をして、「で、二人とも助かつて。相手は如何したの。」

「相手は自宅に居るさ。」

「でも、能く左様して居られるわねえ。」

「なに、初めから私のことなぞ何とも思つちや居ないんだから——女は左様云つてるよ。」

「訝しいわねえ。」

兩女ともそれきりであつた。

「だから何だよ、女と云ふものは決して私なぞに惚れるもんぢやない——生れてから一度も惚

れたこともないし、又惚れたとも思つちや居ない。そんな自惚は無く成つたね。」

「だつて、そりやア——」

「いや」と、相手の言葉を抑へる様にして、「お前さんにだつて、決して惚れて貰はうとも、惚れられたとも思つて居ないから、それだけは安心してお座でなさい。」

「だつて、そりやア無理だわ」と、女も抗ふ様に云つた。「ね、此方でも成程と思ふ迄信實を見せて呉れないんぢやア——女の方でも惚れよう惚れようとして居るんだけれど、それ迄通つて来る人がないんですよ。」

「何だ、其方で惚れる迄通へ」と云ふんか、少々押が強いやうだね」と云つたが、自分の方が可厭味の様にも思はれた。

其夜は十一時頃に切上げて戻つた。

歸りがけに、女が、「私から手紙上げて可い」と訊いた。

「そりやア手紙が來たつて構はないけれど、讀まん間から中味の分つてるやうな手紙なら、まあ貰はん方が可いね。」

「だつて、私には旨い事が云へないんですもの。」

「ぢや、私が教へて遣らうか。何なら此處にお

手本を書いて置くから、其通りに書いて送つて貰つても可い。」

「そんなんでも可いの」と笑つて居る。

「あゝ、手紙ばかりぢやない、二人向ひ合つて云ふ言葉でも、出来る事なら前に教へて置いて、其通りに云つて貰はうかとも思ふよ。世の中に私の思ふやうな返辭をして呉れる女は一人もない。私はそれが悲しいんだよ。仕方がなけりや、私の口寫しで、本人の心から出たのでなくとも可い、唯女の口から私の思ふやうな事が云つて貰ひたい。」

「随分面白いことを云ふのね。」

女は新造をかへり見て薄笑ひをした。

私は其儘表へ飛出した。何時になく興奮して、「諺でも可い」と口走つた。眞實のものがなけりや、諺で満足する外はない。私は諺に生きる様に生れたのだ、先方に實のない、此方ばかりの影に生きるのだ。

こんな事を寺へ戻る迄思ひつゞけた。其後私はしげ／＼大門をくぐる様になつた。年の内にも二三度行つた。何をしても三月迄だと云ふことも、私の足を近くした。

年が明けてから、十日餘り遠のいて、或夜十一時近く行つて見た。矢張座敷が明いて居た。何

時か女も云つて居たが、本當に客がないらしい。客と云つたら、私一人の様でもある。私の様な者の外には来る者がないのかも知れぬ。

「何だか寂しいやうだね」と云ふと、

「えゝ」と云つて、懐手の儘襟の中へ首をぢめながら、「それでも三月三十一日迄は辛い勤めをしなけりや成らぬのよ。」

私は女が可憫らしいやうな氣がした。

其居續けの朝、十時頃に目を覺まして、搔卷を被つたまゝ、長火鉢の側で茶を吸つて居ると、不圖、向うの座敷から三味線の音が聞え出した。私は思はず耳を敏てた。

「東雲さんの部屋へ清元の師匠が來て居るのよ。」

かう云つて、女も耳を澄まして居たが、「ああ、私も三味線でも出來たら如何か成るんだがね」と、打乗る様に云つた。

「ねえ、貴方」と、女は少して又私の注意を搔亂すやうにしながら、「私が此處を出たら二三日東京見物をさして呉れないの。私未だ淺草の近所しか東京を知らないのよ。」

「あゝ好いとも、そんな事位なら容易い御用だ。」

「だん／＼出て来るね。ま、それも可いとして、併しいよ／＼此處を出るとなりや、何處ぞに差支が有りやしないかい。」

「何ですつて」と大業に云つたが、急に又萎れて見せて、「餘り意氣地がない様だわねえ。滿六年の間こんな商賣をして居ながら、年期が明けても誰も引取手がないと云ふやうな。そりやね、私だつて長い月日のことだから些とやつとは可愛いとか憎いとか思つたこともあつたのよ。それが如何云ふものか今日迄續かなかつたの。私の方から振つたばかりでもないのですけれどねえ。まア因縁がないのでせうよ。」

私は何だか此女の言葉にも世相の一片が含まれて居るやうな氣がして、其儘聞捨てにもされなかつた。で、

「それぢや、此家を出たら差詰め如何する氣なんだい。私が訊く譯もないけれど。」

「えゝ、仕方がないから一先づ故國へ歸らうかと思ふの。今ぢや、まア左様思つてゐるのよ。」

私はうそ／＼と女の顔を見乍ら、「併し今更田舎へ歸つて暮せるかい。」

「だつて仕方がないぢやありませんか。こんな處に居りやこそ、かうして居るものの外へ出たら私なんぞに東京で口過ぎは出來ませんもの。」

成程、かう云ふ女を一人突離したら、如何成ることであらう。私の眼には、だん／＼暗闇から暗闇へ落ちて行つて、芥瀦の中に蠢いて居る女がうぢや／＼と見えた。

「まア、故國へ歸つて、當分兩親の手傳ひでもして暮しませうよ。」

「それも左様だね」と云つたが、「でも、兩親があるから可いや。家ぢや何をして居るんだい。」

「私の家? 私の家は刷毛屋よ。」

此後、女は私の顔を見るたびに、「最う七十日の生命ね」とか、「又五日減つたわね」とか、そんな事を繰回した。

「屹度見物をさせて呉れなきや可厭よ。私はそれだけが楽しみにして居るんだから」と、念を押すこともあつた。

私も此女に逢へなく成る日が近づくのだと思ひながら、又それが待遠の様に思はれた。此女に對してつくつた果敢ないロマン스가私にとつては最後のロマンズである——日に日に縮まつて行くと知りながら、私は其束の間の生命を樂しんだ。實際又期限が切つてあつて、將來がないと云ふことを外にしては、私のして居ることは只の女郎買ひに過ぎぬ。

二月の月は最も足繁く通つた。月の末に行

くと、女が「最う後二月よ」と云つた。
「それから私、少し無理なんだけれど、引祝ひがしたいのよ。」

「せずになつて済むことだらう。」

「え、だつて六年も引祝ひ一つしないといふのも、餘り意氣地がないやうだもの。それに五十圓も有つたら出来ることなんだから。」

「そんな金子は、私には出来さうもないね。」

かう云つて相手に成らなかつた。併し金子の都合さへ着いたら、何んな事でもして遣らうといふやうな腹もあつた。

三月は懷中の都合やら何やらして、大門をくぐることも間違に成つた。十三日の夜、宵に一寸行つた限りで、其後は顔も見せなかつた。女からは手紙で、

だん／＼日も迫つて來たので心配をして居る。それに、未だはつきり分らないけれど、かねて申上げてある日より三日前に出られるかも知れん。いろ／＼相談もあるから、是非一度來て下さいと云つて來た。如何も仕様がない。返事も出

すまいとは思つたが、騙して居たやうに思はれるのも可厭なので、

今は都合がわるい。それ迄には屹度行

と書いて出した。

其間に、二十五日を過ぎても、當にしたものが届かぬ。私は氣を苛立ちながら、一日々々と過した。時々如何でも可いといふやうな氣にも成つた。漸く一字も書いてない長篇物を抵當にして、本屋から金子を借りることにした。それが二十八日の夕方迄には持つて來るといふ、其日の朝である。私は又女から一封の手紙を受取つた。

いろ／＼御心配をかけましたが、私も今日お店を出て、只今お品どんの所へ引取りました。それに就いては、直き／＼お目にかゝつて御相談したいことも候故、此手紙着次第一度お越し下されたく侍入候。若し御都合わるいなら、私より御近所迄参りて、車やによんで貰つてもよろしく。只々御入らせの程待人候。日附は三月二十七日、笠岡たつと本名を書いて、別に千束町一丁目八十五番地高橋さく方としてあつた。

昨日廊を出たものと見える。それなら最う可いわと云ふやうな安心もあつた。新造の家を訪ねて行くと云ふのが可厭だけれど、兎に角、日に金子が手に入るのを待つて出掛けることに

した。

十二階の下から吉原病院の裏へ出る町筋で、二三度横町をまごつきながら、やつと目指す家を謳ね當てた。竹の出格子の前に立つて、ぐづ／＼して居たが、やがて思ひ切つて案内を乞ふと、

「何誰」と云つて、今迄洋燈の下に俯向いたまま、せつせと針を運んで居た娘が立つて來た。

「あの、此方に昨日吉原を出た女が居るでせうか。」

「薄水さんですか」と、娘も如才のない顔附をして、「え、居ますよ。ですが、只今阿母さんと一緒に仲店迄買物に出かけたんですがね。」

私は一寸當惑した。

「まあ上つてお待ちなさいましよ。直に歸つて來ますでせうから。」

「なに、それぢや其邊を彷徨いて、後に又來ますから、二人が歸つたら、私が來たと云ふことを云つて置いて下さい。」

「え、左様申します。」

私はあわてて其軒を離れた。掘井戸の流しに踏きさうにしながら表通りへ出た。別に行く處もないので、公園へ這入つて、觀音堂を一周した。其邊で逢はぬかとも思つたが、何うも

見掛けない。

やがて大分暇取つた積りで、又千束町の家へ行つて見た。矢張前の娘が出て来て、

「未だ歸りませんのよ。お氣の毒様ですね。何なら私の外に誰も居ませんから、何卒上つてお待ちなすつて。」

私も如何しようかと思つたが、到頭上つて待つことにした。娘は缺餅を出したり寫眞帖を出したりして取持つて置いて、又裁縫を取上げながら、

「これ薄水さんのよ」と、嫣然笑つた。
「ふむ」と云つたまゝ、私は只餘念もなく針を運んで行く手許を見守つて居た。

一時間許りして、やつと二人が戻つて來た。「大變お待ちせしたのよ」と、娘が出迎へると、

「左様か、そりや濟まない」と、お品さんは足袋の埃を拂ひながら上つて來て、「ついね、此人がもつと行かう」と云ふものだから、一足づつ兩國迄行つて仕舞つたの。何うも招待たせして済みませんね。」

かう云ふ間から、後ろで薄水のおたつが何やら云つたのを聞附けて、「なにさ、それで何の御利益もなしさ。本當に疲勞れ儲けで詰らない」とこれにも相手に成つて居る。

薄水は少し離れて坐つて、一寸日禮をしたま

ま兩手を膝の上に置いて居る。何時の間にやら圓筒にかはつて、黒縮緬の羽織を着流した容子が、どこか品好くも見えた。こんな所へ訪ねて來て、こんな風にして逢へば、何うやら深い仲

でもありさうな。私は何だか羞痒いやうな氣がして顔を背向けた。

お品さんは一人で陽氣に喋舌つて居たが、不意に話を止めて、「おやゝこんな事を云つてる間に喰く成つて仕舞つたよ。お前さん方何處かへ行くんなら早く出掛けなさらんか」と、女の方へ向いて、

「何だらう、お前さん其風姿で可いだらう。」

女は一寸自分の襟の邊りを見て點頭した。

「ぢや早くお出掛けなさい。私達は最う寝るから喰く成つても可いんだよ。」

二人は立上つた。お品さんは露路口まで送出して、私の袂を控へる様にしながら、「泊つても可いんですよ」と囁いた。

表通りへ出ると、女は袂から羽二重の襟巻を出して頸に巻きながら、肩を並べて、

「私、昨日出ると、直にあの手紙を書いて出したのよ。」

「だから、それを見て遣つて來たんぢやないか。」

「そりやア左様だけれど——」

「それよりも、おい、何處へ行かう。」

「私にはそんな事分らないわ。」

二人は往來の眞中に立停つた。

「困つたな。」

「何處でも貴方の行く處へ行きますよ。」

私は今頃こんな女を宿屋などへ連込むやうな氣はない。

「ま、可いや。兎に角何處かへ行つて、何か喰ふことにしよう。喰ひながら話をしよう。」

私は先に立つて、十二階の下から活動小屋の前を抜けて、奥の常盤へ行かうとした。

「此方の道を行きませうよ」と、女は急に傳法院の裏の小暗い所へ連れて行つた。「私や何だか他人に顔を見られるやうで可厭だから。」

常盤の座敷は何れもがら空きで、疊が寒さうに見えた。成べく小さい間を擇つて入れて貰つたが、女は直に私の暇褌口から紙幣を出して女中に遣つた。

「そんな事をする、直に素人ぢやないと見られるよ。」

「えゝ、何うせ左様見られてるんだから。」

私はそれでも可厭に思つた。かうして二人の

會合をつくる迄はいろ／＼待設けるやうな氣にも成るが、逢つて見りや、別に話もない、又話のあるやうな女でもない。

「何だらうね、それでも氣がのう／＼したらうね。」

「え、何が何だか未だ分らないのよ。」

私は又女が可憫らしくも成つた。

ぼつり／＼飲んで居たが、十一時頃に勘定をして立つた。女には折詰を持たせて、とにかく其夜は歸すことにした。人通りの絶えた暗い街を女を乗せた腕車が駈けて行つた。

次の朝、私は又女を連出した。

「何處へ行くのよ、今日は。」

「東京見物をさせて遣るのぢやないか。何處へでも、駄つて隨いて來たら可い。」

「え」と、女は何やら浮かぬ顔をして、「私昨宵歸つたら故國から手紙が來て居たのよ。」

「ふむ、それで？」

「それでね、何でも早く歸つて來いつて云ふんです。親爺が餘程性急に成つてゐるらしいから、私もね、寧ろ最う東京なんぞ知らなきや知らんでも可いから、一日も早く歸らうかと思つてゐるのよ。」

私は黙つて五六歩移したが、「で、何日歸らう

と云ふんだい。」

「明日にも、明日の夜汽車では如何でせう。」

「それでも可いさ」と云つて、又少時駄つて居たが、「如何だい、今日一日は私に呉れないかい。」

「おや、如何して」と、女は急に甘えた聲を出して、「明日歸るつたつて、それ迄は最う離れやしませんよ。」

「併し何だぜ、餘り好い所へ連れて行くんぢやないんだぜ。」

「何處でも可いのよ。」

二人は花屋敷の前から觀音堂の裏手へ出た。小さな祠堂の前に石の反橋がかゝつて、龜の子が幾つも朝露の目影に甲羅を干して居る。私は一寸其前に立止つたが、

「これが淡島明神と云ふんだ。女を護りの神様だと云ふからお詣りをしないか。」

「左様」と云つたまゝ、女は蝙蝠傘を簞錢箱に立てかけて置いて、帶の間から紙入を出して小錢を投げた。「一寸鰯口の綱に觸つただけで、手を合せて拜む。」

私は此方に立つて寢不足の眼をしばたゝきながら見て居た。不圖、あの女を連れ出して、最初新井の薬師へ行つた時のことが心に泛んだ。只

女を連れて名所廻りと云ふことも心を惹かぬではないが、實は此女が廊を出たら一所に三年前の舊跡廻りをしようとか、かねて心に思つて居たのだ——それに依つて、私の長いローマンズの大話の幕を閉ぢようとか。

「大それた折鶴ですええ」と、女は何心なく側へ寄つて來た。「天井一杯に下つて居るんですよ。それが皆青や赤や五色の紙で、尤も中には色の褪めたものもあるわ。」

「あれは皆女が上げるんだよ。一日に一羽宛折つて、百日の間に百羽上げると、大抵の願ひ事が叶ふんだとき。」

「左様、本當に。」

「まあ、左様思ふんだよ。」

私はずん／＼歩き出した。仲店を抜けて、雷門から電車に乗つた。上野で降りて、又山の手線に乗換へた。

「もし一寸、これは田舎へ行くんぢやないの。」

「あゝ、田舎に好い所があるんだよ。」

「左様」と云つたまゝ、女は別に深く訊ねようとしなかつた。

私も物を言はなかつた。二人並んで腰掛けながら、成べく顔も見ないやうにした。かうして女を連れて歩く。女は何處へ連れて行かれると

も知らぬ。あの時も左様であつた。あの時も。時々女が身動きをするたびに、衣擦れの音を夢の様に聞きながら、私は一種の不安をおぼえた。私は殆ど現在を忘れた。

やがて電車が新宿へ着いた。人込の中にまごまごして居る女の手を引張りながら、又中野行の電車に乗移つた。間もなく終點へ着く。

「此處だよ」と、私は先に立上つた。

「左様、最う來たの。」

何處へ連れて行かれるのか、行く處迄行くんだと云ふ了簡で尻を落着けて居た女は、不意に左様云はれたので吃驚したやうな顔をして居る。

「さア、早くするんだよ」と、急ぎ立てる様にして停車場の外へ出た。

「そんなに急いたつて歩かれないのよう」と、女は足許を氣にしながら畑中の小路を隨いて來る。

私はそれでも足を早めて薬師の門前へ來た。三年前と物の様子も別に變つては居なかつた。山門には鳩も居る。豆賣の婆さんも未だ生きて居る。御堂の中には蠟燭の裸火が行列をして、香の煙が渦を卷いて居る。今日も又しつとりとした土の上を木の葉の圓い蔭が鮮やかに匂ふやう

な穏かな日である。すべてが元の儘である、元の儘である。

「此處は何様が祭つてあるの」と、女は鰯口の下に立つて禮拜をしてから私の方へ向いて訊いた。私は女の顔を見詰めたまゝ返辭をすること

も忘れた。

「何處か浅草の觀音様のやうねえ」と、何氣なく四邊を見廻して居る。

「あゝ、これは薬師さんだよ。」

私はやつと氣が附いた様に云つた。

「左様、お薬師さんなの」と、矢張彼方此方見廻して居たが、「あれ、一寸あれを御覽なさい」と、急に私の袖を掴んで引張りながら、「あれは何でせう、あれが業の細と云ふんでせう。女の髪のもで纏つた細——何だか怖らしいやうだね。」

かう云つて、女は尻足する様にした。

「なに、あれは何だよ、目の悪い女が自分の髪を切つて薬師様へ上げる、それが段々溜ると、あゝして繩に纏つて仕舞つて置くんだよ。何しろ何十年と溜つたんだから、あんなに成るんだね。」

「だつて、可厭なものね。」

「ぢや、最う此處を出よう。」

私は裏門の方へ出て行つた。女も別に不足な顔もせず隨いて來た。少時村中の生垣について歩いたが、やがて田圃の中の街道へ出た。三年前に通つた道を其儘跡附けようとするのである。

「あゝ、今日こそ本當に延びくするわねえ」と、女は襟んだ蝙蝠傘を眼の上に翳しながら、

四邊の景色を見渡した。

雑木林が霞んで、圃の麥が青う生びて居る。

何處からともなく、ちよろ／＼と水の音も聞える。

「あゝ、これがあの女なら——あの女であつて呉れたら。」

私は並んで歩きながら幾度も心の中で叫んだ。私は今こんな事をして居る。こんな事をしてやつと生きて居る。あの女は何をして居るだらう、今の今、何をして居るだらう。

私は堪らないやうな心持に成つた。石でも木でも可い、何でも可い、冷たい堅いものが抱緊めて見たい。

橋の袂迄來ると、つと女を遣過して置いて、

路傍の草の中に足を投出して仕舞つた。

女は其儘氣も附かずに行つたと見えて、少時して、「おや」と振回つた。

「如何したの、貴方」と、立つて居る。
少時左様して待つて居たが、餘り私が立つて
行かぬので、又側へ戻つて來た。

「本當に貴方は酷いよ、私を一人遣つてさ」と、
肩の間から顔を覗き込むやうにしたが、私は物を
言ふ氣もなかつた。

女も其處に踞んだまゝ、黙つて、靜乎と待つ
て居た。やがて、

「もし」と、前とは丸で違つたおづ／＼した聲
で、「如何かなつたの、えゝ？ 心持でも惡
いんぢやないの。」

それでも、なほ押黙つて居た。

「如何なの。私には云はれない？」

私は急に振回つた。凝乎と顔を見合せて居た
が、つと其頭を抱へて——女も私を支へようと
した手で、堅く私の着物を掴んで居た。

やがて私は女を突離す様にして、其儘青草
の中に顔を埋めて仕舞つた。

其夜、銀座裏の宿に着いた時、私は女に向つ
ていろ／＼言譯がましいことを云つた。

「さぞ驚いたらうね。如何かすると、私はあんな
風に成るんだから——心では別な事を考へて
居ながら、ついあんな事をして仕舞ふ。」
こんな事も云つた。こんな事を云ふ位なら、

云はぬ方が優しだとも思つた。

「構ひませんよ、あんな事」と云つたまゝ、女は
別に口を利かなかつた。

如何いふものか、彼時から言葉少なに成つた。
夜店でも見に行かうかと誘つたが、それにも應
じなかつた。そして、早くから寝ることにした。

寝る時に、寧ろ本當の事を話して仕舞はう、あ
の女の事も打明けて話さうかとも思つたが、又
思ひ返して止めた。

明くる朝、女の方から、「最う東京も見たく
ない。疲勞れて外を歩く位なら、此處にかうし
て居る方が可い」と言出した。

それでもお品どの所に預けてある荷物も持
つて來なけりや成らぬし、土産物も最少し買ひ
足したいと云ふので、午頃から一人で出掛ける
ことにした。私は買物だの、汽車賃だの、お品ど
んの家で厄介に成つた禮だの、それから歸つた

當座の小遣錢などを見積つて、若干の金子を
女の手に渡した。

「まア、それだけにして呉れ。私も明日からの
小遣が要るから。」

「これだけで澤山ですよ。いろ／＼何うも御迷
惑を掛けて済みません。」
女の出で行つた後で、私は物に追かけられる

やうな、靜乎として居られぬやうな心持もしな
がら、矢張其宿屋にごろ／＼して居た。

夕方、女は大きな行李を脇車に積んで戻つて
來た。お品ども、其娘も見送りに隨いて來た。
四人一緒に夕飯を喰べに近所迄出かけたが、切
符も行李も宿屋の番頭に頼んで置いて、銀座の
夜店を見ながら、停車場の方へ歩いて行つた。

四人に成つてからは、別に話をする機會もなかつた。

午後八時の夜汽車で立つことにした。いよいよ
汽車に乗る前に、女は私を片蔭へ呼んで、
「着いたら直に手紙を出しますよ。貴方も時々
おたよりを聞かして下さいな——私、何だか最
う一度お目にかゝれるやうな氣がして成らんの
よ。」

「有難う。併し私からは手紙は出さんよ。ま
ア、先の事は約束しない方が可い。」
かう云つて、私は笑ひながら手を離した。

間もなく汽車は出た。お品母子は二三間並出
して迄見送つた。私はほつとして踵を回した。
出口の石段の上に立つて居ると、

「おゝ、小島君ぢやないか」と、背後から來て、
私の肩を叩いたものがある。見ると、それが神
戸であつた。

「お、暫く」と云つたが、實際神戸とは暫く疎々しく暮したので、私の方からは極りの悪いやうな思ひもした。

「本當に暫くだつたね」と、神戸は心置なく物を言ひながら、「君歸るのか、歸るのなら一緒に歸らう。」

二人は連立つて石段を降りた。後の二人は遠くから目撃をしたまゝ、何處かへ消えて行つた。銀座街まで来ると、神戸が振回つて、「如何だ、別に用事がなかつたら、最少し話して行かうぢやないか」と言ひ出した。

「左様だねと、二人は又街の角のビーヤホールへ這入つた。

二人は麥酒を飲みながら話した。話の種は麥酒と共に盡きなかつた。それでも、神戸はあの女の話には觸れない様にした。私も素より口にしなかつた。

其處を出たのは十二時に近かつた。須田町迄来ると、最う江戸川行の電車がない。神戸も其處で降りて、一所に歩いて歸らうとした。

夜の街は静かであつた。

神戸は線路の上を歩きながら、

「あの女が此頃ちよいと僕に許へ来るよ。素晴らしい風姿をして——如何したのか。」

「如何したんだらうね。」

私はこんな返辭しか出来なかつた。

「併し彼の時分から見ると、あの女も歳を取つたよ。今ぢや未だ歳を取つて却て美しく成つたやうだが、女は變るものだね。」

他人からあの女の噂を聞くのが、私は只怪しいやうな心持がした。

神戸は又言葉が続けた。「それにしても、何時迄あゝして居る氣なのか、いづれ一生あゝして居る積りだらうが、それぢや堪らないね。殊に君は一層左様だらう。あんな事をして居られては、君の落着く時はない。」

私は黙つて線路の敷石の上を歩いて行つた。

「實際あの女の心持は僕にも分らないね。自分では大に分つてゐるのだらうが、側から見ると、矢張分らない」と云つたが、聲を低うして、「併し何だね、男が女のために苦しむのは、決して女から嫌はれるためぢやない。女は決して男を嫌ひはせぬ。只愛するとも云はぬ。又愛せぬとも云はぬ。偶々近寄つて来て意味のあるやうな事を云ふかと思ふと、又元の所へ戻つて、平然として居る。如何してあゝ平然として居られるかと思ふ程平然として生きて居る。それも何が生甲斐のあるやうなことを遣つてゐるのなら

可い。それなら此方が諦めもする。左様ぢやないんだ、左様ぢやないんだから困る。かうして有哉無哉の間に釣つて置かれるのが一番辛いんだよ。」

神戸は何時の間にやら自分のことを云つてゐるらしい。私の事を一所にして話して呉れるのは——私の最う女の心が分らぬと云ふのではない、それだけに値しない——あの男の好意であらう。で、

「君のあの女は如何してゐるんだい」と訊いて見た。

「如何もしない。あの儘だ、あの儘に生きて居る。僕はそれで餘り堪らなく成ると、寧ろ向うで僕を捨てて呉れたらと思ふよ。如何云ふ手段でも可いから左様云ふ意志を明白に示して呉れたら——そしたら、とにかく片が附く。時には死んで仕舞つて呉れたらと思ふことさへある。」

だん／＼酒の酔が醒めて來たので、神戸の聲は鋭かつた。私は只聲を呑んだ。

「そんな殘酷な事さへ思ふことがあると、神戸は薄笑ひを洩しながら、

「併し女は死にせぬ、捨ててもせぬ。只、此處に女が歳を取る——女の頭に白髪が生えたと

云ふことは、男性が女性に對する唯一の復讐だよ。男性全體が女性に對する復讐だよ。」

かう云ひ切つて、少時黙つて居たが、「君も左様思つてゐるんぢやないのか。」

「そりや僕だつて」と、私は訥りながら、「僕の生きてゐるのはあの女が生きて居るからだ。あの女が生きてゐると云ふ外に、僕の生きて居る理由は一つもない。」

神戸はしばらく黙つて歩いた。私も黙つて足を運んだ。

やゝ有つて、又神戸が言出した。

「併し時には只ナイフに逢ひたいことがあるよ。君でも同じことだらうが、一目でも可いから顔が見たい、逢つて聲が聞きたいと思ふことがある。」

「他所ながらでも」と、私は思はず附け足して云つた。

「それと同じ様に、矢張夫婦に成りたい。正直に云へば、夫婦に成つて暮したい」と、神戸は自分の云ふことだけ續けて云つた。「そりや直に飽きて仕舞ふだらう。こんな位なら最初から一所に成らずに、あの儘で居た方が可かつたと後悔するのは目の前に見えて居ても、矢張夫婦に成りたい。そして女にも愛想を盡かし、自分も

後悔がして見たい。」

二人は街の真中に立つて手を握り合つた。神戸も興奮して、云ふことが一々私の代りに云つて居る様にも思はれる。何も彼も知合つた昔の友は矢張懐かしい。

「おゝ、最う水道橋へ来た」と云つて、神戸は立停つた。「ぢや、此處で別れようか。」

「今夜は併し面白かつた」と、私は二たび手を出した。

二人は堅く握り合つた。

やがて、神戸は其處に客待をして居る腕車に乗つた。私は濠についてとぼくと戻つて行つた。

十四

毎日、うつら／＼として目が経つた。何も考へまい、何も思ふまいとした。考へることも、思ふこともないやうな氣もした。滅多に部屋の中からも出なかつた。

一週間許りして薄氷から音信があつた。それは只無事に着いた知せと、世話に成つた禮とで、固より心にとまるものでもない。

恰度四月九日午後一時頃のことである。私は錢湯の戻りに神樂坂迄用達に行つたが、坂の

下から鈴を鳴らして、二三人號外賣が走つて来る。近頃珍らしいなと思つたが、其儘氣にも止めなかつた。歸り途に、不圖氣が附くと、電信柱の前に人だかりがして居る。何心なく立寄つて見ると、今の號外が貼附けてあつて、「吉原大火、江戸町二丁目より出火し、今尙延焼中」とある。私はわけもなく胸が轟いた。

朝からどんよりして生暖かい風の吹く日であつた。私は部屋の中に坐つて居ても、始終吉原の火事が氣がかりで落着かれない。第二第三の號外が出る。其たびに一々それを買はせて見た。午後四時頃には風上の京街にも延焼して、大黒樓にも火が／＼つた。風下は五十間を擁拂ひ、吉原堤を越え山谷方面にも飛火して、今や殆ど帝都の北門を嘗め盡さうとして居る。終に軍隊の出動を見とあつた。

あゝ、吉原が減びると、何となく人の心に一種の感慨を傳へて行く。兎に角、二百年の歴史を持つた色街である。あれで崩れたとは云へ、あの位傳説と習慣とで堅められた色街が、他所の國にもあらうか。國の誇りに成らぬかも知れぬが、誇りに成らぬ誇りである。私は一人でしみ／＼と舊いもの残びて行く殘惜しさを味つた——恰度、一本だけ残して置いた古

い馴染の文を失くしたやうな。

日暮に、何と思つたか梵妻が窓の側へ立つて、

「吉原が火事ですつてねえ。此處からぢや駄目ですけれど、表の坂へ出て御覽なさい。眞黒な煙が空一杯に見えて、そりや凄まじいものですよ。」

「こんな處から見えるなア雲ぢやないのですか。」

「えゝ、雲ですか煙ですか、何しろ大變なものですから、一遍見て被入しやいよ。」

私は別に出て見る氣もなかつた。

梵妻は一寸張合が無さうにして、

「何ですか、南千住が危いと云ふことですなえ」と云ひ足した。

明くる朝、新聞を見ると、一面大火の記事で埋めて、浅草の地圖を挟んだのが、大半眞黒に塗られて居る。女郎の逃げ惑ふさまや、消防や救助隊の活動振が挿畫迄添へて載せてある。思つたよりも一層酷かつたらしい。

私は十日前に扉を出た薄氷のことを思ひ遣つた。昨夜からもたび／＼それを思つた。六年も居ながら、僅かのことで此災難に遇はずに済んだのが何うやら偶然とも思はれない。あの女が

折ふし「私は東京には居ない」と云つたことも思ひ合された。

其日の午過ぎ、私は到頭煉塙を見に出かけた。坂本の通りを眞直に行つて、惣神社の傍から曲らうとしたが、巡查が立つて居て這入らせない。又一二町行くと、其處から千束町の方へ抜かれる。私は大勢の彌次馬の後に隨いて行つた。

「何々樓立退場」と云ふ札を立てたのが幾つもあった。女郎が薄汚れた顔をして、夜具に凭れながら、所在なげに往來の人を見送つて居るのも見受けた。其中に「信濃善立退場」と云ふ札も目に留まつた。吉原病院の裏手へ出ると、木柵の間から一面に焼跡の赭い土が見えた。所々土藏の焼け残つたのが、ぼつくり立つて居るのも、一しほ荒涼の氣を添へる。未だ壁の下から壘の積んだのからぶす／＼と煙が出て居るものもある。それでも場所だけに大方板圍ひをして、其上に樓の名を染出した旗がはた／＼と風に靡くのも物寂しい。

私はそれから吉原堤の上へ出て見たが、只見渡す限りの焼野原と云ふ外はない。直に又千束町へ引回した。此邊にお品さんの家があつた筈だと、潤に添うて、二三度露路をまごつきながら、やつと訪ね當てた。格子の外から聲をかけ

ると、同居主らしい婆さんが顔を出して、お品さんは大黒樓の寮へ行つて居ない、姫も留守だと云つた。

「それでもお品さんは恰度家へ歸つて居たら、好い鹽梅に火事には遭はなかつたでせうね」と訊くと、

「好い鹽梅なら好いんですが」と、口をものが／＼させながら、「折も折、昨日の朝又お店の方へ戻つたんですよ。戻ると直にあの騒ぎでせう。眞情可哀想だつたら有りませんや。」

「左様か、そりや如何も」と云つたが、別に言樣もない。遂つたら宜しく云つて呉れと言ひ残して、念の爲に寮の所在を聞いて其處を出た。

又ぶら／＼と歩いて山下迄來た。恰度日が暮れたので、甲子へ這入つて夕飯を喰ひながら、不圖、上野の山にあるといふ大黒屋の寮を訪ねて見る氣に成つた。

「まあ這入りにくかつたら、他所ながら見て來るだけでも可い」と一人言つて、木蔭の坂を上つて行つた。

圖書館の側を入つて突當つた角に、二階中時ならぬ明りが點いて、わや／＼と女の聲のする家がある。此處らしいなと思つて、つと立寄らうとすると、門の前に一人の男が先へ來て立つ

て居る。途端にぱた／＼と梯子段を駆け降りる音がして、一人の女が上草履のまゝ、「あれ、吉村さん」と、突然其男の胸元へ縋りついた。

「まあ今度は大變よ。私達も着のみ着の儘で、かうして居る外に着替へ持つて出ないので。もの。餘り心細いから、今恰度貴方の所へ手紙を書いて出さうとして居た所なの」と、袂から皺になつた紙片を出して、それを開めながら兩手を合せる様にして、「本當に好く來て下さつたわねえ。」

それにつれて男が何やら云つて居る。私はそつと暗がりの方へ立退いた。そして、生垣について足早に其處を去つた。

やがて足を弛めながら、「俺も最う東京に用はない」と、不圖こんな心が浮んだ。

あの女の心が分らぬと云ふが、それも最う分らぬ度を越して、私にさへ何の味ひもない。あの女が生きて居るから、自分も生きて居る。あの女の住む所に住んで居る。そんな意地を出して見た所で今更何に成らうぞ。又そんな意地になんて生かされるぢやない。そんなぢやない。それよりも故國へ歸つて、最う一遍静かな所で寝

て見たい。久し振に母親の顔も見たい。

私はあんなにきれながら、矢張あの女のことを好く思つて居る——他人から見たら見苦しかうが、心の底ぢや、矢張好意を持つて居る。そんな仕業のない好意の、これが最後の表示として、私は東京を去らう——東京を。

本氣で左様極めたと云ふでもなく、又極めぬでもなく、それでも考へることだけは一心に考へつづけた。そして暗い町、暗い町と擇つて歩きながら、當もなしに彷徨つて行つた。

「何時お歸りなすつたんです。私は又——と、梵妻が云ひ掛けた時、急に想ひ出した。私は寺へ歸つたのだ。寺へ歸つて、自分の部屋に坐つて居るのだ。

「私や又、玄關の月も明いてるし、洋燈も宵の儘とぼつて居たものですから、如何なすつたかと思つて——」

私は俯向いたまゝ、只「えッ／＼」と顎で返辭をして居た。併し向うが云ふだけのことを云つて仕舞つてからも、何と返辭をして可いかわからない。

二人ともまじ／＼として、少時話が絶えた。「最う何時でせう」と、良あつて、私から言出した。

「左様ですけれど、一寸背後を見返るやうにしたが、最う晚いんですよ。一時過ぎ彼は二時にも成りませうか。」

「そんなものでせうね。」
左様云つたまゝ、又候一人で考へ込んで仕舞つた。

「最うお臥みなさいましな。寢床を取つて上げますから」と、梵妻は襖の蔭に立つたまゝ云つた。

「え、寢ませう」と、我ながら無愛想な返辭が出た。

「御免なさいましよ、こんな旨い服裝をして」と云ひながら、身體で襖を押開ける様にして這入つて來た。成程、寢巻に細帯一つで、勝手知つた押入から夜具を出して敷いて呉れるのを、私は只まじ／＼と見守つた。何だか、日頃から餘り好かない様に思つて居た此女までが、今夜は取分け懐かしい。私の物の言ひ様に依つちや、此女でも年寄つた夫を捨て、三人の子供を残して、私と一緒に走らないとも限らぬやうな氣もする。

「さ、早くお臥みなさいな」と、梵妻は夜着の足許の方へ廻つて、一寸叩き附けながら、襖の蔭に置いてある洋燈を取上げようとした。

「あの」と、私は遽（さ）で呼（よ）び留（とど）めた。「あの、明日（あした）の朝（あ）五（ご）時（じ）が打（う）つたら、直（す）に起（お）して下（くだ）さいませんか。」

「五（ご）時（じ）に？」と可（げ）ずなやうな顔（か）をして、「何（なん）處（ところ）かへいらつしやいます。」

「え、一寸（いちじゆん）故郷（こきやう）へ歸（かへ）つて來（こ）ようかと思（おも）つて。」

「あゝ左様（さやう）ですか——宜（よろ）しう御座（ご）います。」

「それぢや、何卒（なんぞ）五（ご）時（じ）には間違（まちが）ひなく。」

「え、大（だい）丈夫（じやうぶ）ですよ」と、片手（かたて）に洋燈（やうてい）を持（も）つて立上（た）つた。

「あの——それから此（こ）事は、後（あと）で訪（たず）ねて來（き）る者（もの）があつても、誰（だれ）にも仰（おほ）有（あ）つて下（くだ）さらぬやうに。」

「故郷（こきやう）へお立（た）ちに成（な）つたと云（い）ふことですか。」

「え、左様（さやう）です」と云（い）つたが、枕（まくら）妻（さい）の何（なん）やら腑（は）に落（お）ちなごうな笑（わら）ひ顔（か）を見ると、私は又（また）むきに成（な）つて頼（たの）んだ。何（なん）度も同（どう）じ事（こと）を繰（く）り回（か）して、しつこく念（ねん）を押（お）した。

「大（だい）丈（じやう）夫（ぶ）ですよ、そんな（なん）に仰（おほ）有（あ）らなくとも」と、枕（まくら）妻（さい）も終（お）にじれつたさうな返（へ）辭（じ）をしたが、其（その）儘（まま）部（ぶ）屋（や）の外（そと）へ出（で）て、そろゝと襖（ふすま）を閉（し）めながら、

「それぢや、最（も）うお臥（ふ）みなさい。」

「お臥（ふ）みなさい」と、聲（こゑ）に應（こた）へて云（い）つたものの、枕（まくら）妻（さい）の姿（すがた）が襖（ふすま）の外（そと）に隠（かく）れると、私は急（いそ）に最（も）う一度（いちど）喚（わ）び返（かへ）して顔（か）が見（み）たいやうな氣（き）がした。

如何（どう）云（い）ふ譯（わけ）だか、私（わたし）にも分（わ）らない。私は只（ただ）胸（むね）一杯（いっぱい）に成（な）つて居（ゐ）た。

大團圓

次（つぎ）の日の夕（ゆふ）ぐれ、私（わたし）は鞆（たもと）一つ持（も）たずに手（て）ぶらで岐（ぎ）早（はや）の停車場（ていしやうば）へ降（くだ）りた。僅（わずか）か許（ゆる）りの書（しよ）物（ぶつ）と身の周（まわ）りのものとは、そつくり其（その）儘（まま）あ（あ）の寺（てら）に捨（す）てて置（お）いた。何（なん）とも言（い）ひ残（のこ）しては來（こ）なかつたが、一（いち）二（に）年（ねん）も持（も）主（しゆ）があらはれなかつたら、其（その）間（ま）には如何（どう）かして呉（くれ）れるだらう。此（こ）後（ご）、總（そう）令（れい）何（なん）處（ところ）で暮（く）すにしても、最（も）う諸（しよ）道（だう）具（ぐ）なぞのある身（み）には成（な）りたくない。

私は改札口（かいさつぐち）で驛（えき）夫（ふ）に切符（きふ）を渡（わた）さうとして、不（ふ）圖（ず）に吉原（よしかは）を出（で）た女（おんな）のこゝろに泛（ふ）んだ。あ（あ）の女（おんな）も、十（じゆ）日前（ひまへ）には、此（こ）處（ところ）を通（とお）つて、此（こ）欄（らん）干（かん）にも手（て）を觸（ふ）れたらう——が、直（す）に又（また）思（おも）ひ返（かへ）して、車（くるま）夫（ふ）を喚（わ）んだ。最（も）うあ（あ）の女（おんな）にも用（よう）はない筈（はず）である。

長良（ながら）の橋（はし）を渡（わた）つて、町（まち）を出（で）外（が）れた辻（つじ）堂（どう）の前（まへ）で腕（うで）車（くるま）をかへした。それから長（なが）い堤（つゝみ）の上（うへ）を一人（ひとり）てくゝと歩（あ）ひて行（い）つた。堤（つゝみ）の片（かた）側（がは）は何（なん）處（ところ）迄（まで）も笹（ささ）がづいて、片（かた）側（がは）は青（あお）麥（むぎ）の畝（うね）がほの黒（くろ）く夕（ゆふ）風（かぜ）に靡（な）いた。見（み）ると、腰（こし）の屈（か）んだ農（い）夫（ふ）がのそ

のそと堤（つゝみ）の上（うへ）のぼつて來（き）て、一寸（いちじゆん）春（はる）延（の）びをしながら、自（じ）分（ぶん）の前（まへ）をせかゝと村（むら）の方（かた）へ戻（もど）つ

て行（い）く。私はわざと歩（あ）調（てう）を緩（ゆる）めて、其（その）爺（や）さん（おやさん）に追（お）附（つき）まいとした。

やがて、又（また）一（ひと）人（ひとり）畑（はたけ）の畔（はたけのへ）から唐（から）鋤（あ）を擔（か）いだ男（おとこ）が、其（その）後（あと）に手（て）甲（が）を穿（か）めた女（おんな）房（ばう）らしいもの

つゝいた。そして、前（まへ）の爺（や）さん（おやさん）と出（で）會（あ）頭（かぶ）に何（なん）やら聲（こゑ）を掛（か）けた。私は思（おも）はず足（あし）を留（とど）めた。村（むら）には一面（いちめん）に夕（ゆふ）露（る）がかゝつたが、何（なん）處（ところ）からでも目（め）標（ひょう）に

された自家（自家）の裏（うら）の大（だい）槻（き）が見（み）えない。私はこんな事（こと）にも胸（むね）が諱（が）いた。

又（また）そろゝと歩（あ）き出（で）した。村（むら）の取（と）附（つき）の一（ひと）軒（けん）家（が）では、背（せ）戸（こ）から竈（かまど）の火（ひ）があかゝと見（み）えた。何（なん）處（ところ）であらう、竹（たけ）數（かず）の向（むか）うから赤（あか）子（こ）の泣（な）く聲（こゑ）も

聞（き）えた。それが斷（た）れどゝに、弱（よ）く、さ（さ）も悲（かな）しげに泣（な）く。何（なん）時（とき）迄（まで）も泣（な）く。幾（いく）許（ゆる）他（た）の事（こと）に心（こゝろ）を向（む）けようとしても、如何（どう）しても其（その）聲（こゑ）が耳（みみ）につ（つ）いて離（は）れない。

私の心（こゝろ）は遠（とほ）い昔（むかし）にかへつた。高（たか）い木（き）の梢（さへ）で、夜（よ）なな赤（あか）ん坊（ぼう）が野（の）食（じき）に血（ち）を吸（す）はれて泣（な）くと云（い）ふ、子（こ）供（ご）の時（とき）に聞（き）いた話（はなし）も想（おも）ひ出（で）された。村（むら）の中（な）程（ほど）の十（じゆ）字（じ）街（が）へ來（き）て、前（まへ）の三（さん）人（にん）が横（よこ）へ反（さ）れたの

を見（み）ると、私は思（おも）はず驅（か）け出（で）した。

家の跡（あと）は一（いち）見（み）に見（み）違（まちが）へる程（ほど）明（あ）るく成（な）つて居（ゐ）た。邸（てい）の周（まわ）りを取（と）り取（と）いた木（き）立（た）も伐（き）り拂（は）れて、只（ただ）桑（さ）畑（はたけ）の中（な）に、立（た）ちの低（ひ）い母（はは）屋（や）と掘（ほ）井（い）戸（ど）の屋（や）形（がた）

だけが残つて居た。勿論、土蔵も門も何處へ行ったやら影さへ見えない。思へば、音信も途絶えがちな、丸三年の留守の間、母親はそんな物でも賣つてかつゝ、生活を立てて居たのであらう。

私は少時屋敷跡の空を見上げたまゝ、立つて居たが、又思ひ返して、前の板橋を渡つた。そして、草に埋もれた敷石傳ひに母屋の軒下へ近づいた。其時、家の中から入口の開き戸を開けて、つと出て來た白髪の婆さんがあつた。其顔に見覚えがない。向うでも私を見知らぬのか、じろじろと私の顔を眺めて居たが、やがて地面につ附く程頭を下げて、其儘表の方へ出て行つた。私は入れ違ひに土間へ這入つた。

土間の中は眞暗で、一足動いても、柱に打突かりさうな氣がした。私は少時間の中に目を凝らして居たが、不圖、中の間の杉戸を洩れて、佛間から微かな光が射して居るのに氣が附いた。それを目當に物をも言はず、つかゝと上つて行つて、闕の上に立つたまゝ奥を覗き込んだ。佛壇には、丁字の立つた燈明が一つ消え残つて居るばかりで、部屋の間々が妙に薄暗い。それでも、段々暗がりに慣れて、佛壇の前に何やら蠢くものが眼についた。一人の老婆が幾枚も蒲

團を積んで、それに背を凭せて寝て居るらしい。顔を見ると、それ程年を取つて居るやうでもない。圓々と子供らしい顔をして居るが、頭髮は一筋も残さず眞白に見えた。向うでは早く此方の姿が眼に附いたと見えて、頻にお叩頭をして居る。私は二足三足側へ近づいたが、思はず、
「阿母さんか」と喚んだ。

矢張お絹だ、三年前に別れた母親のお絹に相違ない——あゝ、この變り果てたことわい。
「誰だと思つたら、阿母さんか。私ですよ。只今東京から着きました。」

それが耳へ入つたのか入らぬのか、老婆は前と同じ様に繰返してお叩頭をして居る。

「如何したのです、え？ 私が分らないのですか。」

斯う云つて、やをら老母の肩に手を掛けたが、俄に悪い前表でも見附けたやうに、胸の動悸が打出した。私は凝手と其顔に見入つた。

何日か一度中風に罹つたとは聞いた。半身不隨の難病だとは聞いても、其後格別便りもないので、心には掛りながら忘れるともなく忘れて居たが、彼時からこんな事に成つて居たのか、こんな、現在我子の見界も附かぬやうな、手頼ない有様に成つて仕舞つたのか。

「ね、物が言へるんですか。物を言つて下さい、何とか言つて下さい。」

私は老母の冷たい手を握つたまゝ、只遺漸なしに搖振つた。搖振りながら、たら／＼と涙が頬に傳はつた。

老母はけりりとして相手の顔を見て居る。

私は思はず其手を離した。感覺のない腕はぐたりと肩から垂れ下つた。それを見ると、私は思はずよ／＼と立上つた。誰か來て呉れぬか、誰か來て譯が聞かして貰ひたいと思つたが、其儘又其處へ倒れて仕舞つた。

あゝ、子は終に親の側へ歸つた。私は最う何處へも行かない、何處へも行く所はない。

(明治四十三年)